

ただのモブで終わる筈だった。

食べる辣油

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

読んでた作品は更新されず、楽しみだつた作品は消え、読み始めた作品は突然姿を消す。

絶望の淵に立たされた際に、未練を捨てきれず自分で書けば良いと思つてしまつた。

反省はしているが後悔はしていない。

#8	#7	#6	#5	#4	#3	#2	#1	始 まり	#1 1	#1 0	#9	#8	#7	#6	#5	#4	#3	#2	#1	原 作 前	#2	#1	後 日 談
78	73	67	63	59	55	52	48		45	41	37	34	31	26	23	20	17	14	11		5	1	目 次

#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	9
9	8	7	6	5	4	3	2	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	9	8
226	217	206	196	187	180	174	165	157	148	142	136	131	126	120	113	107	102	95	89	83		

後日談

1

いつからだつたか、三影がよく家を訪れる様になつた。

長期の休みとか、夏休みの合間とか、学校が早く終業した日とか、割と家に出入りする事が多くなつてきた。

別に赤の他人じやないから断る理由もないし、対戦ゲーやつたりホラゲーやつたり、たまに親父の秘蔵フィルムから映画借りて鑑賞したりするくらいだけど。

「入つて 大丈夫？」

「うん。くつろいでつて」

で、今日も遊びに我が家を訪れている。

しかし、今回はただ遊びにきたのではない。

三影もLBXを買つてもらつたと言うので、お互にどんなものかを見せ合う事が目的だ。

自分の場合は買つてもらつたと言うより、共同作業で作つてもらつたんだけども。

「じゃ、私から」

先に三影が鞄から取り出す。

機体はアマゾネス。ストライダーフレームでクノイチで有名なサイバーランス社製ではなく、タイニーオービット社が出している女性向けのLBXだ。

最初はナイトフレームを中心に出していたタイニーオービット社だが、まだ手をつけていなかつた女性シェアをサイバーランス社のクノイチに搔つ攫われてしまい、負けじと開発された経緯がある。

性能は別段クノイチに劣つてゐるわけでもなく、射撃もこなせて格闘もできるナイトフレームよりな性能でクノイチと差別化を図つている。

「アマゾネスか」

「最初はクノイチ。でも 扱い辛かつた」

やはり難しいみたいだ。

ゲームだとフレーム載せ替えでパパッと扱えるが、現実はそうもないらしい。

「悟のは？」

「ああ、ちょっと待つて」

クローゼットの中からダンボールを引っ張り出す。

家で作った訳じやないし、車での移動だからダンボールと中を紙屑の緩衝材に満たして厳重に梱包したから、少し出すのが手間だ。

「これ」

我ながら渾身の出来栄えだと自負している。

ツインアイでありながらどのフレームにも属さない顔付きに、ティターンズカラーを意識したブルーの塗装。

頭部のV字アンテナが特徴的ない機体だ。

武装はまだないけど、ここにバルカン ライフル サーベル。あと追加でバズーカを持てるから今だとかなり重武装の機体になる予定だ。

「どこの？」

「いや 親父と一緒に造ったんだ。見てみる？」

「うん」

物珍しいのか、三影は手に取つて裏に表にと観察する。

そういうや、ハンドメイドのオリジナル機体つて今だとまだ珍しい方だつたか。

敵中に虜囚の身でありながらLBX設計して外部に送信したり、爆弾造つて脱出したと思ったら悠々と世界大会に我が物顔で参加する世界の敵を除けばだが。
山野淳一郎

あれ、絶対声でバレるでしょ。

「これ ナイトフレーム？」

「建前上はナイトフレームだけど、割とブロウラーフレームも使つてるからどつちでもいいんじゃないかな？」

実際問題、大会とか「出るとして所持機体の登録の時つてどうする

んだと言う問題はある。両方書くのかな？

「動かせる？」

「うん。出来るけど、装備が出来てからの方がいいかなあ。見栄え的にもそつちの方が格好いいし」

それに武装なしで屋外で動かしたら拗らせた思春期の少年に腹いせに強奪される可能性もある。

多分郷田が許さないタイプの不良少年だろう。

紛いなりに空手やつてるからなかなか良い勝負が見れそうだし、捨て台詞が「ざまあないぜ！」だから配役的に似合つてるのが困る。「ま それはそれとして、今日どうする？」

「いつもの」

「OK。色々取つてくるからちょっと準備してて」「ん」

時刻は夕刻。

ホラー映画はポップコーン片手に薄暗い部屋で見るのが定番だけど、時間感覚が薄れる問題がある。

例に漏れず、時計を確認しなかつたせいで日没間近で辺りが暗くなり始めていた。

で、このご時世でも不審者はいるから流石に一人で返す訳にも行かない。

片付けは後回しして付き添いで三影を家まで送っている。

「悟」

「なに？」

「進学しても 来ていい？」

「え、うん。構わないよ？」

男女の趣味が変わつて本格的に相入れなくなるのが中学生から。

それまであやふやだった境界線が一気に表面化される。

今時はLBXで再びあやふやになつてはいるものの、やっぱり小学校よりかは交流が薄れていく。

「三影が来たいなら別に構わないよ。準備して待ってるから」

「…ありがと」

そう言つて肩を密着させてくる。

本当にこの距離の詰め方は卑怯だと思う。中学生のやる事じゃないし、避けたら避けたでそう言う人間だと思われてしまう。

最初から拒否権は与えられていないと言う不平等極まる内容だ。不平等条約だつたら速攻解消なのだよ。

「なんか買つてく?」

「いいの?」

「うん」

「…じゃあ ココア」

少しの寄り道くらいなら許されるだろと、少し遠回り気味に歩く。これから起ころる出来事に巻き込まれるとこんなゆつくりしてられる時間の方が珍しくなる。

だから今くらいはゆつくりしてみたい。

「悟」

「何?」

「これから”ずっと” よろしくね」

「うん。よろしくね」

流石にずっととは過言だろうなあと思いつつ、街灯が照らす歩道を2人で歩く。

今日は珍しく何もしたくない、そう思う日だつた。

何をする訳でもなく、ただ日当たりがいい自室でラグを敷いて日光に当たりながら観葉植物みたいにじつとして昼寝して、たまに水分補給して二度寝の繰り返し。

今日だけはスマホの電源も切つて置きっぱなし。今日ばかりは誰からの連絡も遮断していた。

ただ、結果的に言えばこれは悪手だった。

「……」

見慣れた黒髪に青と黒のボーダー柄のパークターに身を包んでいる、見慣れた人間に抱き枕にされている。

なんで家の中に平然と居るかはこの際は置いておく。今現在、深刻な事が自分自身に起きているのだ。

人間の脳は事前に意識しないことはとことん意識しないが、理解した途端に視覚でも感覚でも聴覚でも、何のことか理解できてしまふしそれを自分の意思で忘れることができない。

目覚めた途端に意識しなくともいい情報が頭の中を駆け巡る。
肌にダイレクトで伝わる胸の感触。いつも愛着してる部屋着が薄いせいで顕著に伝わる。

言っちゃ悪いとは思うけど言わなければならぬ。三影は同年代と比べて胸の発育は本当に良い。

アミなんて比較にならないくらい。下手したら年上にも劣らない、保証してもいい。

いや、落ち着け。女子なんだから胸はあるし柔らかいのは普通。そう普通なんだ。人なんだから体温はあるし男と違つてそう言うところに気を遣つてるからいい匂いもする。だから別に触れてるからって恥ずかしく感じる必要はない。

でも上がり続ける心音と熱くなる顔、男つてどうしてこんな単純なんだろうか。

だが諦めたら終わりだ。

抜け出そうとすれば抜け出せるんだからさつさと起きよう。そうしよう。

「んう……」

三影の手を退けようとしたらさらに力を入れられた。そしてさらには押し付けられた。ただでさえ薄い装甲^服を貫通してそのまま感触が伝わってくる。

なんか足も絡みついてきた。もう何も考えたくない。

脚部緩衝材も胸部緩衝材もない中、この大よろけ攻撃はもう殺しに来ていると言つても過言じやない。

犬猫みたいにペツトと思えば多少気が楽になるかと思つたが、脳の変換機能がイカれてるのか猫じやなくて三影のケモミミを出力しがつた。

しかもケモナーより、馬鹿じやないの？

「むう…」

三影の攻撃は止まらない。

絡めた足を離すまいと更に絡め、体全体を押し付けてくる。胸だけだつた柔らかい感触が体全体に押し寄せてくる。

女性には耐性があるつて言つた事あつたが、女体に耐性があるとは言つてないし耐性つくほど触れ合つたことなんてない。

幼馴染補正があつても無理なものは無理だ。ここまで破壊力があると理性のタガが外れてしまう。

落ち着け悟。俺は盛つた猿じやない、人間なんだ。理性的になつて行動するんだ。まず何をすればいい？ 三影を起こす事だろ？ そうすればこの苦難から解放される。

「三影……三影？」

「んう？」

名前を呼んで何度か搖さぶると今まで聞いたこともない声を出して三影が目を覚ます。

「……来ちゃつた？」

言い訳としては理由になつてない挨拶が出てきた。

「…三影、一回離れよ?」

「…」

取り敢えずスルーして、離れる様に促すが、そう言つた途端に腕でガツチリホールドしてきた。足は葛みたいに樹体を締め付ける様に絡めて体全体を押し付けてくる。

密着して更に強まる女体の感触。抑えることができない煩惱。何が正解なのか神にも分からぬはずだ。てか分かつてたまるか。

「の、飲み物…取つて来るからさ。あといつ家に来たのかも聞きたいし…」

「…分かつた」

なんかすつごい間があつたが、取り敢えず三影は拘束を解いてくれた。

安堵こそするが表には出さない。

今の三影は何をするか分からぬ、慎重にならなくちゃならない。色々過激だつた感触は消え去り、煩惱も過ぎ去つていつた。

三影に待つ様言つて冷蔵庫を漁りに部屋を後にする。

階段を降りてる途中で改めて残つた三影の感触が頭をよぎつた。柔らかかつたし温かつたし、柔軟剤とかシャンプーを抜きにしてもいい匂いだった。元々のルックスの高さのせいで普段見ることのない三影の表情が脳裏に焼き付いている。

「…いやあ、卑怯でしょ」

多分、今なら顔真っ赤になつてゐると思う。

サトルが部屋から居なくなつて、部屋に私以外誰も居なくなる。

「————ツ!!」

悶絶した。

寝ぼけていたとは言えあんな事してたなんて。恥ずかしいなんてものじやなかつた。

今の私、多分トマトみたいに赤いかもしねない。

耳も顔も熱い、心臓は音を立てて心拍数は下がる事なく上がつていく。

顔だけじやない。もう身体中熱い。恥ずかしさと感じた事のない未知の感覚で感情もぐちやぐちやだつた。

嗅いだ事のない不快感のない独特の匂い。近づくだけで聞こえていた心音に手を握る以外で感じたサトルの体温。間近で感じた吐息と声が余計頭の中をぐちやぐちやにしてくる。

「……やっぱり 無理だよ。母さん」

逃す前に手籠にしちゃえればいいって母さんは言つてたけど、今の私はそれをする勇気はないって事が解つた。

いつも隣にいて当たり前だつた。一緒に歩いて離すのが日常だつたし、いつも隣に居るものだと思つていた。でも最近は違う。

クラスは別で役職も全然違うから一緒にいる時間が減つた。サトルがいない教室に違和感を覚える程くらいには、それが私の当たり前だつたのかも知れない。

普段会わないところでサトルが変わるのが怖いのかも知れない。でも、自分の意思だけを理由にサトルを縛るのはアミが言う「地雷女」になつてしまふ。

でも離したくないのも事実で、それを偽ろうとは思わない。

「……でも」

収穫はあつた。

サトルにも性欲はあつた。

寝ている合間に部屋中を探したけど、それらしい本が一切出てこなかつた。

コンビニとかのそう言うコーナーも見向きもしないし沙希さんを見ても特に目線が泳ぐこともなかつた。よく鋼の意志がなんとかつて言つてたけど、ただ女人に興味が無いだけかと思つてた。

でも、ちゃんとあつた。

胸に耳を押し付けて見れば、表情とは裏腹にバクバクと心臓を動かしていて、それが体温になつて伝わってきた。

そうじやなくとも心地良かつた。

隣同士で歩いたりするのとはまた別の、違つた意味で幸福感が溢れてくれる。

「…もつと」

もつと感じていていい。

長い時間、毎日、2人だけで。

でも、そこにサトルの意思はない。あるのは私の意思と欲望だけ。誰にも盗られたくない。サトルは私だけの人であつて他の人の為にいる訳じやないって言う醜い欲。

でも、思わずにはいられない理由がある。

ちよつとした気遣いもできるし、誰に対しても基本は隔てなく接するし、物静かで、たまにドジするけど、やる事にはちゃんと芯を持つて赴くし、口下手だけどちゃんと伝えてくれる。

サトルは自覚が足りてない。

自分が良かれとやつてる事が、相手の好意と関心を惹きつけていることに。

迷惑は掛けたくない。

それでサトルから嫌われたら嫌だから。

だから不安になる。

そこに付け入れられて、名前も知らない奴が私からサトルを引き剥がすかも知れない。いつか不安が現実になるつて。

絶対に嫌だ。

そんな事されるくらいなら醜かろうが蔑まれようが自分の欲望を優先させてやる。

目の前で奪われるくらいなら、今すぐ既成事実なりなんなり取つて

見せつけてやる。

人の関係に土足で入つて荒らした上に、横から何もかも奪つていくなら殺してでもそいつから全てを奪つて滅茶苦茶にしてやる。

「……ッ」

自己嫌悪したくなる。

要は私が見捨てらるのが怖いからサトルを縛り付けて、私の幸福を優先させてそこにサトルの幸福は含まれてない。

「…ああッ！」

欲望ばかりが溢れて来る自分に苛立つ。

ただ感傷に浸つてばかりいられない。

長い様で短かつた1人の時間を終わらせる様に階段を登る足音が聞こえてくる。

サトルが戻つて来る。

いつまでもこんな状態で居たら、サトルを心配させてしまう。

「ごめん。ちょっと手間取った」

「…ありがと」

両手に飲み物とマグカップを持つてサトルが部屋に戻つて来る。いつもの様に折りたたんでしまつてある机をラグの上に広げて、そこに持つてきたものを陳列させる。

「さて、じやあ色々聞きたいことがあるんだけど……」

さつきと違つて少し微笑んで見せる。

「事前に連絡くらいしなきゃ駄目でしょ？」

あ、これ怒つてる。

原作前

#1

いつ選択を間違えたのかは分からない。

成人して、職についた事で親を安心させて、仕事にも慣れてきていた。社会に出ることに若干の不安があつた。自分の知らない世界へと旅立つのは容易なことでは無い。

それでも今の仕事なら頑張れる。厳しいがしつかり指導してくれる先輩も上司もいた。来年には後輩も出来るからより一層仕事に取り組めた。

やる事も多いし責任もついて回ってきた。それでも毎日楽しかったし、自分の出来る事も増えていく達成感があった。

そんな毎日は、突然終わりを迎えた。

自分自身は自分自身。

その感覚は意識としては解つても、違和感を拭うことはできなかつた。

気が付いたら子供の体。知らない部屋、知らない環境、知らない世界、冷静になればなるほど湧いてくる存在しない記憶。平静を保ててしまふ自分に嫌悪してしまう自分。

読んだ事もない名前を発して、行つた事もない学校へ通つて、会つた事もない友人と遊び、両親でもない人間と家族関係を築き、最後は寝る。

自分を表に出せない。今までの自分を自らが否定して、今の自分に合わせなければ生きて行けない。それが耐えられなかつた。

今までの人間関係を捨てて、知り合いもしなかつた人間と関わり、顔も知らなかつた親と呼べる存在と過ごす。

正直に甘えられず、友人ともギクシャクする様になり、日々がストレスだつた。

そんなある日の、ある出来事がキツカケだつた。

世界初の高耐久ダンボールの開発。

全年齢対象ホビー「L BX」の販売。

日本の研究者「山野淳一郎」の失踪。

ここはダンボール戦機の世界で、俺はその世界の住人。所謂モブだ。

物語の主人公でも、登場人物でもない。

街中でバトルを仕掛けたり、イベントの為に主人公たちから勝負を挑まれるだけの存在。なんのターニングポイントにもならないし、活躍する事もない。

彼らの冒険に、出来事に、歴史に関わることは無い。

昂った気分は、冷静に考えた途端に冷めていく。

自分はこの世界でモブとして生きて、普通に生活して最後は死ぬ。

だつたらせめて自分の趣味で生きて見よう。

時間はかかるが、考えはいくらでも出てくる。時間も困らない程余っている。

好きな事で生きて、静かに死ぬ。それが、この世界での自分の人生だと。

最初は、そう思つていた。

@ _____ @

「悟?」

「え? あ、ごめん。なんでもない」

ボーッとしていたら声を掛けられた。

話掛けられたと言うか、話の途中でぼーっとしてた俺が悪いんだが。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫。ちょっと寝ぼけてるだけ」

「ちやんと、寝た？」

「朝は弱いからね」

彼女は三影ミ力。

青みがかかった黒髪のツインテールと青と黒が基調のフードコートを着こなし、口数が少なく口を開けば割と辛口という、とつつきようがない同級生だ。

ダンボール戦機序盤で現れ、終盤までなんだかんだ主人公達の近くで行動している。ゲームだつたらランキングにも登場して、確かにそこ強かつた筈だ。

だが、結局は小学生であり、同学年のクラスメイト。それだけの関係の筈だつた。

なのに、ここ最近になつて彼女はぐんぐん距離を詰めてくる。

「最近、大丈夫？」

「あー……多分、大丈夫」

三影の問いに、少し間を置いて返答する。

「本当？ 大丈夫？」

「うん。心配しなくても元気だよ」

更に問いかけてくる三影に對して笑つて誤魔化す。

心配してくれる同期の女子がいる。前の環境だつたら死ぬ程嬉しかつた。でも今は複雑な気分だ。

親以外に自分のことを気にかけてくれる存在が居てくれるのは、正直嬉しい。嬉しいだけに、分類状モブで有る自分が彼女と共にいても良いのだろうかと卑屈な考えになつてしまふ。

そんな心境を知つてか知らずか、三影は距離を縮めてくる一方だつた。

#2

授業が終わり皆がそれぞれの事に思いを馳せながら教室を後にする。

来月にはここともお別れだ。大した思い出もないが、過ごしてきたり記憶だけは有る。それのせいかも知らないが、少しだけ哀愁を感じる。

自分は図書委員の為に、少しの間学校に留まる。放課後でも残る生徒は残るし、放課後に本を返しにくる生徒もいる為、暗くならない程度の時間まで図書室にいる事はザラだ。

人のいる教室を尻目に図書室へ歩いていく。

三影も図書委員だが、今日は当番じゃないから帰っている。指定時刻まで1人の時間を過ごす……筈だった。

当番でもないのに、カウンターに三影が座っていた。

「遅い」

「……うん。言いたい事があるけど、取り敢えずごめん」

「ん」

それだけ言つて読んでいた本を置み、三影は隣の空席をポンポンと叩く。

拒否する謂れもないから、三影の隣へと着席する。

三影は俺が座つたのを確認して本を読み出す。読んでいる本はカバーで分からぬが、内容的にはライトノベルのようだつた。

「今日当番じゃないよね？」

「駄目？」

「いや、駄目つて訳じやないけど……」

図書委員の仕事をしながら問答を繰り返す。三影がいる時は大体こんな感じで、他愛もない会話をしている。

三影は口数が少ない。酷い時は単語で会話する時もあるし、会話が続かず気まずい雰囲気を作る事もしばしばだつた。

最近は他の子とも、ある程度の意思疎通ができるようになつていてが、今みたいに2人の時はいつも三影口調に戻つてしまふ。

短い発言で察せてしまふ自分もどうかと思うが、これは不可抗力だ。付き合いが長いのもあつてどんな時が不機嫌だつたりとか、どんな時がご機嫌だつたりと把握できてしまう。

「嫌？」

「いや、ああ……その聞き方は狡い気がする」

「なら、大丈夫？」

「まあ、うん」

そう言つて椅子の間隔を詰めてくる。

図書委員の仕事を手伝ってくれるから、拒みづらいって言うのもある。記録の抜けとか、返却期間過ぎても返してない生徒に返却するよう促してくれたり、基本図書室から離れられないから、凄くありがたかつた。

記録をつけて、来週の図書室の当番に名札を変えて、ノートを懸けておく。

最後に忘れ物がないか三影と見て回り、何もないことを確認して図書室を戸締まりし、職員室に鍵を返しにいく。

「鍵返してくるから、先行つてて」

「ん」

廊下で三影と別れる。

1人になつて職員室までの長くもない廊下を歩く。改めて三影との記憶を思い出してみる。遡れば一年か半年前？ 他人の記憶で信憑性が欠けているが、それくらいには三影の存在は一応確認できだし、記憶として存在していた。

ただそれ以前の記憶がすっぽり抜けている。

『三影』『三影ちゃん』

自分の親や他の友人からはこの単語が出てくるのに、肝心の出会った日やこうなるキッカケが全く出てこない。

なんかモヤモヤするが、幾ら思い出そうとしても具体的な物が出てこない。出てこないなら仕方がない。考えるのを諦めて明日のことでも考えよう。

やりたい事を考えよう。そうした方がふとした事で思い出すかも

知らない。

「失礼しまーす。図書室の鍵返しにきましたー」

「お疲れ様、気を付けて帰るんだぞ」

はーい。 と言つて鍵を渡す。

「失礼しましたー」

鍵を対応してくれた図書担当の先生に渡して、そのまま職員室を後にする。

荷物を回収しに教室に戻ろうとしたら、携帯にメッセージが届く。
『荷物 持つてる。校門で』

三影からのメッセージだつた。

自分の荷物も持つてくれて居て いるらしい。

『ありがとう』と返信して、校舎を後にする。

自分以外にも校舎からまばらに生徒が出てくる。大体はクラブか自分と同じ委員会で残つて居た生徒達だ。

それらを尻目に校門へ向かう。

メッセージ通り、荷物を持つた三影が校門の外側で待つてくれていた。

「お待たせ」

「はい」

「ありがとう」

「ん。行こ」

三影に連れられて、学校を後にする。

誕生日にプレゼントを貰つた。

中身は勿論の事、今みんなが夢中になつてゐるLBXである。

コアスケルトンとセットでフレームを数種類揃えてくれて、武器と防具も複数用意してくれた。

ただ、フレームや武器を複数用意してきたのは、また別の意図があつた。その日のうちに親父に連れられて、親父の知り合いが経営している一般で使える製作場所みたいな所へ連れて行かれた。

対応してくれた店員に連れられて、親父と同い年かそれより上の人間が多い環境を進み、誰も居ない工作台へ案内される。

「じゃ、作るか」

「……組み立てなら家でも出来るよ?」

そう。組み立てなら二ツパーとヤスリがあれば別に家でも出来る。

俺の問いに、親父はニコニコしながら答える。

「悟。作るだけだったら、誰でも出来るんだ」

「そうなの?」

「そうだ。だからこれから、色々教え込む」

「え?」

そう言つて店員から工具箱を受け取り、工作台の上に広げる。

工具箱なんてこの方触った事もないし、工具も使つたこともない。だけど親父はウキウキしながら工具を取り出して、何かの準備をしている。

「悟、たまに思わないか? 自分で色々作れたらって」

「あ、うん。しそつちゅう思う」

工具のチエックを終えて、袋から持ち込んだフレームを開封してランナーを置いていく。

「父さんが子供の頃も、親父に良く教わつてたんだ。無いものを工夫して、それこそなんでも使つて自分の理想の形に漕ぎ着けるのが樂しくてね」

思い出話に耽りながら、箱を解体して袋に入れる。

「いいか？　自分の作りたいものを作るのに特別な施設は要らない。
ここにある物だけで作れるものなんだ」

これから使用する工具を取り出し、机に並べる。

準備は整つたらしい。親父のテンションが見るだけで分かるくらい上がっている。

親父がニッパーを取りつて、俺を見遣る。

「出来るだけ手伝つてやる。お前が好きなものを“造つてみろ”」

@ | @ | @

「おまたせ」
「ん」

今週は図書委員の仕事がない。

お陰で学校に残る必要がなく、平日でも門限までは時間がある。

俺は一度自宅に寄つて、三影と一緒に商店街に向かう。

親父と一緒に造つたLBX。完成したはいいもの、戦い方が全く分からなかつた。武器まで造つたのにこれじや宝の持ち腐れだ。

それを今日、教室で友人に相談していた。

それを聞きつけたのか三影がやつてきて、放課後になつてから商店街にあるゲームセンターで、戦闘に関して教えてくれる事になつた。

いつもLBXを持ち歩いている訳じやない俺は、その際一度家に寄る事になつた。いつもは家まで1人だつたせいか、三影が居る事がよつと新鮮だつた。

そこから歩いて數十分。長くもない道のりを歩いてゲームセンターに辿り着く。

平日だが学校が終わつた生徒や、休日なのか大人の姿もちよくちょく存在している。たまに怒号が聞こえたりするが、色んな意味で店の中は賑やかだ。

「あそこ」

「オッケー」

三影が指差す方向に無人の台があり、そこを占拠する。

近くにあつた椅子を押借して物置台にし、その上にバツクから荷物を取り出す。

「これ 悟の？」

「あ、うん。先週、親父が誕生日プレゼントで作らしてくれたんだ」バツクの箱から取り出した機体を見て、三影が興味を示す。

三影がLBXをやつてる時間は、俺の友人の中でもトップクラスが多い。もつと言えば、最近まで人間関係に使う時間を殆どLBXと過ごしていたのだ。

だからLBXのことに関しては、かなりの物知りである。

「コアパーツ 組んでる？」

「いや、あんまり動かしてないし、あんまり組み方が分かんない」

コアパーツに関してはパズルゲームだ。

限られた容量で機体の性能をどう変えていくのか。この手のものに関しては、自分で言うのもなんだけどあまり得意ではない。

「動かして 確認しよ？」

「うん、そうする」

取り敢えず、今日は三影から基礎的な事を教えてもらう。

コアパーツは……苦手意識があるが、これから覚えていく事にする。

今年の春は暖かいらしい。

朝の天気予報で、ニュースキャスターが来週までの気温と天気予報をそう伝えていた。

いつも思うんだけど、春と秋の区別つてつきずらいと思うんだ。

寒い日が続くと思ったら、急に暑くなつてそのまま夏へ。

暑い日が続くと思ったら、急に冷え込んで寒くなる。

秋なんて特に分からない。

アレつて紅葉以外、季節としてはないも当然でしょ。

「ねえ、三影」

「ん」

「春と秋つてさ、あると思う？」

「……微妙」

三影に問い合わせるが、三影も三影で春と秋の存在があるのか定かではないらしい。

桜が咲いてるから春なのか、それとも桜が咲くから春なのか。

一つハツキリしているのは、行事は多いし変化が大きい期間というのは分かる。

来月になれば小学生を卒業し中学生になる。

ここミソラ第二小の生徒は大体がミソラ第二中へ進学する。

一部の成績優良者は都心の私立中学へ進学したりするらしい。

私立中に関しては、自分は無関係な話だ。

それよりも、ミソラ第二中へ行つた後の事が心配だ。俺はともかく三影に関しては郷田ハンゾウ……だつたかな？

確かにスラムに行く際のイベントでバン達と絡みがある。三影の趣味と言うか、憧れを抱いている人間が郷田ハンゾウであつた。

ただ今の三影は……何というか、ちよつとズレている。

彼のやつている事は否定しつつも、彼の『敵』以外の人間への振る舞い、敗者への振る舞い、負けた時や自分に非がある時の潔さ。

全てを肯定する訳でもなく、また否定する訳でもなく、評価出来る

ところは評価しつつ、それ以外を指摘する様な形で、彼を尊敬はしている。

かなり中立的な受け取り方をしていた。

本来の三影が、言つてしまえば何があろうと推しを擁護するアイドルオタクである。

今の三影は推しに非がある場合、しつかり批判できるの様な感じ、という風に分かられる。

それに、郷田ハンゾウ以外の不良には、何処か軽蔑の視線が混じることがたまにある。

聞いても多分答えてはくれないだろう。俺も嫌いなもの事を聞かれて、それについて喋りたいとは思わない。

これに関しては三影から話してくれるのを待つ事にする。

「今日 どうする?」

「あ、うん。今日もお願ひしていい?」

「ん」

今日の放課後のことを考えながら、学校へと足を進める。

@

@

@

放課後、いつも通りゲームセンターに三影と訪れ、操作を教わり、コアパーツの編成を習い、それを実践する。

俺にはある程度LBXの実力を付けねばならない理由が出来てしまっている。

先の通り、三影はストーリーの進行の都合上。主人公である山野バンが三影に話しかける時がある。

それ以降もなんだかんだでバン達と行動を共にし、最終的には決戦の場までその他キャラ達と着いていく。

本当だつたら関わる事はなかつた。

多分、彼らが死ぬ気で頑張っているなど知らずに、そのままのほほ

んと生きていたかも知れない。

ただ、三影と出会つて、割と仲良くなつて、個人的に辛い時に無条件で頼れる様な関係になつてしまつた。

だから、これから起ること。少なくとも三影とこうも関係を持つてしまつている以上、何かしらの出来事で巻き込まれることは確定してしまつていて。

これらに對して備えなければならぬ。見えている未来に對して備えなのは、控えめにいつても馬鹿のする事だ。

死ぬかもしれない環境に放り込まれて、そんな時最後まで頼りになるのは、結局自分自身なのだ。

ダンボール戦機。

このストーリーが始まるまでに、少なくとも彼らと共に行動しても足手纏いにならない程度には、力を付けなくてはならない。

「悟？」

そんな事を考えていたせいか、三影に名前を呼ばれる。

「…あ　いや、うん。なんでもない」

一旦LBXの操作をやめて、そばに寄つて顔を覗き込んでくる。

「本当？」

「うん。ちょっとと考えてただけ」

「…そう」

回答に少し不満があるのか、三影は少し不服そうながらも、元の位置へ戻つていく。

「…始めよ？」

「うん。お願ひ」

そう言つて練習を再開する。

卒業までもう少しという時期に差し掛かる。

それはそうと、今日も放課後にゲームセンターで三影に練習相手になつてもらつていてる。

ここ最近、毎日やつてるお陰か、最初よりかなり戦える様にはなつた。

最初は右も左も分からぬ状態で、どう動けばいいか全く分からなかつた。

撃つにしても斬りつけるにしても、間合いがぐちやぐちやで、動作に入るとすぐ見切られてしまう。

そんな状態だつたが、三影に指導されてから少しずつ動きがマシになつていつた。

三影はアマゾネスを使つている。

ストライダーフレームに分類されるからか、兎に角すばしっこいのだ。

目の前にいたのに後ろに居たり、後ろを取られ続けたり、反応があると思つて振り向いたらメインカメラに指さされるしで、とことん振り回された。

しかし教える事はしつかり教える。

三影はそう言う人間だ。

俺のダメな部分を洗い出し、矯正していく。

まず一番最初に指摘されたのは、無理に近接戦に持つていこうとする所だった。

L BXバトルは色々な理由があるが、その大半が格闘戦寄りであり皆それぞれ自分に合つた武器で戦つていてるし、それをするのは別に問題ないらしい。

ただ俺の場合は動きが単調すぎるとの事だった。

それを改善する為に、色々と手解きを受けた。

相手の行動に合わせたカウンターの入れ方から、不利になつた格闘戦からの抜け出し方まで、自分にどれだけ有利な戦いが出来るか、こ

こ1週間か2週間でかなり教え込まれた。

無理に追撃はしない。

無理に戦わない。

同じ事を繰り返さない。

基本をみっちり仕込まれた。

だが、まだ不安が残る。

猶予は少ないし急を要する。まだ当分は三影に付きつきりで教えてもらう事になる。

@

@

@

いつもの様に商店街に訪れて、ゲームセンターに門限まで三影と一緒に練習をしていた。

練習といつても、俺の腕前が上達したおかげで、ストリートレギュレーションでバトルをやることの方が多いが、とにかく練習は練習である。

ただ、成長してるのは俺だけではない。

「嘘!?

「惜しかった」

借り物だった武器で斬りかかったら、そのまま柔道の手技の要領で投げられてしまった。

何故だろうか、教える側の三影も比例して強くなつていて、今の様に人の身で行う様な技を繰り出してくる事があるのだ。

お陰様で追いついたと思つた腕前に対する自信が、ちょっとばかり失われた。

嫌味ではない。

事実勝てないのは三影が成長しているからだ。

例えで、こつちがランク10になつてゐる頃には20、20になつたら30と、背中は見えるのに追いつけない程度の速度で一步先を行つている。

だから三影に勝てないのは俺の実力不足…………は確かに事だけど、少なくとも成長していしないのが理由ではない筈だ。

だから俺は悪くない。ルーク・ファン・ファブレ

その後も数戦してから、キリがいい所で切り上げる。

今日も勝てなかつたが明日は勝てる、多分勝てる。

そうでもしないとプレイスキルは上がらないし、なんなら頼んで付き合つてもらつてる三影に申し訳が立たない。

いつも通り、機体が傷つかない様に箱にしまい込んで、バックの中に入れようとする時

「悟 ソレの名前、決めない？」

三影が俺のLBXを指差して、そう尋ねる。

「名前……名前か。全く気にしてなかつた」

正直、造つた後にあまりの完成度の高さにそれで満足していた。名前など付けなくとも、俺の中では名前は決まつていたからだ。

「決まつてない？」

「いや、決まつてる。俺が呼んでないだけ」

シンプルなデザインながら忘れる事のない外観、黒 白 黄 赤の塗装をバランスよく施されたカラーリング。

そして特徴的なV字アンテナに、その下に光るツインアイ。

俗に言う“ガンダムフェイス”をした、俺が見た中で一番最初で、一番好きになつた“ガンダム”

こいつはガンダム、ガンダムMK-IIだ

「三影、よろしく」

「ん」

お互いがLBXを投入してバトルを開始する。

腕前が上達し、一度ストリートレギュレーションで三影と試合形式でバトルする事になつた。

三影との初回は醜態を晒したが、今は違う。どう動けばいいか、どこに行けばいいか、どう構えればいいか手にとる様に解る。

三影も練習時と違う動きをするが、姿は見えずとも攻撃を仕掛ける瞬間は必ず姿を晒す。

そこを狙うのだ。

ここは市街地、自分は十字路の真ん中、下手に動くと串刺しにされてしまう。少なくとも三影は正面切つての格闘戦と不意打ちが得意だ。

どこで待ち構えているか解らない。
動くなら慎重に行かねばならない。

「そこ」

勇気の一歩を十字路から踏み出した時、上からアマゾネスが降つてくる。

避けるには時間がない、だからガンダム自慢のシールドで槍の軌道を逸らす。
硬直で動けないアマゾネスに蹴りを入れてよろけさせ、ビームライフルを照射する。

「なんとおおお!?!」

しかし当たらない。

ライフルの持ち手に足蹴りを入れられて、ビームを上空へ撃ち上げる。

隙が出来た所に槍の突きが飛んでくるが、スラスターを噴かせて後方に下がる。

「まだ」

まだ攻撃は終わらない。

着地の硬直で槍の突きが飛んできて、それを避け続ける。

「ならこう」

突きと見せかけての払い、からの槍での殴打。

シールドを弾かれ、機体に何度か攻撃が当たる。

しかしその程度でやられる程、ガンダムは柔らかく造つてはいな
い。

多少の被弾でやらないからこそ、被弾前提の行動ができる。飛んで
きた槍を掴んで引き寄せ、アマゾネスをビームサーベルで斬る。

「そこだあ！」

どう言う理論かは解らないが、フレームは溶断されずにアマゾネス
からは打撃音と火花が散る。

追撃を入れようとするが、ガンダムをジャンプ台にされたアマゾネ
スは遠くまで飛んでいく。

ただ今まで瀕死なのか、アマゾネスの動きがぎこちなくなつてい
る。

流石の威力。

バッテリー消費を犠牲にしただけはあるし、これくらい強くなくて
は困る。

それにしたつて、親父が作ってくれた武器の威力たるやだ。

アイデアと図面だけで産み出してくれるとは思わなかつたし、その
上完成度が高い。

どうやつたと聞いても、趣味でやつている人間の話は……よく解ら
ないが、取り敢えず凄いと言うのはよく分かつた。

「…やる」

「三影のおかげだよ」

ガンダムはまだ戦える

ただしアマゾネスは限界である。

それでもLBXバトル……と言うか、勝負というのは最後まで結果
が分からぬし、三影もこの程度で諦める様な人間ではない。

だから、アマゾネスが突っ込んでくる。

それに応える様に、俺もガンダムを進める。

@

@

@

結局、あの後一度といった試合を何度も何度も繰り返して、気が付いたら空が赤くなる時間帯まで戦っていた。

勝敗は五分五分。

三影の戦闘スタイルが近接ながら、同じ戦い方をしないのでかなり新鮮だった。

戦い方で色々変わるんだなど、新しい発見だ。

「ありがとな三影。こんな時間まで付き合ってくれて」

「……ん」

三影に感謝を伝える。

多分、ここまでしてもらつて感謝伝えないのは根っからの屑だろう。

俺なんか、三影にテコ入れしてもらうまではそこら辺の低学年の方がプレイスキルも腕前も上だつたのだ。

ただ、三影の表情は浮かばない。

いつも真顔の三影だが、言うなれば普段から真顔だから喜怒哀楽はハツキリ浮かぶものだ。

「悟」

「何？」

「私 必要ない？」

「え？」

突然何を言い出すかと思えば、急に産みの親を失った強化人間の様な事を言い出す。

「え？ 急にどうして？」

「悟は 十分強い。私が教えた事 みんな吸収して、なんでも自分の物にしてる。私が教えられるのは もうない」

「でも、結構粗いよ？」

「それでも 十分。今日、それが分かった」

三影の言う通り、確かに強くはなれた。

ただ、世の中とは困った代物だ。

ここまで実力を上げても、上には上が居て、さらに上にはたまたま人間に生まれた化け物みたい奴も存在している。

ただ、そういった奴に限つて、大体1人だ。

言うなればボツチなのだ。

そういうつた奴らを、遠からず巻き込まれる形で相手する事になる。だから、必要ある必要ない以前に三影には居てもらわなければならぬい。

……ただ、ほんのちょっと私情を挟むなら、三影には居てほしい。

俺に接してくれている理由は解らない。

話てもくれない。

自分で思い出すことも出来ていない。

ただ、一番混乱していた時にそばに居てくれていた事が、それが嬉しかった。

自慢ではないが、親以外に本心を晒して言葉を交えられる様な関係は、三影以外にはあんまり居ない。

「なあ、三影」

横にいる三影に、こう問い合わせる。

「その、俺。まだ一緒に戦う事、教わつてない……」

困り顔でそう言う。

するとどうだろう。

キヨトンとしてと思つたら、クスクス笑われてしまつた。笑われるとは思わなかつたから、少し変な汗が出て來た。

「え？ え？」

「…ごめん。これからも よろしく」

「あ、うん。よろしく」

春とは色々と節目の時期もある。

色々あつたが、なんだかんだで楽しかった小学生生活も終わり、来週からは中学生として生きていくのだ。

そして、俺が編入されるミソラ第二中。

そこが起点ではないが、そこでも色々と問題が起こり、それを理由に危険溢れる各所へ飛び込んでいく事になる。

来る日に向けて、色々と準備をしてきた。

が、それが祟つたたのか風邪になつた。

季節外れのインフルエンザと言うわけではないが、謎の高熱に襲われて、家から出る事が出来なかつた。

「今日は安静にしてなさい。下に居るから、何かあつたら携帯で連絡してね？」

「……うん」

部屋を後にした母親の問いに頷く。

あまりの気怠さに、体の節々が痛くなるし、関節も痛い。

寝返りも打てないし、ベットから動きたくない。

熱さと頭痛のダブルパンチで、とてもじやないが目も開けていたくない。

薬を飲んで、布団にくるまりそのまま寝る事にした。

数分経つと薬が効いてきたのか、案外すぐに夢の世界へと旅立つ事ができた。

誰かと殴り合っていた。

どつちかと言えば、殴られていたの方が正しい。

殴られる度に視界が揺れ、途切れ途切れで視点が変わる。

相手を殴つていたり、殴り返されたり、相手の腕に噛み付いてたり、顔面を引つ搔いていたり、場面場面で流れる映像に全く理解が追いつかない。

数で負けていても諦めないのか、殴りかかってきた奴らを手当たり次第に引つ搔き、噛みつき、殴つたり蹴つたり、股間を蹴り上げていたりしていた。

しばらく、お互いがお互いを殴りつける。

喧嘩も終盤に差し掛かったのか、ボロボロになつた相手が何処か負け惜しみの様な事を吐き捨てながら去っていく。

直後にフラフラと左右に揺れ動いた視界が上を向く。
倒れたのか、空を見上げていた。

視界の端から、誰かが駆け寄つてくる。

何かを必死になつて呼びかけているが、何を言つているのか分かるはずもない。

ボヤけて誰なのか解らないが、何処か見慣れた気がした。

次には何か大きな、爆発音のような音共に場面が暗転する。

「……んあ…」

ショボついた目を擦り、情けない声を出す。

熱と氣怠さは相変わらずだが、頭痛はなくなつていて、頭は冴えていた。

さつきの夢のよう、記憶のようないものを振り返る。

俺がこの身体で“自分自身”だと認識するようになつた以前のだ

ろうか。

少なくとも俺が俺である時、喧嘩になつた覚えはないし起こすような事をした覚えもない。

だとしたらいつの出来事で、この身体の持ち主は一体何をしていたのだろうか。

気のせいか、その事を考えれば考えるほど殴られた頬が痛くなる上に、体の節々にも痛みが広がる。

結局、夢がなんだつたのか。

最後の爆発音がんなんだつたのか、何故喧嘩になつていたのか、謎が分かると思つたら逆に謎が増えていた。

考えれば考えるほど解らない。そんな状態になり風邪による頭痛の次は、解けない謎を解こうとする事からくる頭痛に悩まされた。

「……寝よ」

考えても分からぬなら仕方がない。

放つておいて、後から考えればいい。

まずは目の前のことだと、携帯のアラームをセットしてそのまま二度寝に入った。

あの夢にどんな意味合いがあつたかは分からぬまま、幾分か時間が流れる。

仮に確定させるなら、あの喧嘩騒ぎが三影関連の出来事だろう。鮮明ではなかつたが、相手側の身なりはお世辞にも一般人のそれではなかつた。

俗に言う不良だ。

この説が正しいなら、三影が不良嫌いなのも分かる。

ただ、何故記憶の中の自分が不良とガチンコの殴り合いをしなきやならなかつたのか。

それにその後の爆発音……と言うか、破裂音や破断音の、何かが裂けたり破裂した様な音はなんなのか。それが分からぬ。

記憶自体も曖昧だ。

あの夢が今の自分のものである確証もない、かと言つてそうでない確証もない。見慣れた氣がした人影も、頭の中で穴埋めして作つたものに納得しているだけで、記憶違いかもしけれない。

それに、自身の記憶自体もあまり明確ではない。

人間の脳は不要な記憶を新しい記憶で塗りつぶし、それで容量を確保する。

だから自分の記憶と俺の記憶が混同して、俗に言う存在しない記憶とやらが作り出されているのかもしれない。

何をどう頑張つても憶測と仮定に行き着いてしまう。

出口がないのが出口の様な、一向に晴れないモヤモヤと謎の感覚に陥ついたら、突然はつきり声が聞こえた。

「悟くん？」

「え？ あ、はい！」

名前を呼ばれ、席を立ち返事をする。

ここはミソラ第二中学校。

主にミソラ第二小と第三小の生徒が集まる中学で、全校生徒の在籍数は俺のいた中学よりも多い。

今日は入学式……は実を言うと過ぎていて、今は教室で生徒教師、それぞれ顔合わせの様な時間だ。

視線を向けられる分には問題ないが、集めるとなると話は別だ。後はともかく前から来る教師以外の向けられる視線に少しだけドギマギする。

「具合が悪いのかい？」

「あ、いえ。ただボーツとしてただけです」

ボーツとはしていなかつたが、意識が教室以外の所へ行つてたのは確かだつた。

その事を教師に伝える。

「そうか。ただ本当に気分が悪くなつたら、すぐに言いなさい」

「はい」

「じゃ、次行くぞ。出席番号24番……」

教師との問答が終わり、皆の視線がバラける。

なんとか事なきを得て、その後は問題なく時間が流れる。

今日に限つては半日で終わる。

これから行う授業内容を机に備え付けられている端末にインストールする以外にする事はなく、そのまま解散になつた。

@

@

@

「お疲れ」

「ん」

校門で待つっていた三影と合流して、中学校を後にする。

俺と三影は別のクラスになつた。

三影がいないのが少し新鮮だったが、顔見知りも居るし、よく話す友人もいたから、クラスで孤立する事はないだろう。

「悟 大丈夫そう？」

「うん。なんだかんだ知つてる人間もいたし。三影の方は？」

「大丈夫」

「ならよかつた」

俺のクラスには少なくとも山野バンはいなかつた。そうなると三影のいるクラスに山野バン一行がいる。

本当に、三影といなかつたらただの人間として過ごしてたかもしない。今更思つてもしようがない事だが。

「悟 これ」

そう言つて三影が CCM の画面を見せてくる。

画面にはキタジマ模型店とデカデカと示され、今週の入荷情報を載せていた。

「来る？」

入荷情報の中で目をつけたのはコアパーツ関連、特にバッテリーだ。

親父が造つてくれた武器、威力は申し分ないがバッテリー容量の問題で釣り合いが取れない時がある。

ご丁寧にも威力調節で連射できたりできるが、それにしたつて消費量に反して容量が少な過ぎて、持ち味を活かせきれない。

スラスターにもバッテリー容量は割かれるし、モーターにも持つていかれる故、早急になんとかしたい問題ではあった。

在庫があるかどうか確かめて、あるならある内に買わなければならない。

「うん。バッテリーも変えたいし、キタジマ行くの初めてだし」

「ん ジや、行こ」

そう答えて、三影と一緒にキタジマに足を進める。

中学生活はほぼ小学校の延長線上だった。

顔見知りは居るし、話し相手には困らない。

ただ最近、三影の引っ付き度合いが上がった気がしてならない。

中学に上がつてから、何度か交流の機会があり女子とも割と話す様になつた。

三影と一緒にいる時に話しかけられることもある。

小学校の時は普段から側に居たからか、あまり気になつては居なかつたが、男子は問題ないが休み時間中に女子と喋ると顕著に現れる。

女子と話すと、パークーに手を入れて真顔のまま俺の横に居るのだ。そして割と不機嫌でもある。

こう言う時の女子の察し具合は異常だ。

手で合図を送ると、察してくれて会話を切り上げてくれる。

三影に理由を聞くと言うのは自殺行為だ。

ただどうしたの？ と聞くしかないが、その返答も三影自身納得していなさそうな感じで

「……解らない。モヤモヤ する」

と言うのだ。

となると解決策は一つ。

三影といふ時間をとりあえず増やすしかない。

割と長い時間を共有してきたつもりだったが、やはり思春期の女心と言うのは分かりかねる。

自分で言うのもなんだが、多分自分以外の誰かと自分以上に親密になる事が嫌な様に見えた。

それに同性の女子に対してはかなり反応する。

俗に言うヤキモチの様なものかも知れない。

ただ、この年で色恋沙汰なんてしたことないから、三影がどう思つ

てるかなんてのは正直な所解らない。

あとは三影の反応次第だ。

@

@

@

中学になつてから、サトルと会うことが減つた。

単純にクラスが違うせいもある。もつと言うと、違うせいで遠く感じてしまう。

会う度にサトルは知らない人間と仲良くなつてゐる。

私の知らない人と話して、笑つて、楽しそうにしていた。

普通は良いことだ。

クラスに馴染めずに、一人でいるよりよっぽど良い。それを心配していく、楽しそうにしているサトルを見て、安心した自分が居た。だから嫉妬してしまう。

“あの時”から私はサトルに依存している。

いつも間近で、何をするにしても、何処に行くにもサトルと一緒にだつた。

私は親離れできない小鴨だ。

だからサトルを奪われるんじやないかつて心配だつた。

たまに行動に移してしまえばつて思う時もある。

ただ、過剰な行動はそれこそサトルの友人関係にヒビを入れかねないし、それがキッカケでサトルがクラスから孤立するかも知れない。なによりサトルに嫌われたくない。

それは望んでいない。

でも、それを抑えられるほど私は素直じやない。

言葉にして言うにも、どうにも言葉が詰まつてしまつて、言おうとしたことを飲み込んでしまう。

性格のせいで、何処かで感情を曝け出すことも出来ない。

だから、さり気なく隣にいる事でしか意思表示ができなかつた。
これで分かつてほしいとは思つていなかつたが、なんとかサトルへ
は伝わつた。

「どうしたの？」

「……解らない。モヤモヤ する」

嘘だ。

理由は自分でも分かつて いる。

私以外の女子がサトルと話すのが面白くないから。

私以外の女子がサトルに必要とされているから。

私以外の女子がサトルといるから。

私以外の“女”がサトルと一緒に過ごしているから。

でもサトルには迷惑をかけたくない。

嫌われたくもない。

それをうまく伝えられるほど私は良く出来てない。

だから、今日みたいに行動に移してしまう時もあるかも知れない。

その時、サトルは許してくれるだろうか。

捨てないてくれるだろうか。

「三影？」

そんな不安があつたからか、無意識にサトルの裾を引っ張つてい
た。

「……なんでも ない」

「あ、うん。出来れば…手を離してほしいかなつて…」

「……」

「ああ…その、授業…始まつちやうし…」

「…」

「ええ…？」

休み時間も終わりが近づいていて、廊下にいた殆どの人間は教室へ
消えていき、私達以外誰もいなくなつた。

さつき、迷惑をかけたくないと思つていたのにこの有様、頭で思つ
ていても行動に出してしまう。

でも、今だけはいいかなつて、少しだけならつて、何処かでそう思つ

てしまつて いる自分がいる。
上手く言葉にできたらつて、 そう思わずにはいられなかつた。

中学が始まつてから数週間。

三影のひつき虫レベルも徐々に緩和されつつあり、特に問題も起
こらずに始まつたばかりの中学生を満喫していた。

授業もついていけない訳じやないし、三影の一件からクラスにも馴
染めつつあつた。

女子からは色々聞き出され、男子からはネタで目の敵にされたりす
るが、それでも楽しい事には変わりなかつた。
もちろんそれ以外で変わつたこともある。

先の一件で、三影を教室へ連行した際に川村アミと知り合つた。
最初は三影の事を頼むとか、ちょっと気にかけてやつてくれとか、
三影つてそつちのクラスに馴染めてる?とか、情報交換程度の交流
だつた。

それが何処で仕入れた情報なのか、俺が物珍しいLBXを使つてい
ると山野バンが知り、三影を通して俺に接触してきた。

まだアキレスどころかAX-00すら持つていない。

使つていると言えばキタジマで貸し出しているグラディエーター
で、ストーリーの性質上、今はLBXを持つことを母親に禁じられて
いる。

それに、LBX自体は彼の父親である山野淳一郎（テロリスト）が作つたもので、
今のところは事故で死んだ事になつてゐる父親の形見でもある。
だからか、LBXへの興味と関心は人一倍ある。

日が暮れるまで根掘り葉掘り話倒され、キタジマから出ることを許
されなかつた。

それからは、流れる様にバン達のコミュ力の高さに飲み込まれ、放
課後暇な時はキタジマに寄るのが日課の様になつてゐる。

そして今日の放課後も、バン達とキタジマに居て
「ああ！」

今日も店内に響くカズの嘆きの声を聴いていた。

「また カズが負けた」

「え、 そうなの？」

コアパーツを弄っていたアミと三影が作業台から振り向く。

さしも興味無さそうな反応に、流石にカズが可哀想と思えてくる。

「借り物でこれかあ」

「だろ？ バンが自分のLBX持つたら、もう手がつけられ無くなるかもな」

ここ数日、バンとカズ、アミの実力を間近でよく見ていた。

やはりと言うか、流石開発者を父親に持つだけはある。センスも実力も折り紙付きだ。

バンは言わずもがな。

アミの腕前に関しては、最初からストライダーフレームが板についてるか、納得の実力だった。

ただ、カズは普通だ。

やはりカズがカズとしての能力を開花させるのは、ウォーリアードに別れ、ハンターと出会つてからだ。

エジプトの時を含めるなら割と強かつたが、アレはどう言う訳か催眠を受けた人間ではなく、催眠をかけたプログラムの実力みたいなものなのでカウントはしない。

「バンも早く自分のLBX持つたりしないのか？」

「どうだろう。母さんが許してくれるかどうか：」

そう言つてバンは頭に手を当てる。

彼の母親である山野真理絵は、直接の原因ではないものの、自分の夫がいなくなつた原因の一つであるLBXを避けていた。

理由はちゃんとある。

息子を父親の様に危険に晒して失いたくないが、それを直接言つてもバンは納得しないと知つていて、半ば強制的にLBXを禁じていた。

ある日、自宅にかかつてきた電話と戦闘でボロボロになつたリビングとLBXを持つているバンの姿を見て、バンがLBXをする事を許した。

今起きている事を間近に見せられ、これから起こる事に備えさせる為に、その日を境に息子を応援し発破をかける様になる。

何処か父親に影響されている面もあるが、いい母親である事は間違いではない。

「まあ、いつか許してくれるよ」

「そうかな……」

「あんまり暗く考えんなバン。 そう言う時は気楽にいた方が楽だぜ？」

遠くない未来に、色々と納得して持たせてくれるとは言う訳にもいかない。

近いとか遠いとかは言わないでおく。

「んじゃあ、いい時間だしお開きにすつか」

「そうね。また明日集まりましょ」

時間は4時。

まだ明るい時間帯、俺の門限は問題ないが、バン達に課せられた門限はすぐそこまで迫つてきているらしい。

「じゃ、またな！」

バン達とキタジマで別れる。

夕方で買い物客が増えてきた表通りの人混みに、3人は消えて行つた。

「じゃ、行くか」

「ん」

バン達を見送った後、俺達もキタジマを後にする。

暫く歩いていると、三影が近寄ってくる。

人混みでただでさえ普段より近づいてるのに、更に距離を詰めてくる。

「三影…？」

「何？」

「……いや、うん。何でもない」

肩と肩がくつ付きそうな距離で歩くから、妙に意識してしまつて耳と顔が若干熱くなる。

そんな俺を他所に、三影は涼しい顔で隣を歩く。
家に入るまでの間、周りからの視線が妙に気になつて仕方なかつた。

今日はキタジマ模型店に俺と店長である北島小次郎と2人きりだつた。

うちのクラスの授業が早く終わり、他クラスと終業時刻がずれ込んだから、いつもより1時間くらい早く終わった。

帰つてもやる事もないし、三影がいないからゲームセンターに行つても別段やることなぞない。なのでバン達が来るまでキタジマに居座ることになった。

店長は気さくでいい人だ。

人当たりもいいし、LBX初心者には手取り足取り教えて、子供達の練習相手もしている。

それのおかげかキタジマ模型店は割と有名な店らしい。品揃えも多いし店長は優しいし、買ってその場で作れたりといたれり尽くせりだ。

問題があるとすれば、たまに惚氣話を聞かされるハメになるため、話の振り方には注意が必要だ。

「グラディエーターの整備終わりましたよ」

「ありがとな悟。沙希がいないから、店の事で手一杯で中々手が回せなくつてな」

整備したグラディエーターをカウンターの上に置く。

整備といつても、適当に関節部にグリースを塗つて、異常がないか動かしたりバッテリーが消耗してないからなど、車で言うところの日常点検とかの程度の軽いものだ。

ただ店長が貸し出しているLBXはグラディエーターだけではない。

ウォーリア、ムシャ、ブルド、タイタン、クノイチ、アマゾネスに……あとはクイーンやマッドドックとかか。

大体10弱のLBXを貸し出していて、程度の軽い点検でも時間を食われてしまうらしい。

なので俺は整備できて楽しいし、店長は仕事が減つて楽ができる。

今の店長と俺の関係はまさにwin-winと言うわけだ。

「よし、悟。手伝つてもらつたおフライングでお前に面白いものを見せてやる」

整備した機体をそれぞれ箱に保管して一纏めにして、店の奥へと持っていく。

しばらくして店の奥から店長がカウンターに現れ、少し前に面白いものと言つていたものが手に取られていた。

「これがナイトフレームの新作だ」

カウンターに箱を立てて、表紙をこっちに見させてくれる。

特徴的な頭のトサカやマント、外見から武装まで多分参考にしたのはスバルタのスバルタ兵か、アテネの重装歩兵で間違いない。

「店長、これの名前は？」

「アキレスって名前らしい。ただ、今月のLBXマガジンにこいつのことは載つてないし、業者も違つたんだ。ただ手続き自体はしつかりしててな。多分、忘れてるだけで何処かで発注してたのかもしけん」

そう言つて店長は頭に手を当てる。

俺は頭を抱える。

今考えてみると、あの親父バンの周りが見えすぎていなかと少し訝しむ。

囚われの身のくせして、好き勝手データを外部に移送するし、科学者のくせに生身の身のこなしとLBXバトルも強いときた。

そしてこのアキレス。

十中八九、ギリシャ神話「イーリアス」のアキレス。

これのラテン語読みのアキレスから取つていてる。

名前のアキレスも、機体のデザインになつたと思われるスバルタ。どつちも巨悪とは言わないが、相手が強大な敵でありそれを撃ち破つてはいる。

まあどつちも最後は全滅するまで戦うか、勝利目前で死んでいるので、あまり良い名前ではない気もしない訳もない。

ただ、世界大会でアキレスが勝利目前に、エンペラーの自爆に巻き込まれて粉々になると言うのは、アキレスの神話を知つた後だと何

処となく納得できる。

「店長、まさか本当に覚えてない？」

「端末から履歴を漁つたんだが、それっぽいのも無くてな。多分ここ最近発注したのじや無いかもしれん」

ま、バン達には内緒でな？」と言つてアキレスを店の奥へ戻しにいく。

戻つて来た店長と一緒に、今度はグリースやドライバーなんかの整備用品のチェックを始める。

アキレスがキタジマに来たのが今日で、店長はその日のうちにバン達にアキレスを見せるつもりだ。

今日、この瞬間からダンボール戦機という一つのストーリーとして、この世界の時間が進んでいく事になる。

始まり

#1

キタジマに集まつて、アキレスを見て、適当に雑談をして、後は帰るだけだつた。

バン達がキタジマから出て行つた後、三影と一緒に帰り支度をしていた。いよいよ店を出ようとした時、店長に呼び止められた。

バンが工作台の椅子に鞄を忘れたから、それを届けてほしいと言つていた。

カズやアミは先に帰つてしまつたし、時間も遅い。
だから今から帰る俺と三影に頼んできた。

ただ俺はバンの自宅を知らない。

大まかな場所は川を挟んだ住宅街にあるのは分かつてるけど、詳しい所までは知らなかつた。

そんな時に

「私 家近いよ」

と言うので、家が近いから三影に案内してもらつた。

橋を渡つて河川敷を少ししたところに、住宅街に入る道がありそこから車がギリギリ行き来できそうな広さの道を進んでいく。

「こゝ」

しばらく進むと、中央に小さな公園がある地区に来て、立ち並ぶ家の一つを三影が指差す。

陽の光より、街灯の灯りの方が明るくなつて來た。

いくら治安がいいからと言つて、不審者がいない訳じゃない。

「ありがとな三影。あとは俺がやつとくよ」

「帰りは 大丈夫?」

「うん、帰りはなるべく明るい場所を通つてくから。じゃ、またな」

「…また 明日」

三影が曲がり角を曲がつて、後ろ姿が見えなくなるまで見送りバン

のいる家に向かう。

多分、今頃家の中では戦闘が始まっている。

音は聞こえないが、バンが襲撃された時が大体薄暗い時間帯。あるとしたら今の時間帯が一番可能性がある。

いくらホビー用品とはいえ、生身の人間に当たって、当たり所が悪ければ下手したら死ぬ。

こうなる事は幾分か前から解っていたが、改めて直面し恐怖が湧いて出てくる。

だが、当たつた時のことを考えても仕方ない。

当たつた時は当たつた時に考えればいい。

そう自分を奮起させ、バンの家に足を進める。

手前のT字路に走つてくる車がいないか、それ確かめようとした時

「え？」

「あ」

彼らはいた。

全身黒のスーツで身を包み、性別と体格で分けているのかそれぞれ違う模様の仮面をした男女3人組。

身長の低い太つた奴と、目があつた気がして声を出してしまった。それを皮切りに向こうの視線が一気にこつちに集まる。

「え、ちょ!? 姉さん不味いっすよ!!」

「ああもう! ガキに負けるし振り回されるしで何なんだい今日は!!」

「取り敢えず逃げましょー!」

キーッ! と言つて、女性の黒服が他の2人を引き連れ走り去つて行つた。

「…は?」

巻き込まれるかもしれない危険な場面に、身構え心を決めていざ行くと言う時、そこでは既に事は終わっていた。

気分はパニック映画やアニメの最後、全てが終わつてからやつてくる正規軍。気分はもはや呆れてを通り越して虚無感を感じる。

あまりにも呆気ない終わり方に、3人組が走り去つて行つた方向をただ見ていることしか出来なかつた。

@

@

@

「黒い3人組？」

結局、あの後やつてきたバンの母親に鞄を渡して家に帰った。

改めて次の日。半日授業というのもあって、正午過ぎに迎えた放課後。バンが居る教室に入り、昨日家の外で起こっていた事を話す。話した際に三影にペタペタと身体中を触られて

「蹴られてない？ 殴られてない？」

と心配された。

腕とかならまだしも顔や胸まで手を伸ばってきて、流石に羞恥心が勝つて三影の手を止める。

「と、兎に角。昨日バンの家に現れたLBX、悟が見た3人の不審者。犯人はそいつらで間違いないわね」

「でもよ。そいつらが犯人だとして、何でバンを襲ったんだ？」

手癖が急に悪くなつた三影と格闘している俺を尻目に、アミとカズが話をまとめ始める。

そしてバンを襲つた犯人の思惑を考え始める。

「分かんない。でもその3人組、河川敷でコレを渡した女人を追つてたから、多分コレを狙つてるんじゃないかな」

バンの読みは当たつてはいる。

彼らの目的はそのLBX、AX-00に内蔵されたあるもののデータが目的だった。

しかし殺しても奪い取る、と言う体で無かつたのか。襲つたはいいものの、結局自分達のLBX^{デク}は破壊され、AX-00は無傷という大失態を演じた。

彼らの上司の都合なのか、それとも彼らの心情的に命令とは言え子供を殺す事ができなかつたのか。真意は解らない。

「取り敢えず、キタジマに行きましょ。ここじゃ目立つわ」

アミの言う通り、放課後とはいえた教室内にも生徒はいるし、あまり騒ぎ立てると言える事も話せなくなる。

バンが手に入れた……と言うより、前触れもなく半ば押しつける様に託された謎のLBX。

一通り満足したのか、ボディータッチを終えた三影から解放され、バン達と一緒にキタジマに向かう。

#2

放課後直ぐにキタジマに場所を移した。

ここなら実質プライベートルームの様な場所で、知らない人間に話を聞かれる心配もない。

アミとカズが店長に頼んでバンのLBXを一応調べてもらつていった。

「AX—00……AX…」

店長がノーパソと睨めっこしている。

タイニーオービット社プロメテウス社、クリスターイングラム社、はたまた海外の企業のホームページや情報サイトまで調べていたが、結局AXと言う型番は出てこない。

「昨日のアキレスといい、何処にも載つてないな」

やはり何処を探しても情報は出てはこなかつた。

諦めてノーパソを閉じて、カウンターの下に片付ける。

「ま、いいんじやないか？　バンも遂に自分のLBXを持てた訳だし、今はそつちが重要だ」

取り敢えず、バンがLBXを持てた事は良い事だ。これからどんどんヤバい事に首を突っ込んでいく事にはなるが。

態々お祝いムードをぶち壊す様な事を言う必要もない。

素直にバンに祝いの言葉でも送つておく。

「ま、おめでとうつて所だな」

「でもよ。これカバーべットだろ？　コレじやカツコ付かなくないか？」

カズがそう言う。

AX—00がアキレスのフレーム装着を前提としたものだから、今ままだと見た目的にも性能的にもバンの実力を引き出せない。

そこでアキレスなんだが、ここにはない。

うちの中学校の裏、スラム化した未開発地区を根城にしている郷田ハンゾウ。所謂番長が回収して行つた。

「そうだな。バンがLBXを手に入れた記念だ、昨日のアキレスをお

前にやる!」

「本当!？」

「嘘は付かないさ。ちょっと待つてろ」

そう言つて店裏に向かおうとした時、奥から言いにくそうな沙希さんが出てきて

「その……アキレス、売っちゃつた」

綺麗なテヘペロを見せつけてきた。

それはもう、夫である小次郎店長ですら呆気に取られる程に。

「え!? いつ?!」

「今朝、開けた時に…ね?」

「…バン。すまん!」

手のひらを合わせて綺麗な動作でバンに頭を下げる。

「店長が謝る必要はないよ。元々売り物なんだし、売れちゃつたなら仕方ない事だよ」

頭を下げる店長、少しシユンとしながらも店長のせいではないと言うバン。なんとも言えない空氣の中、レジを漁る沙希さんが視界に入つた。

そして一つのカードを手に取つて見て、スースッと深く息を吐く。

「……ごめん」

「え? どうした沙希?」

「このクレジットカード……偽造品だつた」

さつきの比にならないくらい見事なテヘペロ。

しかし今度ばかりは店長も黙つてはいなかつた。流石に自分の店で窃盗事件が起きるとは思つても見なかつたからだ。

「偽造!? 分からなかつたのか!?」

「ごめん…寝ぼけてたかも。よく見たらＩＣチップもないし、会社のロゴも見た事ないなだし…」

「そのカードを使つた人、覚えています?」

申し訳なさそうに頭を描く沙希さんに、アミが犯人の特徴を聞く。頸に手を当てながら、しばらく唸つてゐる。すると何か閃いたのか、ハツとして沙希さんが

「確か郷田！ 郷田つて呼ばれてた！ しかもソイツ学ラン姿で高下
駄履いてて、いかにもつて奴だわ!!」

誰を指すわけでもないが、ビシツと指差す。

「郷田つて…あの郷田!？」

「…ふくん」

三影とカズが知っているそぶりを見せる。

カズはミソラニ中の有名な番長として、三影は言わずもがな。憧れ
はしていないが、尊敬している人間の一人として知っているからだ。
「うちの校舎の裏にスラムがあるだろ？ そこを取り仕切ってる番長
が郷田ハンゾウだ」

「盗みをする つて言う感じじゃない。けど、こればかりは 会つて
話さないと 分からない」

「…じゃあ、学校に戻るか」

「うん。 そうしよう」

スラムは中学校の裏側、だから一度学校に戻る事になる。

店を出て行く時、気をつけるんだぞと別れ際に店長に言われ、それ
に応えてキタジマを後にする。

一度離れた学校にまた戻ってきた。

目的はスラム。体育館の裏に続く通路を辿つていくと、スラム方面に向かう下り階段があり、そこをさらに降つていく。

昔の大通りだつたか、そこここ広いコンクリートの道の先に「立ち入り禁止」と書かれた看板とフェンス、雑に施錠されているフェンス扉があつた。

何もかもが錆びたり朽ちたりしていて、インドとかバングラデイシユのスラムとか、中国の九龍城みたいな空氣感が漂う。

行政が開発予定地として残してゐるのか、厄介者の溜まり場になつていて下手に手が出せないのか、再開発するにしても優先順位が低いのか。

まあそれらの理由があつたとして、中学校の裏にスラムつて流石にどうなつてんだろうね。

「ここがスラム…」

「表は静か 中に入れば、無事で戻れない」

三影も郷田がいる場所がスラムだとは分かつてゐるが、スラムの何処にいるかまでは分かつていらない。

だからスラムに入る必要があつたんですね。

ただ、スラム内に入る前に、一つ聞きたい事がある。

「カズ、大丈夫か？」

本来なら、学校でカズがバン達と一緒に郷田と戦うかの葛藤があつた。

それがないという事は、カズが途中で抜けるかも知れないし、なんならなあなあで進んでいる現状に不満を抱いてるかも知れない。

そのための確認だ。

「郷田つて名前を出した時、少し不安だつたろ?」

「…ああ」

カズが頷く。

「うん。郷田先輩がうちの学校でなんて呼ばれてるかは…まあ、知つてるよな」

「破壊神 郷田。だろ?」

「カズは大丈夫?」

「大丈夫…じゃない。けどよ、ここまで来といて逃げるつてよ、流石に後味が悪いぜ?」

そう言つて手をひらひらさせる。

人数がいる安心感か、来る途中に覚悟完了していたのか、カズは俺たちと共に来る様だった。

「じゃ、行くか」

@-----@-----@

フエンス扉の鍵が破壊されてたから、そこからバンを先頭にスラム内に入つていく。

途中途中にいる不良達から視線を集めだが、絡まれる事はなく上層に続く坂道に向かう。その途中で

「待ちな!」

こつちを見つけたのか、小道から身長差が激しい2人組が現れる。「ここはあんた達みたいな優等生が入つてくる場所じやない。ほら、回れ右!」

大声で俺たちに一警告を発してくるが、当然右に回るはずも無く、バン達は身構える。

それを見た少女、矢沢リコが笑う。

「へえ、ここが何処だか分かつてんの?」「痛い目を見るだけでごわす」

その後ろで年齢に見合わずデカい、巨漢の少年。亀山テツオが腕組みをして前に出る。

「だから来たんだ! 郷田つて奴を捜しに!」

「郷田つて奴を捜しに!」

「郷田つて奴、泥棒なのよ!」

バンとアミがスラムに来た理由を述べ、真っ向から対立する。

「へエヽ、泥棒ねえ!」
ドロボウ

泥棒という言葉に反応したのか、さらに奥から現れる人影^{年齢詐欺}がいた。使っているLBXに自分を似せたのか。猫背で肌色が悪い少年、鹿野ギンジだ。

リコとテツオに近づきながら、こつちを見定めて
「リコ、テツオ。郷田君が言つてたのはこいつらだ。プラスアルファは居るがよ……」

放課後に郷田について聞き回る事がなかつたせいか、郷田が事前に追つてくる人間について教えられていたらしい。

なんならリュウもいない。

まあ、リュウ自慢のブルドを破壊されないだけマシか。

「お前ら、郷田の仲間だな?」

「仲間じやくて、同志でごわす」

「一緒みたいなもんだろ……」

俺らに聞こえる程度の声でカズが反論する。

「ウチラを知らないんか? こいら邊で自己紹介とか行つちゃう?」
行くでごわす!と意気込むテツオと反対に、あれをやんのか……と乗り方はないギンジ。それを気にしないリコ。

ギンジとテツオが土台になり、リコを担ぎ上げる。

「クイーンのリコ!」
「ナズーのテツオ!」
「マツドドツグのギンジ!」

『我ら 四天王・郷田三人衆! 見参!!』

パチパチパチ

手を叩く音が2人分聞こえただけで、通路には彼らの声がしばらく響き渡つた後、静寂が訪れた。

隣を見てみれば、バンもアミもカズも、少し引いていた。

「だから嫌だつたんだよ…」

「三影からは聞いてたけど、割と迫力あるな
でしょ？」

少し引いているバン達と、割と疲れている三人衆をよそに、率直な感想を述べた。

眼前でやられると、割と迫力がある。

テツオが年齢の割に巨漢なのと、愚痴を言いながらもギンジがなんだかんだで参加しているのもあって、チームワークを感じられる。
「でももう一度見たいと言われたら…」

「一回で 十分」

「うん」

「そこ！ 好き勝手言うんじゃないよ！」

割と小声で話していたつもりが、向こうにダダ漏れだつたらしく、リコに突っ込まれた。

体制と心の平静を整えた3人衆が、改めて俺たちの前に立ちはだかる。

「ここに入つた奴がどうなるのか、思い知らせてやるわ！」

そう言つて、三人衆からバトルを挑まれる。

「行くぞ！」

三人衆とバトルを開始する。
ルールは簡単。

なんでもありのアンリミテッド。破壊されようが破損しようが、ルールを選んだ奴の自己責任。

参加した時点で言い逃れはできない。
決闘みたいなもんだな。

「三影。しばらく頼む」

「ん」

ジャングルだつたか、マヤ遺跡だつたか、とにかく鬱蒼としている場所だ。

クイーン、ナズー、マツドドッグ。

それぞれの特性を活かせる場所で非常に厄介だ。

「カバー・パットで勝てる? でも?」

「やつてみるさ！」

バンとリコが、カズとテツオが、ギンジにアミと三影が、それぞれ相手している。

バン達が三人衆と戦う中、小柄でもない団体を茂みに隠れてた。

クイーンは移動手段がホバーなだけで特別強いと言うわけではない。

ナズーも潜水能力があるだけだ。

ただしマツドドッグ、こいつはダメだ。

アタックファンクション枠か何かに、自機を視覚やレーダーからも透明にするステルス技術があつた。

だから真っ先に潰す。

茂みから姿を出してマツドドッグに狙いを定める。

このビームライフル、燃費は最悪だが1発だけなら相手を一撃で破壊できる物を撃つことができる。

初めから数で有利なだけに、イレギュラーで数を減らされるのは痛

い。だから、外す事はできない。

「三影、アミ。射線注意」

「ん」

「嘘でしょ?!」

「何?！」

俺の注意と共に、ライフルの先から閃光が特徴的な発射音と共に1つの矢になつて飛び出していく。

クノイチは不意の出来事ですぐに離れたが、アマゾネスはギリギリまでマツドドッグに纏わり付き、ビームライフルの射線にマツドドッグを蹴り飛ばし、飛んできたビームに貫かれる。

コアスケルトンごとコアパーツをグチャグチャにされたマツドドッグはそのまま爆散、破片を撒き散らして脱落する。

マツドドッグは始末した。

次にバンとカズの援護をと思つたが

「そこお！」

鋼鉄棍を投げ槍の様に投げつけ、クイーンのホバー機能がある下半身に命中させる。

「んな馬鹿な?!」

「もらつたあ！」

機体の姿勢が急に崩れたせいで、脱線した列車の様に地面を掘つて倒れる。そこにAX-00が引き抜いた鋼鉄棍を振り下ろし、クイーンを破壊していた。

カズはと言えば、もはや残党狩りの様相で、手の空いたアミと三影がナズーを処理していた。

@

@

@

あの後、Dキュー^ブを回収した三人衆はスラムの奥へと消えていった。

なんとか……と言うわけでもなく勝てた。まあ人数から考えて、楽勝できないとおかしい戦いではあつたけど。

「幾ら不意打ちって言つても事前に耳打ちくらいしても良いんじやない?!」

「…スミマセン」

正座させられ、しばしの間アミに説教を食らつた。

その後に三影に慰められて、ちよつと心に来た。

別に三影の行為が悪かつたわけじゃない。

単純に、異性の同級生に親の様に怒られて、また異性の同級生に親の様に慰められて、自尊心というものが無くなりかけていた。

「おつかねえだろ、アミ?」

「うん、あれ将来尻に敷くタイプだ」

しばらくして落ち着きを取り戻し、逃げた三人衆の追いかけた。

進んだ方向しか分からなかつたが、答えはすぐ見つかつた。

階段を上がつて右に曲がつたところに、大きな隔壁扉があり大きく赤いペンキで「我道」と書かれていた。

扉の周りは妙に小綺麗だし、荷物の詰まつた木箱やバツクが整頓されている。埃臭かく薄暗かつたが、ここは日当たりもいいし空気も少しづかり綺麗で、吸つていられないレベルの臭いではない。

扉の前にバンが立ち、一呼吸置き

「…行こう」

そのまま扉へと進んでいく。

センサーが生きているのか、バンを認識して閉じていた隔壁が開き、バンを先頭にして建物内に入る。

壁は破壊したのか朽ちたのか、壁に大穴が空いていた。

その手前、部屋の中央に展開されたDキュー^ブに、ソファに座る半裸の学ランの男。その後ろに、打ち負かした郷田四天王の三人衆が立つていた。

「あんたが、郷田先輩?」

「ああ、俺が郷田だ！」

俺の問いに親指を立て、自分の胸に突き立てる。

何が起こっているか、とつぶに検討がついているらしい。こつちを

一人一人見定め、もう一度バンを見て笑う。

「お前らの目的……はまあ、ここまで来るってこたあ、コイツ以外の事じやないだろ？」

テツオが取り出してきたアキレスの箱を郷田に手渡し、それを見せつける。

「キタジマから盗んだアキレスを返せ！」

「ああ、ほらよ」

「え？」

カズとアミの腑抜けた声が聞こえるが、それを気にせず郷田さバンにアキレスを投げる。

急に投げられたのもあつて、少しの間手の上で遊ばせた後、しつかりと箱を掴む。

「そいつのフレームは俺のLBXに合わなくてな。お前に使わせてやる、そのかわり……」

そう言つて、郷田は懷からLBXを取り出す。

ブロウラーフレームの中でゴツメのデザインに、相手を抉り取りそうな破岩刃、そして悪人ツラと胸の我王砲を備えた、プロメテウス社の新型LBX。

「俺と戦え。俺の『ハカイオー』とな！」

AX-00はアキレスのアーマーフレームを装着。正真正銘「アキレス」となった。

それで終わればよかつたが、郷田がバンにアキレスを渡したのは勝負する為。バンの作業が終わって、このままバトルが始まる。

展開済みのDキューブに5体と1体のLBXが降り立つ。

普通ならただのイジメだったが、郷田以外の3人はさつきの戦いで自分のLBXを失っている。

だからバトルに参加できないというのと、単純に郷田。向こう側がハンデとして俺たち全員で挑んでこいと言った結果だ。

「ひよっこが幾ら束になろうが勝てるかよ！」

「何をお!!」

バンのアキレスを先頭にカズ、俺と続していく。

アミと三影は俺たちが正面から仕掛けている間に、脚を生かして即背面に周り、そこから嫌がらせの如く攻撃する算段だ。

バンが郷田の初撃を盾で受け流し、ランスで突く。

ただ僅かに機体を捻られ、バンのランスは掠め突きの勢いがなくならずハカイオーの最後へ流れる。

「小癪な!?」

アキレスでできた隙を埋める様にウォーリアードガンダムで詰める。

意表こそ突けたが、直ぐに破岩刃を横払い対応。咄嗟にウォーリアの前に出て盾で防ぐ。

ハカイオーも咄嗟の行動故にそこまで速度とパワーは乗つてないかつたが、それでも最新鋭機と言うだけあってパワーはブルドやタンタンの比ではない。

前に進んでいたはずが、受け止めた瞬間横に強制移動させられる。

「悪い悟！」

「無理無理無理ッ！こんなまともに食らった盾」とイカれる！」
踏ん張らなかつたおかげで、機体に深刻な損傷はない。

ただ盾が少し曲がった気がする。

郷田は追撃を入れようとしたが、回り込んできたアミと三影に背面を攻撃され、また立ち止まる。

「クソッ うざつてえ！」

「まだまだ！」

復活したバンがアキレスでハカイオーにタイマンを挑む。

数度の攻撃はハカイオーを捕らえるが、それも最初だけで反撃を受け止めたアキレスがハカイオーのパワーに押される。

攻撃力と破壊力で差がある以上、ダメージ交換は不利。攻撃を防ぐしかなく一度ハマると抜け出せないノックバックハメ状態になり、次第に攻守が逆転していく。

「さっきまでの威勢はどうした!?」

「クソッ…」

「くらいなあ！」

バンを執拗に攻めるハカイオー目掛け、ビームサーベルを振り下ろす。

見慣れない武装に危機感を抱いたのか、郷田はアキレスへの攻撃をやめ鈍重な機体を精一杯動かす。

そのお陰か、すんでの所で左肩を掠つただけに終わつた。

しかもコアスケルトンには届かず、綺麗にフレームの部分だけを削ぎ落とした。

「何ッ!?

「それで当たらない?!」

俺としては完璧に両断するつもりだったが、伊達に破壊神を名乗っているだけはある。反応速度も判断力も、数で劣つていながら比較的に冷静で居続けられる精神力。

普通に只者じやない。

ただ流石に驚きを隠せなかつたか、削ぎ落とされた部分をマジマジと見つめる。

それを好機と思つたか、バンのアキレスがハカイオーに突進していく。

く。

「ち！ 仕方ねえ、最後まで取つとくつもりだつたが、遠慮なく使わせてもらうぜ!!」

「またバン！ 下がれ！」

「え!?」

郷田が何かしようとしていることに気付いたカズがバンを呼び止める。

ただ、今回の場合は悪手だつた。

「ハッ！ 止まつたな？」

「アタックファンクション」
ガオーキヤノン

我王砲!!

ハカイオーポ自慢の我王砲。

まともに食らえば大抵のLBXは死ぬ。ハカイオーパの最大投射火力がアキレスに突き進んでいく。

「やらせはせん。やらせはせんぞおお!!」

「アタックファンクション」

ショックカノン!!

ビームライフルを3連射。

やがて3発のビームは螺旋を描きながら一つ合体し、色を蒼く輝かせながら大きな光の槍になり突っ込んでいく。

我王砲とショックカノン。

両方の必殺技が激闘、膨大なエネルギーを爆発させ、あたり一面に爆煙と爆風を撒き散らす。

攻撃自体は防げたが、視界不良な上ハカイオーパを見失い、お互の位置も把握できなくなつた。

「何処にいる…」

バンがそう言つた直後

「もらつたあ!!」

煙をかき分け現れたハカイオーレが破岩刃を振り下ろす。

ハカイオーレの行動と煙が晴れた場所に、アキレスを確認できたが俺がいる位置からじや救援に行けない。

「バン！」

「駄目、間に合わない」

三影とアミが向かうが間に合いそうにはない。

「どけえバン！」

やられるまであと少しと言った時、アキレスをタックルで追い出し、盾を構えるカズのウォーリアーレが現れ、身代わりになる。

「まずは一つ！」

勢いを殺さずに放つたハカイオーレの攻撃は防御体制のウォーリアーレを空中へと打ち上げる。

「碎け散れえッ!!」

東部のスラスターを噴かし、打ち上げたウォーリアーレへ向かい、破岩刃を振り下ろす。

受け止められるはずもなく、空中から地上へと落下したウォーリアーレは、落下の衝撃と受けたダメージの関係で爆発四散。

カズのウォーリアーレは言葉通り碎け散つたのだ。

「その目に刻め！　これが地獄の破壊神。』『ハカイオーレだ！』

ウォーリアーレだった残骸を背にし、ハカイオーレはアキレスに破岩刃を突きつけた。

カズのウォーリア―が無惨に破壊されたが、元が4対1。こつちの勝ちが揺らぐ事もなく、バンがハカイオ―にどどめを刺した。

カズがやられるまでハカイオ―は調子が良かつた。ただピ―クはウォーリア―を破壊したまでで、その後は拍子抜けするくらい淡々と事が進んでいった。

アミが見つけた弱点を共有し、バンと俺が注意を引いて、三影とアミがずっと回り込み背面攻撃を仕掛け、最後は余力を残していたアキレスの必殺技ライトニングランスでどどめを刺した。

アキレスはバンのもの、郷田の意思決定に四天王が反論する訳もなく、入口とは別のルートでスラムを後にして、薄暗い裏路地を抜けば、何もない空き地と学校と反対にある大通りに出る。

郷田にも勝ったし、アキレスも返ってきた。スラムからも無事に出来られて日常の景色に戻つて来れた。

普通なら喜ぶけど、バンはカズのウォーリア―の事を悔やんでいる。

「ごめん、カズ…」

「気にすんなよ、バン。アキレスも取り返したし、俺たちは何もなくスラムから出られた。それでいいじゃねえか」

バンの性格をよく知っているカズは、いつも通りヘラヘラして何ともない雰囲気を出す。

バンはバンでそんなカズの態度に、「分かった」と言うが、それでも気にしているらしい。人の事を思う余りに思い詰めすぎるのがバンの良いところであり、悪いところでもある。

「それでも郷田の奴、何であなことしたんだろうな」

「分からない。『守っていた』って言うのも、何から守つてたのか検討もつかないし…」

今の段階じや、バン達も店長も、地域で有名な不良が下町の人気店

で万引きを勧いた。そう言う認識でしか無い。

実際はバンの父親が檜山蓮を通し、更に郷田ハンゾウに通して起きた出来事だった。

バンの父親は形だけだが軟禁状態で、外に出ることができない。檜山蓮も、今は自分の手を汚して足をつけたくは無い。ただ、檜山には地下大会アングラビングを経て、自分を尊崇する郷田ハンゾウがいた。

郷田は未成年の上に学生、ただの不良学生の万引き。世間ではそう処理され、郷田の不良としての面子は泥を被るけど、檜山蓮として足がつく事はない。最悪、バレてもレックスとしての経験を捨てればいいだけ。

ここまで考へてるからは分からぬけど、向こうもよく考へてるつて事だけは何処となく伝わってくる。

「そこまでする理由　あつた？」

「バンはフレーム分が必要だから死活問題だつたけど、郷田先輩はちよつと……」

「そもそも、あの郷田を鼻で使える人物つて、どんな奴なのかしら？」
とまあ、現状のバン達の認識はこんな風に、そこまで深く分かるはずも無い。

「まあ、そんな事よりカズのLBXだな」

「ストライダーフレーム　どう？」

有無を言わさず三影がサッとカズに詰め寄る。女性に人気なストライダーフレームで、同年代や先輩の女子は大半がこのフレームだ。
ただ、プレイスタイルと合わないのか、すぐに他のフレームに走るプレイヤーが少なくない数居る。

実際、ストライダーフレームに関しては新型が出る事もなく、ナイトやブロウラーと比べても偏った性能。あと一年もすれば変わるかも知れないが、現状は扱いきれずに扱いやすい環境フレームであるナイトやブロウラーに流れて行く。

自分が使っていると言うのもあるが、三影としてはアミ以外に同志を増やしたいらしい。

「いやあ……今すぐは、ちよつとな？」

「三影、ステイ。カズが困つてる」

「……ん」

三影をカズからやんわり引き離す。

長年の付き合いがないバンやアミでも分かるくらい、三影はスゴイショーンボリしていた。

今薦めでもどのみちハンターが手に入るから、その必要はあんまりないと思う、と言うかないぞ…………なんて、口が裂けても言えないから、胸の中にしまつておく。

「兎に角、今日は帰りましよう？ 色々あり過ぎて疲れちゃった…」

「じゃ、今日はお開きで。各自帰り道は気をつけて」

そう言つてバン達と離れ、自分の家へと帰宅する。

@

@

@

と、言う感じで今日の放課後は、キタジマで時間を過ごしている。前もそうだつたけど、自分のクラスは担任が授業切り上げるのが早いせいで、バン達と終業時間が噛み合わない。だから何かしらで時間を潰す必要があつたんですね。

今はずっと貸し出しのLBXを店長と一緒に整備している。

「助かるなあ悟。最近忙しくて、殆ど手をつけられなかつたんだ」

「大丈夫ですよ。自分も整備のこと知りたかつたんで」

親父が言うに『上手く扱うのは二流のすること。一流は整備も扱うのも上手くなくちゃいけない』

と、言うらしい。

プロチームでもないなら整備専門の人員なんていないし、自分の物

くらい把握してないと、いざつて時にちょっと無茶ができないし、出先で壊れても自分で修理出来ないのは不味い。

「あ、店長」

「ん？ なんだ？」

「ちょっと相談がありまして」

整備中の雑談の流れで、バンがカズの事で悩んでいる事を伝える。アキレスを盗んだ郷田の事と、アキレスを取り返す為に至るまでの経緯。

結果的に自分を庇つた事でLBXを失つたカズに、バンが少なからず負い目を感じている事。

「カズがLBXをねえ……」

郷田の被害者達の容態は様々。LBXを辞める者、郷田がトラウマで学校に来ない者、郷田にコリて学校ではLBXをしない者。

郷田と同レベルの実力者が存在しないから、現状負けた側に逃げ場はない。

教師も首輪がつけずらい郷田を避けている。真っ向から彼に論ずる事が出来るのは自分とバン達の担任くらい。

勝負には負けたが試合には勝つたカズはマシだけど、バンに郷田が負けた事は、仙道がバンと戦う時に初めて知ったのを見るに、まだ周知されていない事実。

カズが勝つたと言いふらすとは思えないけど、言つたところで虚言として受け取られそうのが関の山。

やつぱり負けた人間に厳しすぎるような気がする。

「分かった。俺からもバンに何か言つておこう」「お願いしますよ」

バンみたいな人間は全部自分が悪いって言う考えをする事がある。友達思いなのはいい事だ。ただちょっと自惚れがすぎる気がする。

いい事なんだろうけど、受け取り側が違えば不愉快になる事だつてある。ジンとかそこら辺は気を付けなきやいけない。

なんて事考えつつ、仕事はしつかりこなして行く。グ里斯を塗り終わって、パツクリーナーで拭き取つてカウンターの上に一つずつ並

べて置く。

「ああ！ そうだ悟、届け物があるんだ。頼まれてくれるか？」

「別に大丈夫ですよ」

カウンターの下から現れた鞄を受け取る。

バンがいつも身に付けてる肩掛け鞄と、同じ種類のものだ。

「忘れ物がな。河川敷に居るはずだから、届けてやつてくれ」

「じゃ、ちょっと行つてきますよ」

「おう！ 頼んだぞ」

「お兄ちゃんありがと～」

「今度は気をつけてね」

場所も近いし、言われた通り持ち主は河川敷に居たからそんな手間取るような事はなかつた。

小学生くらいの女の子に、荷物をサッと渡してサッと去る。ポリシーでもなんでもないけど、用がないならさっさと帰る。河川敷に1人、それでいてやる事もないし。

鞄を受け取った女の子はせつせと駆け足で川辺の一団に向かつて行く。どつかのハーフか、えらく綺麗な金髪が目立つ子だった。

やつぱり子供はいいね、こういう時は見てて和む。決して相手が女子だからという訳じやないよ、断じて。

ちょっと邪な自分が出てきそうな気がして、自分はノーマル、なんて考えながら堤防へと階段を上がつて行く。

「…………ん？」

階段の途中、見慣れた姿が目の前から階段を降つてくる。

柄が悪いのは元からだけど、更に目つきと顔つきが悪くなり何処となく近寄り難い雰囲気を出す、いつもとは違うカズだった。

「よ、カズ。バン達と一緒にじゃないの？」

「…………」

こつちの問いかけに返事はない。ただし、睨みつけるような目つきでこつちを見てくる。

「……山野バンじゃないが、まあいいか」

「何言つてるんだカズ？」

知つてているとは言え、心配して見せたがこつちの都合はお構いなし。いつものチャラい感じは抜け落ちていて、強気で他人を見下している様な所は、何処かの幼い強化人間を思い出す。

これを無意識に他人にさせる催眠術か、マインドコントロールの類か。改めて末恐ろしいなあ。

「悟、バンを呼べ」

「バンを？」

「さつさと呼べ」

「まあ、呼ぶけども……」

渋々進んだ道を戻り、河川敷に降りる。

徐にDキュー^ブを放り投げてから、カズが懐から取り出したのはいかにもと言うLBX。

これ以上話す義理はないのか、こつちに興味を示さなくなつたカズは開いたDキュー^ブの前で仁王立ち。バン以外の人間には我関せずと言つた所。

「あ、もしもし？　バン？」

取り敢えず、バンには早く来てほしい。そう思いながら、CCMの向こうにいるバンに問いかける。

呼びかけに応じたバンが、アミと三影を引き連れて河川敷に現れてから数分。最初こそ、カズの新しいLBXにバンは興味津々だが、結局いつもとは違う不遜な態度に違和感を覚え、そのままカズから勝負を挑まれる形でバトルにもつれ込んだ。

そして今、バンの劣勢でバトルは続いている。

カズの行動も癖も全く変わっているし、バンは動きが読めずに地形に左右されながら戦う。

ただそれ以上に、バンが目の前の状況を飲み込まずに戦つてゐるというのがある。

そりや、昨日までへこたれてた知り合いが、今日には親の仇でも見る様な目つきと態度で勝負を挑んで来るんだから、何があつたか気になつて仕方がない。

「悟、ちよつと不味くない？」

「いや、まだ分からない」

「何故？ カズが押して バンが押されてる」

大丈夫大丈夫。瀕死になつたらVモードでエジプト破壊するから……て、言えたらどんだけ楽だろう。

「バンのアキレス。店長も言つてたと思うけど、三影やアミとかの市販品と違つて、カタログを見かけないんだ。それにバンの話だと、アキレスを狙つてる連中もいるんだろう？ だから、あの機体つて何かあるんじやないかなつて」

「悟のはどうなの？」

「あつたら郷田先輩の時に使つてた。と言うか実力差的にあつたなら使いたかった」

使いたいけど、システムを作る頭も施設もないから、無い物ねだりだけど。

載せるとしたらEXAMかHADESあたりか。ただ使うにしあつてどちらもかなりリミッターを掛けないと、ちよつと怖い。

EXAMもHADESもそうだけど、基本システム機のシステム発動は一種のドーピングみたいなもの。発動時の効果が強ければ強いほど反動も大きくなつてくる。

動く部分は悉く逝くし、センサー系も逝かれるし、コアパーティなんかはそう言う時の排熱考えてないから多分色々固着しちゃいそうだし、問題は山積み。

確実に道連れにできる時とか、退き口戦法で玉碎する以外はあんまり使う機会は無いし、毎回使うにしても整備に殺されている。

それを考えるとVモードがどれほど異常なのか、分かつてもらえるだろうか。少ない反動で過度なドーピングを行つても平気な機体とシステム作る辺、やつぱりあの博士世界救う氣ないんじやないの？

「……」

「クソツッ！」

悪態をつきながらもバンは戦闘を続ける。

決定打を与えないバンに、カズはただ攻め続ける。バンも次第に苛立ちからか、操作が荒く隙を見せるようになる。

そこを狙つてか、アキレスの攻撃を受け止めわざとらしくエジプトが怯んで見せる。

「そ、こ、つ！」

バンが食いつかないはずもなく、怯んだエジプトにアキレスのランスを一突き。

それ待つっていたと、飛び出してくるランスを得意げに巻き上げる。

弧を描くことはなかつたが、見事にランスを手放したアキレスに、決着を付けるべくそのまま畳み掛ける。一撃目を盾で躱すもナイルブレードか、エジプトの身軽さからか、アミのクノイチレベルの攻撃速度でアキレスを押し倒す。

「な!?」

「終わりだな」

無常に刺そうとするカズ。

咄嗟にアミが止めようとクノイチを出すが、それよりも先にエジプ

トのナイルブレードが振り下ろされる。

けど、それよりも先にアキレスの左腕が、エジプトの右腕を殴り壊すのが先だった。

「!?

「な、なんだ……これ?」

アキレスが瀕死になつた為、自己防衛の為「Vモード」が発動。バンのCCMが扇状に開き、アキレスが黄金に輝いた。

その後、システムの元で動くアキレスが、利き腕を破壊されたエジプトに襲いかかった。

@-----@-----@

ほぼ暴走状態でリミッター無しのアキレスに、武器を取ることすら許されず、一転して一方的に轟られた後にエジプトは破壊された。システムの軛から解放されたカズは、正気を取り戻したが、やっぱり記憶の類は全くないと言う。

胡散臭い高架下の露天市で、エジプトを見つめた時から河川敷で仰向けになつた所まで、まるで寝ていたみたいに記憶が抜け落ちているらしい。

兎も角。カズは不本意ながらも手に入れた2代目のLBXを破壊され、また一からスタートする事になる。

が、今日に関してはバンたちとは別行動だ。

「……で、親父。今日は何するの?」

「ちよつとな。知り合いが面白い事を考えたんだ。だから、悟のLBXで試してみようと思つてな」

珍しく呼び出されたと思つたら、親父の好奇心の実験台にさせられ

るらしい。

いつもと変わらない様子だけど、親父は嬉しい時と楽しい時は口角が上がる。態度では出でこないけど、顔によく出るタイプで逆に不機嫌な時は口角が下に僅かだけど下がつてゐる。

今日はいつも無く機嫌がいいらしい。

家に着くなり、親父の作業場兼自室に連れ込まれ、言われるがまま作業台の上に Mk—I を差し出す事になつた。

「それで。試したいことつて？」

「何個か譲つてもらつたんだが、まずはコレだな」

机の中から二つのパッケージを取り出す。

電子機器には必ず取り付けられている基盤、それよりもはるかに小さいものが封入されている。

「？ 何それ？」

「この青いパッケージが『射撃補正プログラム』 こつちのオレンジが『格闘補正プログラム』のチップ……らしい」

どつちもどこかのコロニーで酸素欠乏症になつた人間が開発しそうな物品たちで、どこか聞き覚えのある名前だ。

多分、文字通り格闘と射撃に對して補正が掛かる、CPUとはまた別の何かだろう。

名が体を表しているのは解つたし、どう作動するかも大体は検討がつく。問題はそれをどうやつて LBX に還元するのか。

「ここに側だけの CPU がある。これにプログラムのチップを差し込んで、コアパーツに組み込めば良いらしい」

「らしい……て？」

「説明書に書いてあつた」

そう言いながら、断りもなくチップを CPU の中に差し込んでいく。

「それ、信用して大丈夫？」

「心配しなくとも、父さんの知り合いは、この手の事じや結構有名なんだ。安心して大丈夫さ」

「……本当に騙されてない？」

「信じてないだろ？ それなら、今度会わせてやる。きっと驚くぞ」

そう言つて Mk—IのCPUを取り外し、曰く付きのCPUと載せ替えた。

側を閉じて、フレームを付け直し、最後に適当に清掃した後、Mk—Iを渡される。気分は何処かの軍属の息子。最も、向こうは胡散臭いシステムに半信半疑で、結局途中で捨ててたけど。

「後で付け替え方を教えよう。取り敢えずは父さんの作業机の棚に入れておくから、好きに使うんだぞ」

そう言つて素早く部屋を後にして、上機嫌にそのまま外出していく。

何かを積まれたかは知らないが、結局実験台にされてることは変わらない。モルモット隊じやないんだぞ。

「……はあ」

親の身勝手さにため息を吐く。

変な細工をされて返されたMk—Iを見る。ただ、自分としても、このプログラムがどこまで有効かは少し気になつていた。

「……試してみるか」

相手がいなければ実力は測りようがない。身支度を整え身軽になり、商店街へ向かう。

ある日の放課後。

いつも通りの気分で帰宅の準備をする。

結局、親父が何をしたかったかは分からないし、試そうと思つた時に限つて誰とも会わないと言うね。

わざわざ呼び出す程でもないから、結局Mk-IIを動かす事はないし、なんなら親父が下手やつてないか、あの後徹底的に分解整備することになった。

「お、悟」

「あ、マサルじやん。どうかしたの？」

「なんか女子が呼んでるぞ」

瞬間嫌な予感がしたので直ぐ様扉に向かつて走る。が、扉の向こうには壁の様に佇む女子達が、背中には男子達を従えた女子の姿があった。

流石はクラスの殆どが構成員のグループだ。耳が早い上に動きも早かつた。

「はいはいこっちですよ～」

「ちよ、え？　は？」

両腕を拘束され、女子に連行されるがまま椅子に座らされる。

何がそんなに面白いのか、大半の人間がニヤニヤしながらこっちを観察している。そして対面にはこのグループ……と言うより、クラスを仕切る女子が優雅に着席する。

「さて、悟くん。なんで君がここに呼ばれたかご存知？」

「……さあ…」

最もらしく困惑して見せたが、「全てバレてるよ」と言わんばかりの澄まし顔から、CCMのある写真を掲示する。

写っていたのは、三影と自分が2人でゲームセンターに入り、出て行く際の写真でだった。

「これはどう言うことかな～？」

「え？ それは…」

「隅におけませんなく悟くん？」

「方や大人しくて優げな女の子、方や何もかもフツーの男の子…何をどうやつたら巡り合つたのか」

「…なんか、悪口言われた気がする」

「そんな事は別にいいのよ。重要なのは…」

対面の女子が席を立ち、自分の隣まで寄つてくる。

勿論、いくら女子言えど両脇を拘束されると何もできない。あと、突破しても男子達に止められてしまう。

自分の後ろに回り、女子が自分の耳元で小さく囁く。

「あんた達、付き合つてんの？」

「いや、ぜんぜん」

「…へえ、そう…」

答えを聞いて、対面に戻り着席する。

そして スウ… と一呼吸置いて…

「嘘付けえ!!」

怒りをあらわに叫んだ。

何がいけなかつたのか。実際三影とは付き合つてない、仲が親しいだけだ！（言い訳）

「あんなイチャイチャして付き合つてないとか恥を知れ恥を!!」

「これが怒らずにいられるか!!」

握り拳を振り下ろし、バンと机をひと叩き。

さつきの回答に理解を示せない様な表情だった。

普段は冷静で居てかなり大人しく、クラスのムードメーカー的な立ち位置に居る彼女が、最早普段通りで居る必要もないと言わんばかりに腹を立たせていた。

しようがないじやん。中学で恋仲つて絶対ヤバいじやん。下手すりや生徒指導だよ。自分はともかく三影にはさせたくないよ。

さつさと白状しろ！

そうだそうだ!!

男らしくしろー！

「あ、自白しなきゃアンタ。私が奪うぞ」

「何から!?」

中学一年生で、まだ小学生成分が抜けきっていないのか、おかしな言動を発し始めた。

外野の男子達や女子達まで乗つかつてきた。向こうは自白させる気満々で、最早逃げ場がない。

あと血迷つたか、奪うとか言い始めた。

どうなつてるんだこのクラス。最早スラムじやん、体育館裏のスラムとやつてる事変わらないよ。

「さ、早く！早く！」

真実を言つても納得してくれないのなら、相手が望んでいる答えを解答するしかない。

明日からクラスの恋バナのネタにされるんだと、腹を括り口を開く。

「……悟」

小さく、だけど何故かハツキリ聞こえた。

声のする方を向けば、いつも通りの三影がそこに居た。

三影？

いついたんだよ

どうする、来ちゃつたよ？

流石の本人登場に、周りもどよめく。

それをお闇せざと自分のいる方に歩いてくる。野次馬とグループのクラスメイトは次々と退き始め、遂には両脇の女子も知らず知らずに消えていた。

「…………」

「……三影？」

少しの間、さつきまで話していた女子を見つめる。

「…」

「え！ ちょっと?!」

次の瞬間、右手を掴まれ全力疾走。当然切り離すわけにもいかないから、釣られた魚の様に三影に追従して行く。

廊下は走るなどか、

@ | @ | @

校舎から逃げおおせ、気付けば河川敷まで走っていた。

持久走でもあまり芳しくない数字で記録された体力が、露骨に出ていた。息は絶え絶えで、土手の草つ原に寝転ぶ。三影も流石に疲れたのか、肩で息をしていた。

「ふう……三影、ありがとう」

口には出さないものの、頷きで答える。

ここまでくる時、結構な人に見られた。知ってる顔も有れば知らない顔もある。驚いている目もあれば、ただ目に留まっただけ、と言うふうな目もあつた。

今思い返すと大分恥ずかしいし、それだけで顔が熱くて仕方がない。

動いたのもあつて、身体が熱いつてレベルじやない。バーニングゴジラの気持ちが少しわかる気がする。

「……ねえ、悟」

「……ふう……何？」

「……ごめん」

「いや、うん……仕方ないよ」

三影は謝るけど、もう終わつたことだし、別に不満があつた訳でもないから、追求はしないし、するつもりもない。

ようやく熱も引いて、息も整え頭も回る様になつた時。真っ先に浮かんできたのは三影の手の感触だった。

考えてみれば、周囲からあれだけの距離感で見られてたのに、今まで、手すら繋いだ事無かつたんだと気付く。

「…？」

ボーッと三影を見ていると、不思議そうに見返してくる。

「……何でもない」

ちよつと恥ずかしかつたので、適当にはぐらかし、体を起こして右手を開いてまじまじと見つめる。

これが俗に言う青春つて奴なのかな？と思いつつ、心の中で愚痴つて、空を仰ぐ。明日から学校どうしよう。

あれじや最早、噂も秘密もあつたもんじやないし、悪い意味では無いにしろ話題にはなるし、教師にも目をつけられるかもしねれない。

「…まあ、いつか

どうせバレてるんだから、何を見繕う必要があるのか。半ば強引に言い聞かせる、やけになつた方が気楽だと。

「三影、頼まれていい？」

「……うん」

いつも通りに過ごす。なにも邪な事なんて無いんだから、考えるだけ無駄なんだ。なら堂々すればいいじやないか。

いつもの様に、キタジマに遊びに行つたり、適当にほつつき歩いたり、ただ隣にいるだけだつたり、たまに食べ歩きしたり、気がすむまでLBXでバトルをしたりする。

それが自分の、三影との日常なのだ。

放課後の昼過ぎ。いつものメンバーでキタジマに集まっていた。

というのも、珍しく教育委員会と教職員の会議が被つたから、午後の授業が無くなつて空き時間ができた。

特にやることもないし、カズの経過観察がてら三影と一緒に寄る事にしたら、バン達がつて感じだつた。

一応メンタルは回復したが、カズのLBXは未だに決まつていな。ウォーリアーラーを使つていたしナイトフレームは、つてバンが言つたけど、ウォーリアーラーも若干だが使いずらかつたらしい。

カズは近接戦闘を好まないタイプのプレイヤーで、常に盾とハンドガンがセットだつた。

メインアームはハンドガン、サブアームがブロードソードと、スペインのアーキバスを連想させる武器編成だ。

使える範囲だつたから我慢していたが、失つてからその枷が外れて、欲望に素直になつたらしい。

なかなか自分の納得がいくものが見つからないもどかしさと、バンにアミにと迫られたカズも流石に疲労に負けて、キタジマを後にする「カズが欲してるのは武器の性能? それとも自分が扱いたい武器を扱える丁度いい機体?」

「両方欲しい。でもカタログ見てもそれっぽいのはない」

「結局決まらずじまいね」

表参道から少しされて、小さいながらベンチと自販機がある休憩所に屯つている。

息抜きがてら、近くの商店から甘味と飲み物をせしめて、ベンチでくつろいでいる。

「条件。見直したり しない?」

「それでも決まんなくてな。ちょっと困つてる」

空になつたペットボトルをゴミ箱に投げる。

割と遠かつたが、難なくペットボトルは蓋にバウンドすることもな

く、ゴミ箱の中に収まつていった。カズも割と自覚がないだけで、遠くの物に当てるつていう才能はあるらしい。

そりやあ、化けるよね。

一息ついたところで、今度はマーヤにでも行つてみるかと談笑している最中。ある1人の成人男性が近づいて来た。

「失礼だが、君が山野バンくんだね？」

「そうだ……ですけど」

普段のタメ口が出そうになつてアミに突かれ、敬語に直す。

目の前のオールバックの男性は宇崎拓也。世に名高いタイニーオービット社社長の兄を持つ、俗にいうやんごとなき一族だ。

ただ兄より優れた弟はないの法則なのか、作中ではかなりのヘマをしでかしたりと、少し問題がある人物だ。

「突然ですまない。だが、君たち優秀なLBXプレイヤーに、是非見てもらいたいものがあるんだ」

@

@

@

誘い方が今時誘拐犯が使いそうな謳い文句だつたが、商店街の端にある、いつの間にか出来ていた喫茶店に入る。

ホイホイついて行つて大丈夫かと思ったが、なんだかんだでアミが警戒してたのか、目があつた時軽くウインクをして来た。

やつぱり、中学一年なのに何処か抜け目ないのがアミの怖いところ。

……だから、ウインクされて三影につねられるのは自分が原因じやないはずだ。

「さ、奢りだ」

「あ、ありがとうございます……えつと」

「俺は檜山蓮。この店のマスターだ」

カウンターは人数分は置いてなかつたから、近場のテーブルに対面で座る。

出されたほんのり苦いコーヒーを飲む。

苦すぎず、かと言つて苦くない訳じやない。喉もすんなり通つてしま、匂いがいい。

「君達のLBXを見せてもらえるかな？」

「え、あ、うん…」

一様に机の上へとLBXを並べる。

檜山の目的はアキレスの所在だから、アキレスとMk—2以外はチラ見するだけだつた…………

「……どれもよく整備されてるな

「見ただけでわかるんですか？」

「ああ、パーツは最新。関節も、フレームもちゃんと手入れしてある。特にこいつはな」

手に取つても?と聞いて、バンは頷き檜山はアキレスを手に取つて、身体中を舐め回す様に見つめる。

「アキレスって言うんですね!」

「素晴らしいよ、こいつは。フレームは最新のタイプ、バランスもよく取れてる。いいLBXだよ」

気が済んだのか、そう言つてアキレスをテーブルの上に戻す。次にMk—2を手に取つて、これまた舐め回す様に見つめる。

「……こいつは見ないな。自作したのか?」

劇中、登場回数が少ないこともあって、表情を滅多に変えない檜山が少し驚いて見せた。

「ええ、親父と一緒に作つたんですよ」

少し問題があるけど、自慢の親父だ。

割となんでも直すし、融通も通してくれる。自分の趣味にはどことん目がなくて、一緒になつて夢中になつてくれる。

まあ、結局奇行ならなんやらのせいで相殺される訳なんだけど。

「武装もそうだが、かなり作り込まれてるな。フレームも自作とは思えないほど精巧で、それでいて滑らかなスタイル。デザインもかなりいい味を出してる」

「そこまでいいですか」

「ああ。それに、君と親父さんはかなり物作りが上手いらしい」
善意で言っているのか、皮肉で言っているのかは最中ではないが、かなり複雑な気持ちの様で、檜山の表情が少し硬くなつた。
気も済んだようで、Mk-2^{Mk-2}を手渡ししてくる。

「大切にするんだぞ。こいつも、親父さんも」

「…はい」

少し言葉に重みがあつたのは、気のせいじゃないはずだ。

そんなこんなと雑談をしていると、カウンターの奥から宇崎が例のものを運んでくる。

皆、一様になんのかを確かめるべく、視線を釘付けにする。

「LBX…？」

灰色の塗装に、人狼に似せたのか装飾品の尻尾や脚部や腕部に毛並みや爪の装飾が多く施されたLBX、ハンターだ。

机の上に差し出されたハンターに、カズは視線を釘付けにされた。

「名前はハンター。最新のフレームと安定した姿勢制御で、遠距離攻撃が得意なLBXだ」

箱を開けると、バンダイが出していたハンターのプラモデルとほぼ同一の部品量に、部分分けされたランナーが入っていた。

それを眺めるカズに気がついたのか、宇崎がとある提案をする。
「組み立ててみるか？」

「いいんですか！」

手渡されたニッパとヤスリを手に、カズがハンターの組み立てに入る。

10分近く時間が過ぎた頃には、ランナーはほぼ空になり箱の中にしまい込まれていた。

今までのワイルドフレームとは違う面立ちに、初期からある武器が狙撃銃と言うのも、かなり特徴的だ。

マッドドッグとかオルテガとはかなり違う。デザインも良し、性能は…………まあ、これから分かることとして、あの天才が作ったものだから心配しなくても大丈夫だとは思う。

「実は、君たちに来てもらつたのは、ただLBXを見せる為じゃない」「……どういう事なんですか？」

頃合いかと、檜山が目ね合図していたのか。宇崎がこのに自分達を連れてきた真の目的を話し始める。

「明日、新しい総理大臣の就任記念パレードがあるのは、知っているかな？」

「確か 財前宗介」

「ああ、ニュースで忙しなくやつてたな」

「ああ……あの髪型が特徴的な人？」

「バン……」

世間のニュースはうろ覚えで興味ありません、と隠そうともしないバンの発言に、若干アミが呆れていた。

ただ三影の口から総理の名前が出てくるとは思わなかつた。意外とその手の事に明るいらしい。

「そう。その財前総理の命が狙われている」

「狙われてるって……」

「ああ。明日のパレード中、ある組織が行動に移すという情報を掴んだ」

バンは勿論、突然の事で何が何だか分からぬ、と言つた表情だ。知つてゐるから驚かない、と言う訳にもいかないから、最もらしく驚いて見せる。

しかし、やり口が巧妙だ。

最初から目をつけてた癖に、偶然を装う……にはちょっと台本感が否めないけど、怪しまれない範囲……なのかな?

まあ兎も角、郷田と檜山、がどの程度のやりとりを交わしたかは分からぬけど、ハカイオ一戦の時からここまで段取りを予想して行動してたなら、怖いくらい正確な指示だ。

そして、その段階で遅かれ早かれ身元を割つて、檜山と宇崎を通じて新型のLBXを秘密裏に届ける。

誤算が合つたとすれば、黒の組織がいち早く目をつけていたことくらいで、後はほぼあの博士のシナリオ通りだ。

「俺たちは、財前総理暗殺を阻止したい」

「その為に、君たちの力を貸してほしいんだ」

会つたばかりの大人2人に、国家の命運を左右する事態に、流石のバンも即答という訳にはいかなかつた。

「ふう……」

家に帰つて、自室のベッドにダイブする。

今日は母さんに頼んで干してもらつてたから、布団乾燥機をかけた並みにふかふかしてて、そのまま寝たいし実際寝そうになる。少し前まで、あの喫茶店で明日のことと色々と話していた。

バンは親父の発明品が殺人に使われるのをよしとしない正義感から、アミはバン一人では危険だという仲間思いから、カズは新しいBXとそれを自分のものにしたい、それと同時に無理難題に近い要求にどうすればと言う気持ちに板挟みにされながら。

三影は……あんまり気にしてなかつた。いつもそただけどどこか浮世離れしてるから、最近何なら驚くんだろうと思つたりする。

かと言つて、自分もあまり驚く訳でもなかつたけど。

急な予定が入ると、次の日に起きれるか不安になつて眠れないタイプだから、まだ5時手前だけどこのまま寝ちやつていいかなと、眠気に体を任せて意識を放り出す。

「だらしない」

「痛ツ」

頬をつねられ、伸びてきた腕を辿つて視線を向けると、犯人は何故か部屋にいる三影だつた。

……あれ？ なんで家に三影が居るの？

「なんへみふあへふあ？」

「あなたのお母さんが 通してくれた」

すんなり通したのが母さんだと聞いて納得しかねるが、事実ここに三影が居ることが結果として残つていた。

うちの防犯は大丈夫かと一瞬心配になつた。

眠気も無くなりすっかり覚めたけど、ベッドから動くことはしない。今くらいだらしなくたつていいじゃないかと思つたからだ。

「で、三影はどうしてうちに来たの？」

「単純に 暇」

そう言つて自分がいつも使つている作業台の、親父が言うに割といい椅子に腰掛ける。

なにやら工具やMk—Iを見たり、手に取つたりし始めたが、三影だし大事にはならないだろう。

そう思つて、三影を尻目に起こした体をまたベットに横になり、天井を見つめる。

「悟はさ。今回のこと どう思つてる?」

「んう……と、言うと?」

「今日のこと」

喫茶店で打ち明けられた事実。

国のトップが暗殺されかねない事態、警視庁長官以外の現職の要人が狙撃されるのは半世紀振り、ケネディ大統領暗殺以来の一世紀振りの不名誉な事件が世間のお茶の間に流れることになる。

しかもパレードだ。昔ならただ記者会見して、今後の政府方針を述べて終わりだつたけど。財前つて人、相当優秀な人物なんだろか。

総理大臣に任命されただけでパレードなんて、ただものじやないんだろう。

これで暗殺が成功したら、他の組織がやつただの、内閣の中に不満がいるだの、犯人の背後関係が物理的に消されてるとか、警視庁にも犯人がいるとか、今思い立つた事の大半が本当の事だから、余計笑えないんだけど。

「ああ……正直、どうもしないかな。三影はどう思つてる?」

どつちかと言うと、自分よりカズの方が重責背負つてるから、緊張は半端ないはず。

その意味でも自分は気楽な方だ。

ミスは出来ればしたくないけど、しても大丈夫な範囲は広い。ミスした時のことを考えたつて氣分が落ち着かなくなるだけだつて親父も言つてた。

「不安 不満 憂鬱」

三影の口から、今の心境を短くまとめた単語が出てくる。

「……まあ、うん。原因は分かるけど、一応聞くよ」

「あの2人 胡散臭い」

交友が少なかつたのもあつたが、基本第三者の事で不満を漏らすことはない三影が、ついに不満を漏らした。

小学生の時は、自分と三影でやりとりが完結していた為に殆どそういう話は聞かなかつただけに、あの2人は人にストレスを与える事だけは優れているらしい。

「隠してる。それで 私たちを利用してる」

「怪しいと思うのは?」

「オールバック」

即答だよ。

「……檜山さんは?」

「分からぬ。でも 何か隠してる。アミも 疑ってる」

描写がなかつただけで、この時点ではアミからは疑われてたらしい。散々な評価。これが大人かあ……

「……まあ、何とかなるよ。うん」

「悟 何も思わないの?」

「あなたも喋りなさい」という目で問い合わせてくる。

「懸念があるなら、終わつてからこつちをどうするか。こんな大事に巻き込んでおいて、日雇いみたいに放り出すはずないし……」

山野淳一郎のお墨付き。その上息子でもあるバンを放つておく訳でもなく、ズルズルと引きずられ結果的に最終回に至る。

このまま決まつた道だけを進んでくればありがたい。無駄な心配もせず、ただその時を待つだけだから尚更気が楽になる。

「……不思議だよね。悟」

「そうかな? 三影達が重く見過ぎただと思うよ」

氣負いしすぎて成功するなら、世の中に失敗なんて言葉はないしもつと多くの人間が成功してる。

大事なのは平常心、不安と苛立ちは心身共に悪影響しか与えないし、判断力を鈍らせる。でも失敗しないよう常に臆病でいなきやならない。

以上のような難しい事を理不尽に要求されるのが、社会人なんだ。

「ていうか三影。帰らなくて大丈夫?」

セラピームたいな事をしてゐうちに、時計の針は進んで5時半を差そうとしている。

中学生とは言え、年齢的にも未だに親の庇護下だから、三影の家は知らないが家が家なら所構わず電話越しで怒鳴り散らしていく。

「大丈夫。今日 泊まるから」

「泊まる?」

三影の言葉に少し引っ掛かる。

最初に出たのは女子内でアミの家。

でも帰るにしたつてウチからは遠いし、それに帰りがけにわざわざ泊まりに行くかな?

次点でバン達4人でお泊まり会。
カズもアミもバンも、それぞれ明日に向けて色々頑張つてるので論外。

最後に祖父母の家。

うちの近くに有るとは聞いた事もないし、それなら家の周辺でもつと頻繁に会つてる。
（うち）？

流石に母親が許さないから無理な筈。
「まあ、気をつけてね」

「？ 泊まるのは（うち）」

そう言つて三影が部屋の床を指差す。

「……え、ウチ？」

「うん」

「親の許可は？」

「してくれた」

「うちの母親は!?」

「いつも仲良くしてた娘ねつて」

「それだけ?!」

「うん」

ええ……

@-----@-----@

女の子つていい匂いするよね。

変態じやないよ、やましい事なんてないし、自分の良心と親が許さないんだからね。

何食わぬ顔で食卓に並ぶし、母さんはまだしも親父は何も言わないし、当たり前のように自分のベッドに入つてくるしで中々危険な夜だった。

距離感がもはや兄弟姉妹と変わらないくらい近い。

お陰で眠れないし寝違えるしで溜まったもんじやない。

異性には耐性があつた、あつたけど適正距離つてもんがあるでしょうよ。あれは無理、近すぎる。否応に意識せざるを得ない。彼女がいなかつた身としては刺激が強すぎる。

「ふあ～…あつ……」

「大丈夫か悟？」

「うん…まあ、眠いけど」

同じ遅刻組として、途中で合流したカズが心配してくれるが、気の入らない返事して出せない。

上げられない左肩と派手に立つた寝癖、隈はできてないものの、気を抜いたらそのまま瞑つてしまいそなくらい瞼が重く、眠気も晴れない。

湿布を貼つたからマシになると思うけど、正直立つてるだけでも辛いから座つて いたいのが本音。

「これ」

「……ありがと」

三影が渡してくれた缶コーヒーを一気に飲み込む。

慣れる筈だけど、やっぱり無糖は苦い。苦いけどそれのお陰で瞼の重りが外れて、眠気も治まってくれた。空き缶をゴミ箱に放り込んで、できる限り寝癖も直す。

集合場所は最寄り駅の直ぐ近場、パレードが行われる街道の脇道、そこから入れるビルの裏通路だ。連絡はないけどバンもアミもあるそこで待ってる筈。

「……よし。急ぐか」

「ああ、待たせると悪いしな」

「アミに くどくど言われる」

車列が来るまでまだ時間があるが、芽を摘むなら早い方がいいし、悪性の物なら尚更だ。

ただし怪我はしないように、出来るだけ気をつけたい。無人機のおもちゃとはいえ撃つて当たれば大怪我レベルの傷を合わせることが出来る。強化ダンボールが世に出回るまで発売禁止にされるだけあるだけに、当たった時のことを考えると恐怖でしかない。

痛いけど、当たらなければどうつて事はない。

気楽に行こう。うまくいかない時に世の中を甘く見過ぎたって、バチなんて当たらない。

人混みを搔き分けて進むこと10分程度、パレードの進路上から外れた脇道に入ると、先に到着していたバンとアミと合流する。

近くに宇崎がいないとなると、基準はゲーム版か。それなら近場のビルに複数のアサシンが居るくらいで、そこまで捜索範囲は広くないはず。

「で、大凡検討がついてるつてこと?」

「うん。宇崎さんがこれを」

アミがCCMを見せると、地図に示された大まかな印がいくつかあり、その中で青のレ点が振られた建物が二つ存在していた。

「これは?」

「狙撃ポイントよ。この大通りだけでも数十箇所あるわ」

「こんなにか!」

カズがたじろぐ。

気持ちもわかる。だつてテスト当日に課題範囲を教えられて絶望するようなものだ。これで失敗したら、事前に情報開示しない宇崎が悪い。

「ええ、でもこの殆どは警察が事前に立ち入り調査をしてたらしいの」総理大臣や元総理に限らず、権力者や影響力を持った人間が演説をするに当たっては。事前に現地警察や警視庁のSPの調査が必ず入る。

ビル一軒、空き家一軒も見逃さず、怪しい場所には必ず警察の目が入るか、目星をつけられ付近に監視をつけるなどがある。

「で、これが何かしら理由をつけて調査されなかつた、或いは見逃された建物よ」

赤印が消え、残つた青いレ点の建物が残る。

方や神谷重工が所有する営業所、方やパレード直前に内部の改装工事が入つた、所有者不明の事務所。怪しいといえば怪しいが、一般人

が気にするほどの事ではないのは確かだ。

「この一つよ。他にも高層ビルはあるけど、殆ど警察か警備員が配置されてるから、まず間違い無いわ」

「で、一手に分かれるつて事か」

人数が足りてるから選択肢が増えたのか、アニメでもゲームでも取れない選択をする事になつた。

ただ、どつちに凹が居るかと言われば、間違いなくカズが行く方に居るはず。ましてや、今回の敵はプログラムじや無くて生身の人間だ。

バン達に協力することが知られてるなら、向こうも何らかの対策はしてくるはず。バンもだがカズがやられる可能性は極力減らしたい。

「じゃあ、カズと一緒に事務所に行くよ」

「俺はアミ達と一緒に神谷の方に行つてみるよ」

これでどつちにいても一気に片付ける事ができる。これならまず問題はないはず、それでも問題があるならその時はその時だ。頭でもかいて誤魔化す。

「気を付けて?」

「うん。三影もね」

歩道橋を目指して走るバン達が群衆に帰るのを確認して、カズと一緒に路地の奥へと進んでいく。

程なくしてカズと一緒に改裝中の事務所へと侵入する。

@

@

@

道中、警備メタモが数体居たけど、誰かに破壊された後でバチバチとショート音を鳴らすだけだつた。

裏口らしい鍵も無理やり破壊され、まるで入つて来てくださいと言わんばかりに開いていた。

中は中で荒れていた。デクターの破片や弾痕に、外より外見がゴツめのメタモが幾つも煙を蒸していた。

元がメタモとは言え、外の警備用のものより格段に性能が良いタイプだ。移動速度も暴徒への対処能力は人間の警官と遜色ない。最近は要人警護の人員補填や、手が回らない区域で使われたりしていて、防弾性能や対鈍器、刃物、投擲物への耐性向上で従来品より性能が上がっている。

それをどうやつたらこうなるのか。カンピピストルでも撃たれたのかな。

「……なあ悟。これつて…」

「こつちが当たりだつたりする?」

自分が選んだ時に限つて嫌な事が重なるつてのはあると思うけど、ここまで酷いとは思わなんだ。

自分達以外の第三者による介入なのか、もしくはただの愉快犯なのか、あるいはこつちを油断させるためのものなのか。

兎に角進まないことには始まらない。絶対何かいるけど、止まつてなにか起こる訳じやないし、まず時間が少ないから進まなきやいけない。

「3階? 3階に何かあるのか?」

階段手前の見取り図に、態どらしく付けられた印があつた。

3階奥。資料室になつてている部屋にバツと、示されていていかにもと言う感じである。

「アサシンがいる場所か?」

「いや、これ絶対こう言う風にした犯人でしょ」

「……あれだろ、示威行為つて奴だろ?」

相当自信があるらしい。と言うか、ここに来るまででその実力を見せつけられたけど。

L BX だろうが武器だろうが、間違いなくこつちを殺せるくらいには腕が立つ。

行くしかないよなあ……

「…行くか」

「うん、何かあつたら逃げよう」

相変わらずそこら中に戦闘の爪痕が残る中を駆け上がり、3階まで足を進める。

階段から出て不気味に思つた。1階と2階と違い、3階だけは綺麗な空間で、以上は見当たらなかつた。

もう一々気にしていられない、3階最奥の資料室に駆け込む。ドアノブに手をかけ、鍵がかかってない為そのまま強引に扉を押し開ける。ただ、そこにはアサシンも何もいない。ただの資料室だつた。

荒らされた痕跡もなく、窓も空いてない。部屋の中央に空間があるごくごく普通の、ただの資料室だつた。

「こつちが囮?」

「……いや、そうでもないかも」

背中に違和感を感じて、振り返れば扉の場所に深いフードジャケットを被る人物が立つていた。

背丈は三影と同じくらい、性別は服装と顔が見えないから解らないが、かなり着痩せすると考えれば多分女だ。

……いや、でもイノベイターに女キャラなんていたつけ?

心当たりがあるのは海道ジンの外伝コミックなんかだったし、本編だとまだ居ないはず。

え? ジヤ目の前の誰? ダンボール戦機つてサイレンみたいなホラーものだつたつけ?

「あんた、誰だ?」

「……余分なのもいるけど、まあいいや」

アミや三影と違い、ハツキリと透き通る声色がカズの問いを無視するかのように発言し、ジャケットの懷からL BXを出す。

ただしDキューブは無し、ルール無用でこつちを口封じしたいらし

い。

出して来たのはジャッジ、勘違いでなければ灰原ユウヤの専用機だ。

「え、ジャッジ!?

「へえ、これのこと知ってるんだ!」

反射的にMk-IIをジャッジの進路上に展開し、遅れ馳せながら力ズのハンターも出てくる。

対面の女は何処か嬉しそうだけど、なんで今の時点でジャッジが出てくる訳? 万が一灰原ユウヤと同等の実力者なら、間違いなく負ける。

「なあ、悟……」

「だよなあ、やるしかないよなあ……」

「だよね? だよね!? 早く始めようよ!」

戦端を開いたのはヤベー女、何も考えずに真正面から突入してくる。

カズは適正距離まで一旦離れるから、自分が壁汎としてハンターをジャッジのヘイト共々から守らねばならない。

「カズ、抑えるから頼む!」

「任された!」

初撃を受け流してカズが撃つ。当たるとは思わないがそれで十分、回避したらこっちがビームサーベルで切り掛かる。

しかし想定済みか、相手も切り掛けた^{カチ}で相殺される。直ぐにバルカンを乱射して離れビームライフルを直撃させる。

命中と言いたいけど、ジャッジソードで防がれた。

Dキューブ内では出力制限が掛かるから、破壊されないし武器の破壊もない。

ただここはキューブ外、制限値は弄つてなければほぼ100%。サーベルは防がれたが、こいつならLBXやそれらの武具程度の強度なら一撃で破壊できる。

「やるじゃん!」

しかしそれで怯む相手ではなかつた。

もう要らないと言わんばかりに投げつける。

「流石に豪快すぎでしょ！」

拳でくると思つたけど、そのままシールドで殴りつけてくる。元が格闘よりの機体と言うのもあつて、なかなかに一撃一撃が重い。

「悟！離れてろ！」

「アタックファンクション」

ステインガーミサイル

緊急回避でジャッジと距離を取り、ビームライフルで足止め。直後に面制圧が凄まじいハンターのステインガーミサイルが着弾し、粉塵を舞い上げる。

「やつたか!?」

煙からシールドが勢いよく飛び出して、そのままハンターに向かっていく。

流石に間に合わない、ただ、諦めきれない性分が功を奏して、ダメ元でライフルを向ける。

そうしたら、瞬時に偏差位置に照準が持つていかれ、反射的にボタンを押す。ビームは吸い寄せられるようにシールドに当たつて、ハンターから逸れて、空を切つてジャッジの元へ返つていく。

あ、射撃補正エイム補正つてそう言うね。

「助かつたぜ悟！」

親父は酸素が足りてたらしい。

これはいい、ギャンの格闘補助システムみたいな容量で十分にやり合える。

「もつと遊びたいけど……まあ、今日はここまで！」

一瞬考え、ジャッジを自分の手元に戻してここを去ろうとする。

「またね『悟』くん！」

「え？ ちよつとまつ!?」

扉を蹴破つて出ていけば、階段を飛び降りた。追いかけるも後の祭りで足音もなくなり一瞬で居なくなってしまった。

しかし妙な事になつた。なんで向こうは自分の名前を？ 会つた事もない女子に、名前も顔を晒した覚えはないが何処かで知り合つていたか？

でも小学校は三影以外といった記憶が……いや、こうなつた、それ以前のかも知れない。

……え、でも誰？

突拍子な事態に、暫く呆然としていた。

「……」

授業が終わって放課後。

今日は珍しくぼーっとしていたい気分だつた。と言うのも、なんの脈絡もなく出てきた灰原ユウヤのジャッジ。

それに、この体の主に面識があるらしいジャッジを扱う女。頭の中はその事ばかりだつた。

記憶は出てきて小学生、それも何年生か解らない虫食いの記憶で、ふとした日常や思い出の類は全く出てこない。

いつからこの街にいるのか、そもそも自分は何処の生まれなのか。親以外の身内も知らないし、そもそもいるのかも解らない。

謎が謎を呼ぶとはまさにこの事。でも今はミステリー小説みたいな謎じやなくて、答えが欲しいんだ。

三影との関係も解らないが事が多いのに、追加であの女との関係も考えなきや行けない。頭が痛いよ本当に。

アルバムでも漁つて手掛かりでも手に入ればいいなあ……

「悟？」

でもないよなあ。

多分PCかスマホとかのフォルダ内に一括だろうし、親父とは言え勝手にPC覗いて、変なの出できたらそれはそれで顔合わせ辛くなるし。

母さんだったら見せてくれるかな？

ああ、でも写真の管理とかは杜撰だつたから、多分私生活のも出てきちゃうから見せてもらえないか。

自分の奴は……まあ、記憶が正しければ小5の誕生日にプレゼントしてもらった奴だ。どんなに遡つても2年前のやつしか出てこない。

同年代に聞いたところで知ってる人間の方が少ないだろう。なんならこの時期つて色んなことすぐ忘れるから、聞いたところで感はある

る。

「悟…？」

灰原ユウヤは別に存在してて、アレは外伝とか漫画の方のキャラだつたりしないかな？

アニメとそれを基準にしたゲームが知識の源である身からしたらかなり困るけど。特に今後の展開で左右される様な人間がいるなら尚更。

ただジャッジを扱うレベルにはイノベーター内では重要視されているはず。なら組織内の軋轢からくる抗争とか？

海道義光で纏まつてはいるけど、方向性の違いと利害バッティングしてるせいで居ないところでかなりギクシャクしてる様は正にザビ家そのもの。

こんな最序盤から争うとなると、エジプトの件が引き摺られてるんだろう。白は確実として相手は青か、それとも黒か。

黒以外は勝つても敵になるだけだから、面倒になる事には間違いない。

「ふんっ」

「イダッ?!?」

いきなり顔に激痛が走ったと思つたら、頬を思いつ切りつねられて拳句引つ張られる。

誰かと見れば、見慣れた服装と少し不機嫌そうにこつちを見る三影が居た。

「私、呼んでた」

これはいつにもなく怒つてている。

声を上げる訳でもなく、手を上げる訳でもなく静かに一言。

「…うん。ごめん」

「…ん、私も ごめん」

謝罪を受け入れて貰えたらしく、頬から三影の手が離れる。

かなり強く抓られたせいで痛むけど、気付かなかつた自分のせいだからね。仕方のないことだ。

「それで、どうしたの？」

「バン達が呼んでる」

そう言つて廊下を指差すと、扉の隅からこつちに手を振るバンの姿が目に入る。

「いつも通り教室？」

「ん 向こうで待ってる」

「分かつた。すぐ行く」

付けっぱなしだった端末の電源を落として、荷物をまとめてバン達の教室に向かう。

放課後でいつもより広くなつていた教室に、一同がアミの机に集まつていた。

「で、どうしたの？」

「悟、エンジエルスターって知つてる？」

珍しく眼鏡を掛けたアミに問われた。

昨日の今日でもう潜入まで行くのかと口に出そうだつたのをなんとか心の内に留めておく。

エンジエルスターがどんな所で裏でなにをしているのか、山野淳一郎は既にそこには居ないと言うことも含めて知つていいけど、まあ直接は言えないよね。

物語に関わる以前に、それが原因で危険イベントが増えるのは困る。

もう変わつてるつて？ ……氣のせいでしょ。

「ああ、うん。一応」

「本当か!？」

「それで？」

「ちょっと端末借りるよ」

昔はタイピングは苦手だつたけど、今じゃもう慣れてスラスラ打ち込む事ができる。

複数の検索を挟んで目当てのサイトに辿り着く。

神谷重工のホームページ、その中にあるロボットアーム専門の施設。ページを開いて出てきたのは、ミソラ町から遠くもない場所に存在する工廠が紹介されている。

「エンジエルスターって、神谷重工の施設名だつたのね」

「うん。学校の拡張工事でこここの建機が搬入されるつてリュウが話してたんだ。エンジエルスターのロボットアーム建機が云々って」

「……飽きないの？」

アミのさりげないリュウへのデイスリーに哀れみを感じたが、正直自分も個人的には重機はあまり興味はない。殆ど専門外だ。

辛くはないけど、リュウが勝手にどんどん喋つていつて、酷い時はこっちの呼びかけにも応じなくなるから、あとはこっちに気づかないリュウを置いて立ち去るだけ。

扱い的にはメタモと変わらないのが哀愁を感じさせる。

「まあ、途中でこっち放置だし」

「アレ、良くなないわよねえ」

「俺もちよつとなくなつて思う」

「まあ……しようがないよな」

「……ああ言う所 嫌い」

アミは当然として、バンが苦笑いで擁護せずカズは最早普通と受け止め、三影はもう隠す気もないくらいドストレーントだつた。

あの三影にここまで言わせるつて何したんだよつて思うけど、本題はリュウじやなくてエンジエルスター。このままじやいつまで経つても話が進まない。

「まあリュウに関しては一旦置いて、結局エンジエルスターがどうしたの？」

「そこにバンの親父さんが捕まつてるらしいんだ」

「コレを見て」

CCMを学校の端末に繋いで映像を流す。

換気扇か何処かからか撮影されていたのは檜山と宇崎の2人で話しこんでいる。

集音装置が働き始め、微かに聞こえていた2人の声は徐々の大きく聞こえるようになる。

「これは？」

「悟と三影は先に帰つたちやつたからの知らないかもだけど、この少

し前にバンがお父さんの話をしたの。その時、宇崎さんがあからさまにはぐらかすから……」「

「クノイチを使って盗聴したと？」

「そう！」

犯罪ですねえ。

と言うかクノイチってサイバーランス社だつたつけ？　あの会社なんであんなに犯罪に使えそうな機能ばっかり搭載したLBX発売できてるんだろう。

マットドッグに使つてゐる光学迷彩の技術もどこから手に入れたのやら。ミラージュコロイドがアクティブ・カモでも搭載してゐるのかな？

「で、場所は解つたけどこれからどうするの？」

「行つてみる」

「右に同じ」

「勿論行くでしょ？」

「悟が行くなら 行くよ」

バン一同は準備万端。

となると、あとは自分次第か。

……まあ、その前にみんなで言うのはズルくない？とは思うけどね。こんなのもう（行くしか）ないじやん。

「よし、じゃあ行こう」

「ここがエンジエルスター……」

普段はトラックが往来する搬入口の門は警備員と門によつて完全に閉ざされている。

警備は至つて普通。検問所もあるが警備員の数も多いとは言えなし、ただ制服を羽織つてゐる以外に何かを所持してゐるわけでもない。

監視カメラも一概に多いとは言えず、あくまでも警備員の視覚を補うレベルの配置だった。

「で、どうすんだよ。正門から行くつて訳にはいかないだろ?」

カズの話は最もだ。

ただ裏口と言つても従業員用の正門は見当たらぬし、エンジエルスターは広い。丁寧を探していたらあつという間に日没になつてしまふ。

ただ考へてるだけじや何事も進まない。こんな時は兎に角手探りで動けば何かしら見つかる……筈。

「兎に角探ししよう。何処かに別の入り口があるはずよ」

アミの言葉をはじめに取り敢えず裏口探しへバン一行、自分と三影の二手に分かれる。

近場に従業員の団地があるとは言え、中学生が興味を引くような物があるはずが無い工場近辺。そこを子供がうろつくというのは中々人目を引く。

ただ不審だからと警察に電話する人間は少ないだろう。これが大人数人だつたら話は別だつたけど。

「見つかる?」

「非常用の避難経路くらいはあるんじやないかな。学校にだつて備え付けられてるんだし」

裏の顔があるとは言え神谷重工として操業している以上、従業員の安全や施設の保守管理は国が見てゐる筈だから、避難用出口くらいは

ある筈だ。

壇とたまにあるフェンスを辿りながら歩くが、そうそう裏口は見つからない。

しばらく進めばただフェンスで仕切られているだけの区画にあたって、裏口どころかほぼ施設から離れた場所に来てしまっていた。

「こつちには無さそうだね」

「引き返して バン達と合流しよ」

「うん……うん?」

流石にないかと引き返そうとした時にCCMに着信が入る。

着信ランを開けば、避難用通路を見つけたとアミからメールで送られていた。

探す手間が省けたと言いたいけど、割と苦労した身としては分かれなきやよかつたと言う考えがよぎってしまう。

「見つかった?」

「らしい。急ごう」

CCMを鞄に放り込んで走り出す。

中学生になりたての子供だ。体力は有り余っているしだ走るくらいなら息も上がらない。

ただ走っている最中。少し疑問に思つてしまつた事がある。

アミに連絡先つて教えてたつけ?

「それで、博士とはもう会つたのかね?」

エンジエルスターの中央に位置する中央管理棟、その上層に位置する来賓兼会長室で会話は行われていた。

一方は神谷重工の会長である神谷篠五郎。もう一方はイノベー

ターの一組織であり黒の部隊の元締めである八神英二。

普段の活動から両者が顔を揃えるのは珍しい事で、その理由は山野淳一郎の説得である。普通の科学者なら脅しても問題ないが、山野淳一郎はそうではなかつた。

「いえ、これからです」

「八神くんだから心配はないと思うが、くれぐれも貞松くんみたいな事はしないでくれたまえよ?」

「はい、承知しております」

黒の部隊の他には3つの部隊がある。そのうちの赤の部隊を率いているのが“貞松 四郎”である。

イノベーターの中で、言つてしまえば正規軍の様な役割であるが、彼の性格は1世紀前の軍人の様な高圧的な態度と性格である。

軍人としては他の部隊長や八神も認めるほど優秀ではあるが、反面政や人事、科学者への尋問などの事柄は壊滅的な才能であり、海道義光を持つてして自分の職務を全うせよと言わしめるレベルである。神谷重工をアナハイムとするなら、彼は差し詰めイノベーターのバスク・オムだろう（暴言）

「本当に困つたものだよ。海道先生の部下とは言え、君みたいにキチツと礼節をわきまえてほしいものだ」

「彼については先生自ら対処を行いました故、問題ないかと」「そう願つてますよ」

椅子に深く腰を下ろして一旦彼の愚痴は治る。

山野淳一郎が特別扱いではないが、かと言つて待遇がいいわけではない。必要以上のものを与えると、気が付けば扉を破壊する程度の爆薬やハッキングツールを作成される為に、下手に優遇するわけにはいかなかつた。

下手すれば彼の部下より扱いは下だ。

具体的には部下達は最低限とは言え、ほぼ不自由ない虜囚生活を送れる環境に居るが彼は監視カメラで24時間監視は当たり前。

何かにつけて制限しないと何処からともなく物を鍊成する為、その都度独居房を家宅捜索するなどプライベートは無いに等しい。

差別している訳ではないが、そんな状況の彼に高圧的な軍人が手を出せば余計面倒な事になるのは目に見えていた。

現に、こうした行いが海道義光にとつて目障りな存在となり、釘を打たれる結果になったが。

「ところで、『探し物』は如何ですか？」

「持ち主は判明しております。ただ……」

その後に続く言葉を発しようとした時、神谷藤五郎の端末に急報が入る。

「どうしたのかね？」

『申し訳ありません、神谷会長。エンジエルスター内に侵入者です』

「何？」

普通ではあり得ない事態だ。

八神の頭に浮かんだのは、最近になつて存在が明らかになつたイノベーターと相対するある組織だった。

『監視カメラの映像を送信します』

映し出された映像には、八神には報告書や部下が持ち帰つた資料映像で見慣れた顔が映つていた。

山野バンとその友人達、そして彼らが扱うLBX達である。

「我々は侵入者の対処に向かいます」

「いや、君には山野博士の護衛についてもらいたい」

立ち上がる八神を止める。

エンジエルスターがイノベーターの秘密工廠であり、創設以来から警備は秘密裏に強化され続けていた。

警備能力は高い方だと藤五郎も自負している。

しかし慢心ではない。対策すべき所は対策してあるし、警備LBXは常に装備的には最新のものに更新されている。

今回は地上の工場までは手が届かない、そう言つた部分を突かれたりで発生した事態であり、そこまで焦る必要を藤五郎は感じなかつた。

「良いのですか？」

「どうせ下層には入つてこれませんよ。先ずは博士の移送が先です」

侵入者の監視ができていて、彼らの行先はこちら側がいくらでも指定できるのだ。

山野淳一郎の居場所さえ相手に悟られなければ、いくらでも巻き返しができる。

「当初の移送計画通り、彼を官邸に運んでください」「解りました。では、失礼します」

そう言つて八神は来賓室を後にする。

残つた藤五郎は社内回線を開いて侵入者を確認する。

「管理室、映像を回せ」

ダクト内に配置していた警備LBX^{インビット}の残した映像。

破壊こそされたが、侵入者の姿をしつかり捉えていた。

クノイチ、アマゾネスと総理暗殺の際確認された新型LBX、そしてアキレス。

イノベーター。いや、海道義光が一番欲しているものが詰め込まれたギリシャの英雄の名を冠したLBX。

しかし、藤五郎はここで気付く。

アキレスの影に、別のLBXがある事を。

疑問に思つた彼は映像を再生する。

「これは……」

黒を基調としながらも独特の配色と形状、他のLBXとは何か違うツインアイとフェイス。

何より今までのLBXと違い全体が細く、背中に推進器を背負う独特の設計であり、型式では最新である自社のLBX以上の機動性を発揮していた。

スピードもさることながら、足底部に取り付けてある推進装置によつて急な方向転換を可能にし、かつ細身な機体である為こちらの攻撃はまるで当たらぬ。

極め付けはその火力。

秘密裏に開発していたレーザーやエネルギー武器。それらとは一線を画す程のものであつた。

一瞬、銃口が光つたと思えば映像が途絶え砂嵐が画面を埋め尽く

す。

被弾面積を減らし大型のシールドを装備し、背負式の推進装置によつて生み出される機動力と運動性能。何処から供給しているか解らず、重装甲を無に等しい価値にした攻撃力。

潜在的な脅威度は、アキレス以上なのだと言う事は藤五郎にも理解できた。

備え付けの通信機器を取り出し、自社の部署に連絡を入れる。

「私です……あのLBXを解析してほしいのですが……ええ、そうそう、あの黒いのです……ええ……映像は送つてあるはずです……そうですね、当面は「角割れ」とでも呼んでおきましょう……ええ、期待しています」

やる事はやつたと椅子から腰を上げ、八神に続いて来賓室を後にする。

エンジエルスターに侵入してからと言うもの。そこらかしこから覗かれてる気がして嫌な気分になる。

実際覗かれてるし仕方ないけど、人数が多いせいかバレるのも早かつた気がする。

地下3階へ降りて、地上と同様の手口でダクト内にLBXを進ませたけど、そこで妨害を一切受けなかつた。

多分だが、インビットと戦闘した時点で勘付かれて、先手を打たれた可能性がある。

先が解つても相手の意図が分かるわけじやないから、この対応はリュウの件といい不安材料だ。

ただ、ここまできて罠の一つで帰るわけにはいかない。どうせ帰り道で警備隊に捕まつて監禁コースか、バンだけ別の場所に連れてかれるだろう。

取り敢えず後退は不可能な為、そのまま制御室のダクト口まで進軍し、そこから室内を観察する。

「誰かいる？」

室内には既に霧島 平次と神谷 藤五郎。そして八神英二の代わりに3人の護衛が待機していた。

既に会話を始めているが、LBXの集音機能は所詮ホビーだから良くなは無い為、途切れ途切れの単語しか聞こえてこない。

戦闘距離が精々で数メートルだ。その範囲で音が拾えれば問題はない。例外的な企業製品もあるけど。

「何を話してるんだ？」

「任せて」

アミがクノイチの集音機能のモードを指向性に変更し録音を行う。ブツ切れたつた音が拾われ始め、聞き取れるレベルの会話が流れてくれる。

『……失礼、八神くんかね』

『…そうだ。山野博士はまだ最深部に?』

『…ええ、それで構いません。彼は我々にとつて貴重な人物だ』

「父さんがここに…!?」

スマホ越しに話している八神との会話。嘘は混ざってないが真実ではないらしい。

やつぱりこつちの探し物がバレてる。

前からどつかに移される計画自体があつて、今日のイレギュラーがトリガーになつたらしい。

「ここが最深部じやない?」

「多分 表向き」

「さつきのとは別のエレベーターが何処かにあるんだ」

「おい、あいつら出ていくぞ」

殆どがCCMから視線を逸らしている間に、神谷一向は何処かへと消えてしまつっていた。

「今のはうちだ!」

ダクト口から飛び出し、扉の制御コンソールを操作して管理室への扉を開く。

誰もいないうちに廊下を走り抜けて管理室へと駆け込んで、自分のLBX達を回収する。

扉を再びロックして、誰も入つてこれない様にしてからコンソール類を操作する。

「工程管理表、入荷台数、故障箇所……違う、これじゃない」

「区画のマップ情報……これからしら?」

数撃てば当たる戦法で一つずつ確認していく中で、この地下工場の階層マップにたどり着く。

1階2階よりも広い地下3階のマップが広がる。

ただし、そこには管理室を含めた製造エリアや工具室なんかの保管所が載つていてるだけだった。

「ない…?」

「じゃあ、あの扉は何だつてんだ?」

自分達が入つた扉とは別の扉が奥へと続いている。

それに気が付いたバンが、カーソルを黒で塗りつぶされた箇所へ動かし2度クリックすると隠された通路が現れる。

最深部というよりは、ここで使ってるイシテウス系の重機の動作確認で立ち入る施設で、それ以外は一般公開しても平気な部分だろう。確認する時間も惜しみそのまま奥の通路へと走りだし、エレベーターがあるフロアへと抜ける。

「行こう！」

エレベーターを起動させ、地下3階よりも更に下の階へと降つていく。

明るかつた上層とは違い、薄暗く赤い非常ランプが付いているだけの不気味な空間にたどり着く。

おそらく各種重機の試験場だろう。床に何かが擦つた跡があるし天井も異様に高く通路も広い。

そして大きな入り口の殆どがシャッターで閉じられている中、ひとつだけ子供ならしやがめば通れる高さでシャッターが半開きになっていた。

……まあ罠だよね。ここで引き返す選択肢はハナつかないから、入つていくけど。

シャッターをくぐれば、最近では珍しくもない模範的な地下倉庫が広がっていた。中途半端に吊り下がったクレーンに、コンテナを抱えたまま停止したクレーンも残されている。

「ここにバンの親父さんが居るのか？」

「倉庫っぽい……いや、倉庫？」

最新部に辿り着いてみれば、あるのはただの地下倉庫では拍子抜けもいいところだ。

「兎に角、ここを探そう！」

暗がりの中で手がかりを見つけようと、手分けして探索を始めるがそれも必要なくなる。

降り切つていなかつたシャッターが閉まると同時に、このエリアの照明が一気に点灯する。ダイアースさんの言葉を借りるなら「掛けたなアホがー！」だろう。

そしてスタンバイしていた重機が動き出したか、倉庫奥の扉が不穏な音を立てながら壊れ始める。

「何か来る！」

「カズ、それ開きそう？」

「ダメだ！ 上がりもしねえ!!？」

カズが閉じたシャッターをこじ開けようとするが、人間が持ち上げられない重量をカズが持ち上げる訳もなく、袋の鼠になつた。

そうしているうちに扉の破壊が終わつたのか、爆発音と共に破片が散らばつてくる…………え、破片？ 飛んでくるの？

「逃げろ逃げろ！」

三影の手を引いて飛んでくる破片から身を守るために近くのコンテナに隠れる。

破壊音と破片が飛び散る状態がしばらく続く。

音がしなくなつたタイミングでコンテナの影から破片が飛んできた方向を覗く。

騒ぎの元凶はイジテウス。神谷重工が最初期に開発したロボットアーム重機を改良したイジテウス。一種の試作兵器だ。

L BXがいくら危険だろうが、小銃弾対策に施された装甲は破れっこない。紛いなりにも分類上は兵器つて事だ。

「何なんだよあいつ……囁」

無知つて怖いよね。自分の復讐だけに気を取られるとあんな風になるんだから。

「やるしかない……みんな！」

バンのアキレスを先頭にクノイチ、アマゾネス、ハンターが後を追いかける。

え、Mk—IⅡはどうしたつて？

バツテリー切れです（事後報告）

ダクト内で好き勝手に撃ちすぎたのも原因だが、そもそもライフルの出力を下げてなかつたせいでもバツテリーの容量ギリギリだつた。
「…………ごめん。バツテリー切れだから取つ替える」

「こんな時にか!?」

「やるしかないわ。なるべく急いでちょうどい！」

場所を変えて、自分から離れていくバン達を尻目に慣れた手つきで作業を始める。

昔はバッテリーが焼き付いたせいでコアブロック層取つ替えなんでものザラだった。あれに比べれば交換作業なんて一瞬でカタが付く。

「悟」

「何？」

「気を付けてね」

「すぐに行く。そつちも気を付けて」

イジテウスのレーザーに炙られたくない一心で作業を進める。

神谷重工が表向きは重機。パーツやエンジンの保管庫としている地下施設。それとは別で存在する上層のモニタールームから、地下で起こっている戦闘を神谷 藤五郎は監視していた。

「まあ……所詮データ収集の為に製造された試作。プラットホーム。正直期待するだけ無駄でしようが……」

アキレスさえ破壊すれば儲けもの、そう藤五郎は考えていた。

どうせ死蔵品の一つで、いつかはスクランップ行きの機材。

神谷重工としても、イノベーターとしても財布にも心的にダメージはない。

「それにしても、憐れな男だ」

本氣でアスカ工業が再建できると思っている霧島を嘲笑う。

彼がこので働けているのは、ヤグザで言う鉄砲玉の役割を担わせることができるからだった。

タイニーオービット社を絡めればあら不思議。技術も誇りも人間も金で買われた怨みによつて復讐以外のことを考えることがなくなる。

実際に都合のいい人間だった。

「会長」

「おお八神くん。移送は完了したかね」

「はい、滞りなく」

緊急で行われた山野淳一郎の移送の引き継ぎを終わらせただ八神がモニタールームへと入つてくる。

この間にも戦況は変わりつつあり、イジテウスは弱点を突かれたのか圧倒的有利から膠着気味になつていた。

「手こずっているようですね」

「まあ失つても困ることはないですから、好きなだけ暴れさせればいいんですよ」

LBXが相手とは言え、レーザーまで持ち出して戦闘を行う。遮蔽物に隠れればコンテナや瓦礫ごと片つ端から砕いていき確実に追い詰めていく。

腐つても叩き上げで企業を設立させた男。アスカ工業社長と言う経歴も、重機の操縦技術も伊達ではなく本来の用途以外では使われない多目的アームでアキレスを抑え込むことに成功する。

「おお、遂にやつたか！」

遂にアキレスを抑えることができたイジテウスは、そのまま四肢を破壊しようとするが、突然操縦席にスマートクが巻かれ一瞬の隙を作つてしまつた。

その隙を待つていたと、アキレスを抑えていたアームの接合部に角割れの攻撃が命中。そして画面外から白いLBXが機能を停止したアームからアキレスを抱え上げ、少年達の元へと向かつていく。

「アレは…いや、その前に何処から…」

八神は悟る。

イノベーター内に施設に精通した内通者がいること。そしてあのLBXは、自分たちの知らない技術で遠隔操作されている事も。

「……どうやら、余分な入れ知恵を施した様です」

スモークが晴れたイジテウスが、目の前に躍り出た白いLBXへと向かう。

棒立ちのLBXに向かつて掘削ドリルを突き上げるが、それを回避された操縦席にスモークを張られる。

さつきと同様、慣れない出来事に動搖し操作を疎かにした一瞬。頭上のクレーンのアームが緩み、コンテナが車体後部のエンジンを押し潰し、イジテウスは沈黙する。

「駄目でしたか」

「LBXが相手とは言え、よくやつた方ですよ」

「……開発計画がある程度見直す必要がありますね。私は少し”出張”してきますが、後片付けを頼んでもいいですかね？」

「はい。あの地区一帯は閉鎖、必要な機材を運び出し封印作業を行います」

「結構」と言い残し、藤五郎はモニタールームを後にする。

流石は神谷重工の会長なだけはある。例え前代未聞の出来事だろうがただでは転ばないあたり経営者とかでの優秀さが垣間見える。イジテウスを破壊した少年少女を見つつ、あとは自分の仕事だと切り替え八神は行動を始める。

今頃、海道ジンが颯爽と現れ何食わぬ顔で授業を開始している頃だろう。

なんで予測系なのは今の体調の悪さのせいだ。

昨日の今日でどこからもらつて来たのか、それとも慣れないことをしたせいでストレスが出て来たのか。

解らない原因は置いといて、熱、頭痛、倦怠感、果てしなく動きたくないと程には体調はすぐれない。

結局夜遅くまで外にいたのを母親に怒られたが、この有様だから深く追求はされなかつた。そこだけは風邪でも何にでも感謝しておこう。

しかし、今時風邪か。

昔^{生前}は病弱でも無かつたし、風邪なんて滅多に引かなかつた。

どう言う原理で風邪になるのかは知つてゐるけど、それにしたつて症状の個人差がひどい氣がする。

もうインフルエンザの域だ。

食欲は湧かないし、熱で息苦しい。

おまけに頭を動かすと苦痛のレベルで頭痛が引き起こる。

段々、思考もネガティブなりなつてくる。

もしかしたら併発で何か別の病気になつてるんじやないかとか、そもそもこれ風邪じやないんじやないかとか。

不安だけは次々出て来る。

「はあ……」

寝たくても寝れない。

でも起きていたくもない。

こんな時、三影が居てくれたら……

……なんか、もう。三影がいる事が当たり前になつて来てる気がする。

今更だと思う。

思えば小学五年生、そんな時期からお互いの距離感が壊れていて、それをどうとも思つていなかつた。

いや、思わない様にしていた。

そしたら、こつちの感覚が破壊された。

一緒に学校に通つていて、困つた時は頼り合つて、遊ぶ時は必ず一緒だつた。

家に遊びに来ることなんてしょつ中だつた。

そのせいか、母親が三影を認知して今じやほぼ顔バスで通れる様になつた。

今じや母親が手招きするほどだ。

……いや、一人息子の友達だからつてそんなホイホイ家に招いちやダメでしょ。片付けたつてしなきやいけないのに。

三影に見られたくない事だつてあるんだ。

その辺の配慮がうちの親には欠けている気がする。

「…三影」

「呼んだ?」

ん?と思いつつ、扉の方に目をやると雑煮をこなした三影が居た。そしてはと考へた。

今日は平日。学校は時間通り8時45分から。

今は10時を回つた頃、つまりここに三影はいない筈。

ついに幻覚まで見えて來たららしい。

やつぱり何か良くない病氣も併発してゐるかも。

「…氣のせいかな?」

「氣のせいじゃない」

「三影がいる氣がするんだけど…」

「居るよ?」

「なんで居るの!?!?」

「悟が心配だつたから」

嘘じやん…本当に目の前に三影が居る…

中学生つて、家の事情とか、病氣とかが原因以外で学校休むのに結

構なハードルの高さだつたはずなんだけど……

「授業受けなきやマズイでしょ図」

「いいよ。一日くらい」

「一日つて……」

思わず呆けてしまふし、気にせず部屋に入つて作業を続ける三影に動搖を禁じ得ない。

もつと言いたい事はあつたけど、もう頭が痛すぎて自分の為にも口を紡ぐ。

落ち着いて考えた。

結局、三影は自分が寝込んだせいでここに居る様なものだと。

なら、自分がするべきは三影の行動を非難するんじやなくて、感謝して受け入れるべきだ。

「……三影」

「なに？」

「ありがと」

「……気にしないで。ほら、あーん」

鳥の雛みたいに口を開けてスプーンを受け入れる。

味は……まあ、雑煮だから不味いって言う事はない。ほんのり醤油が効いてて卵とニラが入つてる好みの味だった。

腹が膨れたからか、少しまシになつた気がする。食欲はなかつたけど身体が栄養を求めてたらしい。

だから気付くことができた。

「……三影」

「なに？」

「……似合つてるよ」

普段見ないからこそ新鮮だつた。

いつもの様なツインテールじやなくて一本に纏め上げたボニー テールで、それが思つたより長くて、その姿が綺麗だつた。

「……うん、ありがと」

そう言つて三影は微笑んで見せた。

「で？ 三影はなんともないのか？」

「悟の介抱してた それだけ」

翌日、三影と一緒にアミ達とキタジマに集まっていた。母親が三影の家に電話入れてくれたお陰で欠席扱いだつたけど、その分俺が叱られる事になつた。

理不尽とは言わないけど、そう言うのはせめて親父相手にしてほしいとは思う。

身が持たなくなる。

「で？ サトルは平気なの？」

「まあ、ちょっとぼくツとするけど。概ね」

「あんまり無茶しちゃダメよ？」

「そうするよ」

大人しく椅子に座つてもたれ掛かる。

「そう言えば、悟はアングラビシダスには出るの？」

いよいよ本題に入る。

エンジエルスターで得た、山野淳一郎の居場所を知る条件がアングラビシダスと言う非公式大会での優勝。

ただし、タダでは勝たせてもらえない。

海堂義光秘蔵の養子、海道ジンを投入してあわよくばアキレスを破壊、エターナルサイクラーの設計図を得ると言う所までちゃっかりしている。

そして非公式大会は6日後。

バン達は全員参加、バンを優勝させる為に実力者と当たつて潰すのが目的らしい。

「実力が伴つてるなら…」

「三影とやり合えるなら十分だろ？」

それって褒め言葉なのか？それとも煽りか？

カズを訝しんだ。

やり合つたと言うか、練習と言うか。

そもそも一対一で三影に勝つことなんてほぼ無いし……

「……申請とかは？」

「2日前で、今回はアルテミスの出場権だから相当集まるらしい」
ルール無用の大会に、大勢集まるプレイヤー達。

大胆な改造もOK。

戦闘の結果、相手の機体を破壊しても罰則はない。

大会主催は檜山ことレックス。故に性格に難ありな人間も居るが、少なくとも難癖付けて揉め事を起こす様な度胸のある奴は居ないはず。

制約がないなら、その環境でMK-IIの性能を最大限發揮させてみたい。

「分かつた。参加する」

「私も」

「そう来なくっちゃ！」

三影も参加するらしい。

「…で、そのバンつてどうしたの？」

いつもなら3人セットが普通だけど、今日に関してはバンが欠けていた。

アミにもカズにも心当たりがない辺り、どこかで道草を食つてののか、それとも別の訳があるのか。

「ごめん遅れた！」

噂をすればと言うのも当てになるらしい。

バンが急ぎ足で店内に入つて来る。

この分だとただ道草食つてただけみたいだ。

「で、今日もやるのか？」

「ああ！店長にも手伝つて貰つたんだ。大会まで一日だつて無駄に

したくないからさ」

そう言つて鞄からアキレスを取り出しう。

ああ、この分だとあのシグマDX₉^{産業廃棄物}を受け取つてチューンした後みたいだ。

せめて半分の大きさならカタログスペックでも納得できたが、容積は取るし同サイズのモーターの方が低燃費だしでセットした後にすぐ取り外すので有名な奴だ。

売却できるなら金にしたいと思うくらいの性能だ。
酒飲んで設定したんじやないかな？

「で、悟達も大会には出るの？」

「うん。三影と一緒に」

「よろしく」

「ああ！お互い頑張ろうぜ!!」

バンも来ていよいよ本調子と言うわけか、バン達はすぐ様Dキュー^F_A^M_K_Iへ移動してバトルを開始する。

ルール無用の大会だ。

どうせなら機体に積めるだけ詰め込んでみるか。
フルアーマーにするか外部ユニットとセットするか、それが問題だ。

「三影」

「なに？」

「ちょっと手伝つて欲しいんだけど、いい？」

「いいよ。何する？」

まずキタジマ店内で目ぼしいフレーム、装備品を探すところから始める事にした。

「行くよ三影」

「ん」

Dキューブに互いの機体を投入する。

アングラビシダスに向けて3日くらいかけて新しく作った追加武装、その試運転をしてる最中だった。

三影のアマゾネスが近接戦を仕掛けに懐に入つてくる。
バルカンポッドと新しく取り付けた二連装ビームガンを撃ちまくつて進路を制限する。

進路を変えればその先に続けてまた弾幕を形成する。

しかしそれでもアマゾネスは近づいて来る。

遮蔽物を使って射線を切りつつ、有利な位置へと移動している。
そして大胆な行動に出る。

手持ちの武器バルチザンを投げつけて来た。

付属シールドでそれを防いで、ビームサーベルを抜くとアマゾネスはシールド片手に直ぐそこまで迫つて来ていた。

スペイクシールドで殴りつける気だ。

攻撃を跳ね返す為にブースト全開でタックルを吐く。

見事にシールドに当たつて跳ね返したはいいものの、反動を利用して大きく宙返り。

また距離を取られてしまう。

「駄目かあ」

「動作が重いから 動きが読みやすい」

最初は初代FAみたいに全身を覆う設計だつたけど、やつぱり途中で重すぎてバツテリードラスターの消耗が激しいのが足枷になつて装甲をだいぶ削つた。

脚部背面、腕部、バツクパツク、ドラスターの被覆部や胸部の必要ない部分も削つて漸く重装備のブランド並みの足回りになつた。
勿論、装甲は削つたせいで当初より打たれ弱い。

と言つても、ジ・エンペラーミたいな格闘機に殴られない限りは普通に耐えれる性能には仕上げた。

相手が高出力のレーザーでも撃つてこない限りは戦える。

そうじやなくとも、装甲をパージして無傷のノーマルMK-IIに変身。そのまま疲弊した相手を張り倒す算段でいる。

問題があるとすれば、バルカンポッド以外はFAの付属武装なので、状況によつてはGジェネの初代ガンダム宜しくバルカンとサベルだけで戦う羽目になる。

「そんなに違う？」

「うん、MK-IIと比べるなら」

「あ、じゃ大丈夫だ」

三影レベルが不満を漏らすなら、他を相手にしても不足はない。性能を追求するに当たつて、何処まで妥協しておくか。三影の実力が一種の指標みたいになつていて。

「……じゃ。続き」

不満げに続きを始める。

さつきと打つて変わつて、速度と遮蔽を使って攪乱して来る。流石に遠慮なく比較するのはマズかつたらしい。

攻めがかなり積極的になつた。

正面からじやなく常に側面や背面で、時間をかけて遠回りかと思えばすぐ近場から現れて一撃を入れて、通り魔の様に過ぎ去つていく。下手に大振りすると脇に長物が飛んでくるからガードするしかない。かと言つて、このままだと躊躇殺しに合う。

都市マップと言えど開けた場所はある。

一気にスラを噴かして上昇、多少不恰好でもいいから広場へと機体を墜落させる。

これを見逃す三影ではない。

必ず硬直を狙つて仕掛けに来る。

予測は的中。

止めを差しに、自慢の得物を両手持ちしたアマゾネスが突っ込んでくる。

お互の距離は機体一機分。
この瞬間を待っていたんだー！

「かかつたあ!!?」

「ツ▣」

アマゾネスの足元にビームガン撃ち込めば、流石の三影も足を取られるらしい。

同時にスラを噴かして機体を起き上がらせ、そのまま勢いに乗せてアマゾネスに突っ込んでいく。

ビームガンと左腕のミサイルポッドを向けて勝利を確信したその時、ほぼ同時にアマゾネスのパルチザンが胸元に突き付けられる。撃てば終わる。

動けば終わる。向こうもそれは一緒だつた。

「……引き分け」

お互に動けない事を悟つてバトルは終了。

機動力に振り回されっぱなしだつた。

やつぱりノーマルのMK-IIに武装を追加するに留めるか、もしくはいつその事もつと武装とブースター増設してジャズでも鳴らすか。モーターとバッテリーの性能、もつと上がんないかなあ。

「ああ、クソッ!!?」

バトル後の片付けをしていたら、奥の方から聞き慣れた声が響いて来る。

多分郷田だろう。

普段表に出ない人間がなんで商店街まで出向いているのか。

そう思つたが、ここに郷田がいるつて事は仙道ダイキ絡みのイベントで、バンが大会前に初見殺しに合うイベントだつたか。

「…郷田先輩？」

「珍しい。見に行く?」

「ん」

「うわあ……」

思った以上に凄惨な状況になっていた。

両手両足を切り落とされて達磨にされたハカイオーを、ジヨーカーが頭を轟掴みにして吊るしている。

性格から容赦しないって言うのは知つてたが、ここまで来ると獵奇犯の才能があるのかも知れない。

「ん？ なんだお前ら」

仙道がこっちを認識して話しかけて来る。

身なりと仕草のせいで半グレにしか見えない。

絶対職質されてるよ。

「友人の知人の叫び声が聞こえたので、気になつて覗き見しに来ました」

「知人？ 郷田コイツのか？」

不良を纏め上げて番長名乗つてる人間に、普通の人間の知人がいたら意外か。

仙道が興味ありげに見て来る。

「…まあいい。ここは今日から一中の縄張りだ」

「…二言はねえ」

膝を下した郷田が仙道にこうべを垂れる。

おー。「今日から俺は」とかの世界でしか見ない様な事が目の前で起きて、それを間近で見れるとは思わなかつた。

……でも、人間解らぬことだらけだ。

こんなことしてる仙道が、実は妹にはかなり甘いんだからねえ……

「…おい、なんだその目。やめろ」

生暖かい目と言うのは分かりやすいらしい。

「いや、別に？ 一中の番長が妹にぞつこんなんて……」

「おまツ!?」何処でそれを……」

「一中の女子生徒」

「アイツら……！」

どうやら心当たりがあるらしい。

「ツ……何が目的だ……！」

「いや、何処かで絡まれたら嫌なんで釘刺すつて言うか……」

「悟、流石に可哀想」

「仙道：お前……」

「テメエは黙つてろ！」

凄い。

さつきまでシリアルス雾囲気だつたのにたつた一言でギャグ風味が聞いた空間になつた。

「リーダー！」

そこへ郷田四天王に連れられたバン達がゲームセンターへ乱入して来る。

「仙道先輩？」

「……なんだ？」

「御愁傷様」

「お前ら……！」

三影まで便乗し始めた。

可哀想に……

ややこしい事になつた。

アミが挑発して、巻き添え喰らつたバンが仙道にバトルを挑まれて、3体のジヨーカーに翻弄されるまでは良かつた。

魔術師の術中にハマつて、なすが今まで一方的に押し込まれていてまでは良かつた。

そこへエンペラーが乱入して、両者の間を取り持つまでは良かつた。

「海道…ジン？」

目の前にいる幸薄そうな吊り目の『少女』に、青島カズヤが海道ジンといつた事だ。

理解できない。

服装は年頃の女子が着る様なものを一切羽織つていない。カジュアルメンズの革靴とメンズパンツにシャツとジャケットを着こなす別人。

髪を一つに纏め、腰周りまで垂れるポニーtailの長髪。見た目と服装に面影を感じるがそれ以外は別人。

頭が理解を拒んでいる。

今からでも硬いものに打ちつけて正常になりたい。

一体何を見せられてるんだ？

「…大丈夫？」

混乱してフラフラしている自分を三影が支える。

「多分…」

「無理は駄目。ね？」

三影に諭される。

自分の目を見据えている三影の表情は、思った以上に心配げだつた。

そして、その視線はいつも以上に力強かつた。

服を掴む手にギュッと力が入る。

視線の先に立ち塞がつて、ここから遠ざけようとする。

「…分かつた。座つてる」

抵抗する理由もない。

大人しく近くの筐体の椅子にもたれ掛かる。
ここまで来ると一種の拒絶反応か、それとも単なるストレスか、た
だ混乱して錯乱寸前なだけか。

消えない頭痛に頭を抱えて頃垂れないと、三影がそれを覗き込
む。

「…本当に大丈夫？」

「うん。多分、偏頭痛とか…」

「嘘」

キツパリ切り捨てられる。

三影の見る目が変わる。心配という慈悲ではなく、何処か据わつて
いる。

それの意味するところが何なのかは、いかんせん自分には分からな
かった。

「悟、何か隠してるでしょ」

「そんな事は…」

「私に言えない事なの？」

いつもの、少し片言気味じやない。

饒舌で、知りたい答え以外を聞いていない事が低い声のトーンで伝
わってくる。

だが、言えない。

どうする？ 今日の前にいる少女が実は少年の筈だつて言つて、そ
れを信じて欲しいなんて言つたら。

総理暗殺の時も、あの謎の女は居る筈無かつた。
三影と自分は知り合う筈がなかつた。本来の三影は郷田にぞつこ
んで居る筈だつた。小学生の時から親しい筈なかつた。
こんな事言つてみろ。

次の日から住所は精神病棟になる。

「今は…言えない」

自分は本来、いるはずのない人間なんだ。^俺

三影と一緒にいて、隣を歩いているのはおかしい事なんだ。

そう言えたなら、この状況を共有できる人間がいたなら、こんなくだらない事で苦労はしていないのかも知れない。

だから、そう答えるしかなかつた。

「…分かつた。今は『そういう事』にする」

三影はそう言う。

若干の怒りは感じる。だけど、そこにそれ以上の感情は含まれていなかつた。

「話せる時まで 私は待つ」

そう言つてくれた。

耳元で、誰かに聞かれないと。

「分かつた」

小さな声でそう言う。

「…悟、大丈夫？」

こつちに気がついたアミが近づく。

それに釣られてバンや他の面々がこつちに振り向く。

だが、1人だけ反応が違つた奴がいる。

「…悟？」

海道ジンと呼ばれる少女、この名前に聞き覚えがあるらしい。

仙道に向けていた眼差しをこつちに向け、バン達の間を縫つて歩み寄つてくる。

もう少しで手前というところで、三影が遮る様に前に出る。

だが、向こうはお構いなしに話を始める。

「君が悟？」

「…で、君が海道ジン？」

それ以上の会話は発生しなかつた。

お互に目を見つめ合い、静かな時間が流れる。少し経てば向こうで勝手に完結したのか海道は視線を外した。

「…いや、何でもない」

何か言いそだつたのを堪えて、海道はそのままゲーセンを後にする

る

その背中を何も言わずに眺めていた。

アングラビシダス当日。

大会は非公式故に公平なルールはない。

勝った人間に敗者を貶す権利はない。ただし、負ければそれまで。治安も民度も悪い。

ある意味で檜山がトップでいるから成り立っている様な環境だった。

観客席で見知らぬ人間のデスマッチを眺めながら。

どつちも自分が勝つために必死になつてている。普段のバトルでは考えられない事だらけだ。

「……凄い所」

「あそこに立つて試合するつて考えると、ちょっと怖気付くね」

熱心な郷田ファンではない三影がこの場所に入るのは初めてだ。勝つためなら手段は選ばない。

この試合の有様を目の前で見て、改めて実感する。

よく言えば死力を尽くして、悪く言えば意地汚く戦う彼ら彼女らを見る。

みんな勝利に貪欲だ。

罵声を浴びせたり挑発したり、それを見て外野がワイワイと叫ぶ。

相手の機体を完膚なきまでに破壊して、それを楽しむ観客達。人は残酷なものが見たいという言葉があつたが、あながち間違いないらしい。

「なあ、三影」

「なに？」

「この前の約束。覚えてる?」

いつか隠し事なしで、全て喋るという約束。

今日、俺は負ける。

確証はない。だけど優勝する事は叶わない。

その原因が郷田か仙道か、バンか海道か、それとも三影によつてか、そこまでは分からない。確實に優勝からは遠い場所に居る。

結局、才能がある奴に生半可な努力で追いつけるほど夢ぬるい世界じゃない。

それでどうにかなつたら、今頃バンにだつて勝てるよ。

ただ三影は、静かに頷くだけだつた。

「この大会が終わつたら、色々三影に話したい事がある……それでいい？」

誰かに自分のことを打ち明ける。

今まで閉鎖的だった。打ち明けた振りをして、はぐらかして、それが本来の自分の様に振る舞つていた。

他人に共有できないギヤップを抱えて、それを気にしたくないから先の事ばかり見てどうするかを考えて日常を過ごしていた。

それも今日で終わる。

いつも隣に居てくれて、自分を見てくれる人が居る。

親にも離せない事を抱え込まずに、内心をブチまけられる人が居る。

「分かった」

ただし、と付け加える。

「やるなら全力。中途半端は 駄目」

断る理由もなかつた。

決勝の前に準決勝、準決勝の前には準々決勝、準々決勝の前には一
定のプレイヤーを振るいにかける前哨戦がある。

7つあるDキューで一対多形式で6人によるシンプルバトルが
3戦、それを勝ち抜いたプレイヤーの準決勝と決勝戦が控えている。
今回の大会、参加母数が多いせいか一対一形式で行うと日を跨ぎ、
かと言つて参加者分のDキューも確保できなければスペースもない
い為、開催 자체が難しくなつてしまふ。

故にバトロワ形式にして、プレイヤーの実力を大胆に振るいに掛け、少しでも負担を減らそうというのだ。

「ヒヤアツハウアアアアアアア！」

「死ねえ！」

「皆死ねばいい!!?」

「…」

その結果がこのザマだ。

まさか対戦相手が全員こつちに来るのは思わなかつた。

肩パッドの主張が激しいチエーンソーウオーリアートか、妙に凝つ
た釘バット二刀流とグレネード満載のムシヤとか、無骨なコンテナミ
サイルと改造ミニガンで武装した装甲強化型ブルドとか、ほほ百鬼夜
行レベルの絵面だ。

皆隣の誰も攻撃しない。

参加者の全てがMK-IIを血祭りにせんと迫つてくる。

視線すら向けない。むしろお互いが干渉しないように足並み揃え
てこつちに向かつてくる。

こんなの体ていのいい談合じやねえか！

ルール無用で結果が予測できない試合と、予め試合の結果を決めて
置くのは話が違うだろうが!!?

「ケツの青いガキにはさつさと帰つてもらうぜえ！」

「遊び半分でこんなどこからじやなかつたなあ!!?」

は？

「遊びでやつてるんじゃないんだよお!!？」

眼前のウォーリアに向かつて全力のダッシュ。容赦する事はない。付属シールドをスピードに乗せて相手の胴体に直撃、コアパーツもコアスケルトンも巻き込んで胸部を陥没させる。

新しく取り付けたプロペラントタンクのお陰で、三影のアマゾネスに付いて行けるレベルの加速力を手に入れた。

コイツにタックルされて無事な機体はジ・エンペラーだろうがハカイオードらうが存在しないだろう。

動かないウォーリアは意識する必要はない。

さつさと次だ。初心者をいじめる中級者を許していいはずがない。

「馬鹿なッ!!？」

一瞬で沈んだウォーリアに動搖したグラディエーターが次の標的だ。

当たる武装の全ての火力を叩き込む。

避ける間もなく飛んできたビームとミサイルで穴だらけになつた後、コアスケルトン諸共爆散してしまつた。

「マルコムが！」

「調子乗つてんじやねえぞガキが!!？」

「お前の様な奴がいるから、戦いが終わらないんだ！消えろ!!？」

ブルドガアックスの横払いを仕掛けるが、付属シールドと追加装甲で増えた重量を生かしてアックスにタックル。ものの見事にブルドの得物はひしやげたスクラップになつた。

得物がないLBXはただのカカシだ。

ビームサーベル2本でコアスケルトンごと撫で切りして切り捨てる。

この大会のために出力制限を取つ払つた。もう触れただけでシリドだろうがウエポンだろうが全て溶断させられる。

「くたばれえええ！」

オルテガが振り下ろしたハンマーが降つてくる。

少し飛び退けば避ければと踏んでいた。

ここはアングラビシダスだ。ただのハンマーな訳なかつた。隠されたギミックが現れ噴射炎と共にハンマーが急加速して降ってきた。直撃しなかつたが、掠れた胸部装甲の一部が剥がれてツインアンテナがひしやげてしまった。

「甘いんだよお!!」

ハンマーを握っている両手を切り落とした後、両脚部も切り落として最後に胸部を力任せにシールドで突き刺す。

機体は死んだが武器はまだ生きている。

ここまで来ても懲りずに近づいてくるズールとグラディエーターへハンマーを投げつける。

ここまで来ても懲りずに近づいてくるズールとグラディエーターへハンマーを投げつける。

ここまで来ても懲りずに近づいてくるズールとグラディエーターへハンマーを投げつける。

ここまで来ても懲りずに近づいてくるズールとグラディエーターへハンマーを投げつける。

だから期待しちゃいない。せいぜい気が逸れるくらいでいい。

ズールは大人しく横へ逃げていくが、グラディエーターは大きくに塵芥ぢりあくたと成り果てた。

「歯ア食いしばれ!!」

射程に収まつていてる武装のほぼ全てを斉射する。

空中にいながら何もできずに攻撃を喰らうしかないグラディエーターは、バラバラに引き裂かれていく、爆発こそしなかつたが代わりに塵芥と成り果てた。

残りはズール一機、苦戦するはずもない。

「て、テメエには情けつてもんはねえのか!!？」

「最初からガキ相手に寄つてたかって殴つてきたくせに今更何言つてんだ!!？ そんな大人、修正してやる!!」

ズールが改造ショットガンを乱射するが、スラグ弾じやなくてただの散弾だった。

人がいた時だけ威勢の良い事だ。

散弾なんか撃つた所でこのF A M K—IⅡにダメージなんて入らない。倒したきやさつきのハンマーでも拾つてくるんだな。

態々試合時間を引き延ばす必要もない。

無様を晒し続けるなら相手の名誉の為にもすぐに叩き潰した方がいいだろう。

「ここから居なくなれえ!!」

シールドに始まつたシールドに終わる。

タツクルとは違う。全速力で突つ込みズールのコアにシールドの先端をぶち当てる。

衝突後、ズールは大きく吹き飛ばされてる。

判定回路がCPUが死んだせいか、爆発せずにブレイクオーバーを迎えた。

もちろん胸部は陥没、糸が切れた人形の様に衝撃の影響で関節も機能しなくなつたズールはもはやスクラップ同然だつた。

試合は終了。

観客は大いに満足したらしく、大きな歓声と共に対戦パネルにW
i
n
ne
r勝利の文字が出力された。

「怒りに身を任せちゃ駄目。忘れたの？」

戦勝報告をする為に帰ってきた筈なのに、今は三影に正座させられ説教を説かれてしまつていて。

何がいけなかつたのか。

正攻法とは言わなひが、少なくとも全力で挑んだ試合だつた。ルールも破つてないし、なんだつたら破つたのは向こうの方だし、こんな風になるなんておかしいですよカデジナさん！

「いや、でも向こうが……」

「挑発にのつたら駄目。これも忘れたの？」

何も言い返せない。

なんでかつて？ 正論しか言つたないからぐうの音も出ないんだよ。

あと反論が浮かんだ所でと言うのもある。

だつて練習とか、機体調整に付き合わせたの俺だし。その過程で色々三影に気を付ける点を教示してもらつたのにこのザマだ。

「悟。落ち着いて」

「落ち着いてる」

「まだ怒つてるでしょ？」

「……まあ」

こういう時の三影はどこか見透かしてるんじゃないかつて気がしてならない。

それとも思つた事が表情に出やすいのか。
どつちにしたつて今の俺は三影に無力だ。

「ね、もう忘れよ？」

「……分かつた」

三影の言葉を受け入れる。

そう簡単に忘れられはしないが、まあ一先ず考えない様にするだけでも効果はある。

過去より今と未来に話を向けよう。

「……三影つて勝ち残つたの？」

「悟を相手するより 断然楽」

何処か誇らしげなのは置いといて。

さりげなくえげつない事言つてる氣がするのは氣のせいだろうか。
状況が違うつていうのもあるかも知れない。

俺の場合はターゲットが自分だけに定められていたけど、三影はフリーで動ける時間がある。

クノイチに対抗して開発されただけはあるアマゾネスの機動力で、一対多を一対一にする事は本人曰く難しくないらしい。

それが出来たら苦労したないよ。

出来てるから三影は強いんだけども。

「それより、バン達が待つてゐる」

そう言つて三影が手を差し出す。

「待たせるのも悪いし、行こう」

差し出された手を取つて群衆の中を逸れない様に進む。はぐ

こんにちわ。

前哨戦を超えて準々決勝まで行つたは良かつたんです。

初つ端の対戦相手が海道ジンと言うことに動搖を感じ得ません。

どういう事なんでしょうか。

海道がアミと当たつた時の試合を見たけど、アレはEXAMかHADDES積んでると思うんだ。

それと本人が能力者でしょ。常人以上と言うか妙に感が鋭い。よっぽど後ろに立たれたくないのか、背後にに対する反応は特に速い。

防御するより攻撃を当てに行つて攻撃機会を相手に与えないタイプかと思えば、ある程度攻撃を誘つてから後手からの一撃で一瞬で試合が終わつたりと異名に秒殺つて付くだけのことはある。

よし、切り替えよう。

ゲームだとそこそこ強いが途中で急にガバるCPUだつただけに、その実力と真正面からやり合えることに少し喜びを感じた。そう言うことにして自分を励ます。

ここまで来て置いて逃げるなんてことは出来ないんだ。当たつて砕ける。

お互い壇上に立ち合い、キューブ内に自分のLBXを配置する。司会が耳障りの良い言葉で場を盛り上げて歓声が上がるが、そんな事はどうでも良い。

海道ジンがどう出てくるか。

それが問題だ。

歓声も落ち着いた頃、バトル開始のカウントダウンが始まる。

「……悟」

「……はい？」

「精々、足搔いて見せて」

「侮辱してゐるのか期待してゐるのか。

どちらとも取れる言葉でバトルは始まった。

神谷重工がデクター系統で得た技術と知見を元に持てる技術を投入して開発されたジ・エンペラー。

C P Uもモーターも何から何まで自社製品で、しかもホビー用品としては破格の性能。故にあの動きが出来る。

動き出したエンペラーは速いの一言。

分類上はナイトフレームだが、素の機動力は雲泥の差だ。パワーもダンチでほぼ全てのLBXを圧倒しうる性能と、海道ジン本人の能力がそれを限界まで引き上げている。

ザク^鳥からガンダムが生まれた様に、ジ・エンペラーは神谷重工の技術の結晶だろう。

まあ、だからなんだって話だ。

足搔けって言つたのは向こうだし、使えるものはなんでも使わなきや相手に失礼だ。遠慮なんてする気は毛頭ない。

その場から動かず、ビームサーベルを引き抜き二刀流で迎撃の姿勢を見せる。

機体の細部が見えるくらいまでエンペラーが迫つた時、一転してサーベルで地面を薙ぎ払う。

土煙がエンペラーから視界を奪うが、そんな事お構いなしに突っ込んでくる。

止まるか進路変更でもしてくれれば蜂の巣にしても出来たが、それよか相手の懷まで侵つて終わらせる魂胆らしい。

一瞬で距離を詰めてティタニアを振り上げるが、そこにMK-IIはいない。

「…後?」

土煙の外からバルカンと付属グレネードが飛んでくる。

撃つたのは勿論MK-II。プロペラントタンク様々だ、全力で強化スラスター吹かせるから移動するのに手間がかからない。

当たりはしなかつたが、一旦エンペラーが後退していく。

距離をとつて少しでもこつちに踏み込む姿勢を見せればビームガン、それでも近づくならバルカンと左腕ミサイルポッドで兎に角脚部

を執拗に狙う。

効果はあつた。

脚は破壊できずとも、爆風やら足場の崩壊で思う様に移動できないし、思つた以上に負担を与えられている。

歩行速度はとてもエンペラーに勝てないが、當時スラスターを噴かせて高速移動状態だから距離は縮まらない。

向こうもイタチごっこで近づけないと悟つたか、勝手に遠ざかつていく。

仕切り直しだ。

「小細工を…」

「正攻法で勝てないんだからこうするでしょ」

相手の土俵で戦う必要はない。

それは他ならぬ彼女がやつてきた事だ。

隙を与えずスピードとパワーで殴りつけて叩き殺す。こつちはそれ以上のスピードと手数ですり潰すまで。

本当にただそれだけの事だ。

「初めてだよ。お祖父様以外に初手を封じられたのは」

「そりやどうも」

「でも次はない」

褒められた次にはエンペラーは行動を再開していた。

今度はかりは正面から挑む。

ティタニアとビームサーベル、双方が其々最大火力の得物を振つて攻撃を仕掛ける。

ただし、どつちも致命傷にはならなかつた。

溶断するかと思つたティタニアにビームサーベルが鍔迫り合いを起こしていた。

「ビームコーティングか！」

機体の推力任せに押し返し、追撃阻止にビームガンと左腕ミサイルポッドを発射。

当たりはしないが進路妨害にはなつた。

しかし、ビームコーティングとは。完全に俺のMK-IIを意識した

対策だが、武器に施されてるなら機体も同様と考えた方がいい。

問題はビームガンでもダメージを与えられる程度なのか、それとも弾き返すレベルの強度なのか。それが問題だ。

「面倒な！」

ビームガン抜きの実弾中心にばら撒くが、元々が追撃用かよろけ取り用だから制圧力がない。

だが、武器は兎も角機体に施されたコーティングは精々接触から数秒耐える程度の筈だ。

戦法を変える。

加速力に物を合わせた一撃離脱の辻斬り。

推進剤も残り少ないが使い切るには丁度いい。

向かってくるエンペラーに対し急加速、流れる様にサーベルで切りつけたあとは後ろへ流れ再び突入。

2度目の攻撃で背部に攻撃が届いた。

やつぱり想定通り、あくまで軽減程度のコーティングでダメージが与えられない訳じやない。ビームが届いた背部はしつかり溶断出来てる。

だが相手も馬鹿じゃない。

なんたつて海道ジンだ、それも人間で頭がとてつも無く切れるタイプの。

すれ違い様にタンクを殴り潰されてしまった。推進剤の誘爆が怖いからすぐ様投棄し、降ってきたティタニアを振り上げたビームサーベルで弾き返す。

「私を擦り潰す気でいる、 そだろ？」

「うん。 で？」

「これで終わらせる」

『アタックファンクション』

『インパクトカイザー』

ティタニアが輝き出したと思つたら、そのまま振りかぶつて地面に叩きつける。

なんと言う事でしよう。

さつきまでただの平原だつた場所から衝撃波と共に岩石と溶岩が飛んで体はありませんか。

「嘘!?

「もう遅い!」

初見どつちに回避すればいいか分からぬ通常ファンクションのインパクトカイザー。威力もあるし範囲も広いので愛用していた。

ただし自分で味合いたくなかった。

咄嗟に防御姿勢アクトイブガードを取るが、濁流と爆炎に飲み込まれて機体HPが丸々減っていく。夏場のガリガリ君並みに削れていく様はとても心臓に悪い。

機体本体は装甲が守ってくれるが、付属装備はほとんどがお釈迦になつてゐるのがCCCMの表記から見て取れる。グレネードの砲身は廃材の鉄パイプ並みに折れ曲がつて、ビームガンはいつのまにか手元から離れてるし、バルカンポッドは発射機構ごと焼き切れてただの固体物になつてしまつた。

煙が晴れて愛機の存在が明るみになる。

ボロボロと言つて差し支えなく、素人目で見てももう戦闘が継続できる様な状態ではない。

「これで終わり」

止めを刺しにエンペラーが近づく。

「いや? まだまだこれからよ」

ガンダムシリーズのフルアーマーは殆どが外装パーツ。故にパーツが破損したら足枷でしかない。じやあどうするか? 破損パーツをページする、所謂ポイ捨てだ。

排気音と共に熱で爛れた装甲や装備が落ちていく。

近付いてきたエンペラーに勢い任せにビームサーベルを振り下ろす。まあ当たる訳もなく避けてエンペラーは後ろへ後退していく。

「…本当に、良く足搔く」

あ、因みにフルアーマーとノーマルじやHP管理が別途に存在するので今のMK-IIはフルHPです。

軍事技術詰め込んだ機体が目の前に居るんだからこれくらいは多
めに見ろよ。いや、駄目だわ。檜山が大会運営側だからどうにも出来
んわ。

「じゃあ、後ちょっとだけ付き合つてもらうぞ」

あの後どうなつたかつて？

負けたよ。

あんな格好のいい事言つておいて負けたよ。文句あるか？

良く聞こえないかもしないからもう一度言つとくよ、負けました。逆にあそこから勝てる算段があるのはアニメかゲームくらいだ。だがただで負けた訳じやない。

機体を破壊される前に、エンペラーの右腕を切り落としてやつた。最後の最後に噛みついてきたのが余程想定外だつたのか、目に見えて驚いていた。

これでバンとお揃いだぞ！

良かつたな！（ヤケクソ）

終わつたことはもういいんだ、重要なことじやない。

問題は三影の試合を一切見ていなかつた事だ。

言い訳させてもらえるなら、あの試合のことを少しでも忘れたかつた。

酷い試合では無かつたはずだ。

バンと互角に戦える奴を相手にして、5分と粘つてやつた。ただそれ以上に埋まらない実力差があると言う事に気付いた。

意識しなきやいいものを勝手に、海道ジンと自身の力の差を意識してムシャクシャしていた。

だから今日のことより明日のことを考えた。

海道の情けかそれとも偶然か。機体は爆散せずコアパーティの殆どは失われずに済んだ。

ただコアスケルトンが完全にグチャグチャになつたせいで、MK-IIはもう使い物にならない。

この点に関してはどうせ家にあと数体あるからその点は特に気にしてもいない。

機体はまた作ればいいとして、普通のバッテリージャス欠になるから、MK-IIのは専用バッテリー。それも2度と作りたくないくらい手間が掛かる。

だからコアパーツ周りの確認が必要だつたんですね。

機体の残骸を回収して、次の機体は何にするか。そればかり考えていた。スマホを開けば頭に浮かんだ事を書き連ねて、それがある程度纏まつたらまた別の案を書き連ねる。

必要な部品、具体的な金額と時間、必要な道具と親父の都合がいい日がいつか云々。

大体それを8回くらい続けて、満足した頃には目の前に膨れつ面の三影が佇んでいた。

約束を放棄して自分の事ばかり考えていた男の末路は、考えるまでも無かつた。言いなり同然に自宅に連れられ自室まで押し入られる。自分の家でもないはずなのに、母親も親父も何も言わないで二つ返事で家に上げてしまう。

ヤダ……うちの防犯意識低すぎ……？

俺には分かる。一言二言話しただけだが、両親はこれから起くる出来事には知らぬ存ぜぬを決め込むと、言葉にしないだけでそう言つている。

「じゃ、母さん達買い物行つてくるか！」

それどころか体の良い留守番が来たと言わんばかりに支度を済ませて家から出て行つてしまつた。

孤立無縁の中、あとは流れるまま三影に自室へ連れ込まれチエックメイト。もう逃げられい（カルマ）

「……私、今とツツツツツツても怒つてる」

「……ハイ」

「謝罪は聞きたくない」

「誠意は行動で示す……そう言つてたよね？」

「え？ いや 「言つてたよね？」……ハイ…」

立場が逆なら同人誌案件だろう。そうじゃなくても好き物には売れる内容だけど。

いつも以上に圧が強いせいで何も言い返せない。

それ以前に正論で詰められすぎたせいでもう三影を言い合いに持ち込める様な体力は持ち合わせておりません。

「…で、その。誠意とは一体どの様……な…」

三影様にお伺いを立てれば、両腕を解放してこちらに伸ばしてくれる。

「ん」

はよ抱け。

そう訴える視線とジエスチャ－はなんとも愛らしい。愛らしがいきなりそのレベルはちょっと男子としてはハードルが高いと言うかなんと言うか……

「何か問題？」

「いや、いやいやいや。落ち着いて？」

「私は、落ち着いている」

「そういう時つて一番欲望に従つてるよね。三影」

「うん」

いや、「うん」じゃないが。

もつとこう、ほら、他にもあるでしょ？

なんか物で済ますとかさ、なんかこう……もつと色々あると思うんだよ。

具体案がないって？

そりやそうだ。女性耐性はあつても恋愛経験はないからな。褒めてくれてもいいぞ。

因みに女性耐性って言つたつて普通に話すとか交流する程度。故にハグなんて以外の外。理性を保ちたいために装甲^{厚着}を施して欲しいです。

「いいじやん。小学生の時と 変わらないでしょ」

「いや、なんと言ふか。その……」

「？　満更でも無かつたのに？」

「あれは……まあ、ハイ……」

「スケベ。カズと変わらないじやん」

「ワア……まるで何も言い返せない……」

喧嘩売った拳句ウオンさんにボコボコにされるカミーユ並に打つ手が無いみたいだ。

そしてさりげなく引き合いに出されるカズ。

そう言えばバンは兎も角、カズに関しては沙希さん見る目がなんか変わつたよね。なんでだろ（すっとぼけ）

バンは……あそこまで行くともうただの無知なのか、視界に入れていて敢えて見ないか見ない様にしているかのどっちかだ。

その精神力俺にも分けてくれ。くれ（豹変）

そんな馬鹿げた脳内会議を開いていると、三影が髪を解き始める。いつものツインテールから変身し、ネイビー色のセミロングを靡かせている。

正座している俺は置いてきぼりに、我が物顔でベットへ寝転んで占領する。

「添い寝」

「……」

「してたじやん」

「……分かつた」

今日学んだことがあるとすれば一つ。

三影相手に粘つたらそれ以上のことを要求される。

ハグ以上添い寝以上を要求されたら俺の理性はフライアウエイ、カミーユの精神の様に何処かへと導かれて連れて行かれてしまう羽目になる。

自分のベットには我が物顔で寝転ぶ三影、その側に座る。勿論距離は取るし、それに三影は面白くない顔をする。

「……ほい
「え、ちょッ」

這い上がった三影に押し倒される。

両手も両足も指も足を絡められて拘束。やつてる張本人は他人の胸に顔を押し付けている。

心臓のポンプが爆速で運転しててもう直ぐで臨界点突破で破裂してしまいそうです。

それを直に聞いてる三影は心底ほくそ笑んでいることだろう。アンタって人はあ!!

「話 あるんでしょ」

「……このムードで？」

「悪いの？」

「悪い、気は……しない、けども……」

言い淀むと右手を握っていた三影の左手が首元に回る。

「……」

言わなきや締め殺すぞとの無言の圧力。

屈する以外に道があるなら、イエスでもお釈迦様でもいいから示して欲しい。

「分かった。包まなく話そう」

命以上に大事なものはないって、はつきり解りますよね。物と違つて変えが効かないし。

三影の手が首から離れていく。

思考回路が本当に中学生なのか、たまに疑つてしまふ。

「三影、余り間に受けないでくれよ」

言葉の意味を理解できなかつた。

嘘とは信じたく無かつた。いや、嘘であつた方が良かつたかも知れないと思つていた。

彼は間に受けるなど言つていたが聞き流せる様な物ではない言葉を次々吐き出しておりて、それは無理がある話だと思つていた。

彼は死ぬ前の記憶を持ちながら、何も分からぬままここに産まれ落ちた。愛情を注いでくれる知らない両親がいて、仲のいい知らない友人がいて、そう言つた環境へ放り込まれ今日まで生きてきた。

精神疾患の類なのか。

初めはそう思つていた。生まれ変わりなんて、ましてや他人の思念体が体に乗り移るなんて、聞いた事もなかつた。

未来を知つているとも言つた。

ただそれを話すことはなかつた。それこそ、彼が言う「これから」にどんな影響があるか、予想が出来ないからだ。

大陸の何処かで蝶が羽ばたけば、太平洋の海原で台風が発生するようにはが起ころか、何が引き起こされるのか検討が付かない。

人死にが増えるかもしれないし、上手くいけば減るかもしれない。

言つてしまえば宝くじの様なもので、当たつた時のメリットだけが提示されている、曖昧な上決して都合のいいものでは無いのだ。

なら、彼自身がいる事 자체がもうバタフライエフェクトなのでは？

そう思う人もいるだろう。
いや、こちらは結果が反映されてしまつてるので該当には含まれていません。

ええ、はい。そう言う事です（アナハイムクオリティ）

「見る側だつた。バンとカズとアミ、三影や学校の皆が居て、そこに俺

は居ないんだ。居ないはずなんだ」

彼は彼が居ない世界が本来の在り方だと語った。
それを聞いている彼女は、沸々と内に湧いて出てくる怒りを感じていた。

この世界に悟が居ることが、存在そのものがそんなに不都合で、いけない事で悪い事なのかと。

三影は激怒した。

その様な邪智暴虐な者どもを縊り殺して、その死体と血で海を埋め立て、山河を作つて赤く染め上げてやろうと。

三影は来世がどうの前世がどうの、地獄か天国かどうのなどわからぬ。しかし自分の大切な人への想いには人一倍敏感であつた。
故に思つてしまふのだ。

縛りつけていたいと。

「……還帰りたい……」

ふと出た言葉だった。

彼の本心で、心の底から思つてゐる言葉だった。

親父がいて、母親がいて、妹と弟がいて、いつも心配してくれる祖父母がいて、気のいい友人達がいる世界。

悟としてではない。

三影の知らない、誰でもない と言う『彼』としての本音。

「……駄目」

恋 人 繋 ぎ 指を絡ませていた手を強く、これでもかと握る。

体を彼の体に這わせて、押し付けて、起き上がりない様にベットに拘束する。

瞬間、悟は思い知ることになる。

気付かない様にしていた感覚の全てが、もう無視できなくくらいグワングワンと頭に押し寄せてきたのだ。

男の悲しいサガである。

彼の愚息な息子は素直ではあるが空気は読める。彼とは別に必死に脳と肌から伝わる感覚に耐えているのだ。

「ちよツ▣ちよつと待つて……!!?」

「……」

しかしやめない。

精神年齢＝女性経験なしである。彼には刺激が強すぎるのだ。
さつきまでのしつぽり具合は何処へやら。今の彼は三影が押し付けるナニかや、感じたことのない女性の柔らかさに頭がはち切れそ
うだった。

顔も耳も真っ赤に染め上がり、心臓はドンドン鼓動を高め体温は上
がり続いている。

悲しいねバナージ。男つてこう言う生き物なんだ。

「……話、戻すけど。三影はさ、今までの話を……その、信じてくれる
？」

「解らない」

「うん、まあそうだよね……うん」

「……でも」

嘘は言っていない。

精神異常で発した言葉でもなく、現実逃避の為の単なる作り話でも
ない。彼が三影なら話しても良い。そう判断した故の発言だった。

信頼している人間に對して嘘を言う必要性を感じない。少なくとも悟はそう判断した。些細な出来事をきつかけに知り合つて、何かあつたらお互いに頼りあつてきた三影ならと。

“嘘を言つていな_{あなた}い悟を信じる”

彼女はそう返した。

「三影」

「……何？」

「その……ありがと」

返事はなかつた。

でもそれで良かつた。

自分を肯定してくれるだけでも、彼にとつては十分だつた。

数分の沈黙の後、それは再び襲いかかってきた。

思い出したかの様に理性の破壊神は引き続き彼の精神にスリップダメージを与え、着実にライフを削ってきた。

遂に耐えきれない悟った彼は「そろそろ退いてもらつて…」と言
うが、ダメージを与える三影は「？」と、一言も発さずに済ませた。
彼はその時の心境を踏まえて、女性感を破壊されそうになつたと後
に語つたと言う。

「あ、あ、あ、あ、あ、……」

日中の最中、混み合っている訳でもない喫茶店で情けない声を吐き出して深く項垂れる。いや、項垂れたくもなる。

1日2日と日は開けてきたけど、やつぱり自分が作った機体が壊れるつて言うのは心にくる。

もう三影に甘え倒したいとか、そんな妄言が浮かぶくらいには精神的なショックが大きかつた。

もう少しすれば大きな星がついたり消えたりするかもしれない。

それはさておき、今更市販品を買つて満足できる様な性分ではなかつた。

家に戻れば確かに積みプラとコアスケルトンは眠つてるが、じゃあそれで何を作るか？ それが悩ましい問題だ。

一応知識としては変形機構の仕組みは分かる。

分かつた所でそれを作る設備も材料もないから、結局何もできないから従来通り、コアスケルトンは弄らずにフレームを地道に加工するしかない。

ただこれが面倒なんだ。

必要な厚さまで削つたり、別のパーツと継ぎ接ぎしたり、研磨し直してまたくつ付けたりの繰り返し。

「随分悩んでるな、悟」

「ん、ありがとう。檜山さん」

注文してたコーヒーとホットケーキが目の前に運ばれる。

喫茶店というのは、ミソラ商店街にある檜山蓮が経営している店だ。

近所で何も考えず暇が潰せるところは限られる。

割と顔見知りが屯つてているせいで会話が発生するから、全然ゆつたりできない。

ただし皆んな年頃の少年少女。活発な為にこう言つた物静かな喫茶店に寄りつくことはないのだ。

「やつぱり堪えるか」

「自分の愛機失つて堪えない人間はいないと思いますよ」

「それもそうだな」

バターをコーティングさせたホットケーキを口に入れる。
やつぱりコーヒーだけじゃなくて出し物も美味いわ。

焼き加減も完璧だし生地も甘いしモチモチだし、世界に復讐する前にケーキ屋でも開いた方がよっぽどマシは人生送つてたんじやないかな？ 特に妹に関しては。

二、三口食べてから飲むコーヒー、これが結構美味いんだわ。
口の中をリセットしてまた甘いホットケーキを放り込んで飲むの繰り返し。まさに幸せのスパイラルだ。

「悟は自分のLBXは自分で作つてるのか？」

「そりゃあもう。親父のせいで市販品じゃ満足できない様に教育されたんで」

「成る程な……で、もう次は決まつてるのか？」

「……ふう。まあ、一応。ただ自分の環境考へると、どうしても設備が足りないんで机上の空論ですよ」

出されたホットケーキをものの一分で食い切る。腹が膨れたおかげで若干鬱っぽくは無くなつた。

「ヤケ食いは良くないぞ」とは言わたが、もう食わんとやつてらんないわ。あのシユツとしたスタイルとシンプルな外観を作るのにどれだけ苦労した事か。

ツインアイだつてウォーリアーやグラディエーターと違うから作り直した。

胸部の排熱口とかコクピット周りのデイティールとか、足裏とかのスラスター口とか、とことん手を込ませてもらつた。
……なんか、ホビーと言うよりほぼ工芸品の類だな。

「……所で悟。お前の言う自作LBX、まだ他に案はあるのか？」

「？ まあ、腐る程浮かんできますよ？ ただ作らない現状は絵に描いた餅なんで、絶対外部に口外するつもりはないんですけど」

「絶対にか？」

「年端も行かないうちに黒歴史は作りたくないなんてますよ」

がめついぞラスボス。

忘れがちだが、こいつは最終的に世界に喧嘩を売るつもりの男で、裏で色んなヤベエものを作っている奴もある。

試しにビルゴやサイコガンダムなんて教えてみろ。エターナルサイクラー搭載の等身大の機体作つて世界中を火の海にするぞ。

ただの気のいい料理ができる洒落た喫茶店のマスターじゃない。それはそうとメニュー表は中々に美味しいのでは是非これからも手腕を振るつて欲しい。

「まあそう言うな。ちょっと心当たりがな」

「何ですか、それ」

「知り合いに、お前が興味を持ちそうな仕事をしてる人間がいてな」

「へえ……」

「興味ないか？」

「生憎、親以外からの誘いは疑う様に育てられたので」

親つて言うか、怪しい大人からな。

お前のことだぞ檜山。

「そうか……少なくとも、お前の願いなら叶えてやれる奴なんだが……」

ビクツ

「材料も資金も向こうが工面してくれるのは思うんだがな……」

ビクビクツ

「少しだけ知見はあるが、アレは中々良かつたぞ？
タイニーハンドオービット社にも負けないくらいの設備を、ほぼ無料で使えるんだかなあ……」

ビクビクビクツ

「まあ、今時のご時世だと不審者もいるらしいからな。美味しい話は裏があるって言うし、今回の話は無かつた事に……」「その先方の方呼び出してもらえたりしていただけます？」

「いやあ！あの檜山さんが推してくる子が居るなんて意外でねえ！」
ここは都内の見知らぬオフィス。

私は悟。今、絶対お高いソファに座らされて洒落たガラステーブルを境にスーツを着こなす社会人と面接地味た事をしているの。

スーツの名札に堂々と『サイバーランス社』つて書いてあって冷や汗が止まらない。

檜山の見え透いた誘いにまんまと乗り、勢い付いて藪を突いて蛇でもなんでも出てこいやと息巻いていたが、出てきたのは蛇じやなくてリヴィアイアサンでした。

殺してやるぞ檜山蓮。

「君が考えている案を図にしてもらつたが、中々面白いコンセプトば

かりで久々に心が躍る様な物ばかりだよ」

「は、はあ……ありがとうございます」

最初は町工場とか中小企業とか、その程度の規模を考えていた。あつても技術総合機構みたいな、試験場が複数ある施設かと思つた。だが、あいつは言葉通りの奴らを連れてきた。いや連れてきやがつた。

しかも防犯機能をほぼ無いに等しくさせる性能を持つたLBXばかり出す割とヤベエ企業だ。

こんなのどうしろってんだ。

子犬みたいに縮こまつて怯えるしかないじやん。

「君の自作LBXと、アングラビシダスでの戦闘映像で動きを見せてもらつたよ」

「あ、はい。結局負けちゃいましたけども」

「いいさ、そこは気にしてはいない。私が気になつたのは君が使つていたウエポンだ。アレも君が？」

「いえ、元は父親の知識です。大会で使つた機体を改造する時に、教えてもらいました」

元が理系でもなんでも無いから、どう言う原理なのかは説明の仕様がない。親父の話を聞いてても途中から理解が追いつかなくて知恵熱が出た。

サーベルに関してはバーナーと同じで、粒子量を絞ると伸び縮みが出来るらしい。した事ないけど。

そもそもどうやって空氣中に粒子を固定してるのがよく分からん。磁界とかの応用なのか、それとも謎科学なのか。

技術者でもないから何が凄いのかよく分からぬが、先方は中々興味津々の様だつた。

「成る程ねえ……ちなみに、君の愛機を作るのにどれくらいの費用がかかるのかね？」

「……十数万」

「もしかしてギヤグ？」

「いえ、割と。冗談抜きで」「付属品を取り外しても？」

「あ、それなら数万レベルに抑え込めます。自分が苦労するだけなんで」

相手の視線から哀れみを感じる様になつた。

普通の中学生が使う様な金額じゃないのがいけないんだろう。でも実際それくらいかかるつてるんだ。

予算の割り振られる開発部でもないのに試作しては動かして、欠陥があつたら修正ついでに作り直しを繰り返すんだ。

諸々含めたら20万以上は確定だ。
3倍の性能を求めるのに3倍の金額が、3倍の速度で溶けていくのは中々心に来るものがあつた。

小遣いは月にもらつてるし、親父に金をせびるのも申し訳ない。だから多くもない自分の金で色々やつてきた。

ただ、先日にはその金の塊がものの見事なお釈迦にされた。注ぎ込んだ金額を考えれば、心が折れても仕方がないと思うんだ。

「ふむ……さて、ここまで長々話して來た。その中で、私はある決断をする事にする」

未だガチガチに緊張している俺をよそに、先方は話を次の段階に進めるらしい。

「君、ウチで働くてみないかい？」
「はい……はい？」

今なんて言つた？

働くの？この年齢で？

確かに児童労働って明治には禁止されてなかつた？
でも将来の就職先決まつた様なもんか？
え、でも働くつてどこで？

「…ああ、大丈夫かい？」

「へ？ え、あ、いえ。別に……」

「いや、言葉が足りなかつたかな。我々、サイバーランス社の開発部門に来るつもりはないかい？」

そう言つてニコニコと微笑んで見せる先方。そこには珍しく悪意

も何も無かつた。

比較対象が檜山だから綺麗に見えるだけかもしれないけど、少なくともそこにはなんの企みも無かつた。

ええんか？

どつかの白兎の小娘みたいに嘲笑されると思つてただけにこの反応は困る。返答に困る。

「……いや、嬉しいですよ？　でも、ちょっと…」

「無理にとは言わないよ。なんなら名刺と連絡先を渡すから…」

「ああ、いや。考えだけ取られてポイ捨てされないかなって…」

「ウチつてそんなヤバい会社に見える？」

「作つてるLBXの性能考えたら妥当な評価だと思うんですけど」

改めて自社の印象と評判に苦笑い先方は苦笑いを浮かべる。そりやあんな奴らの開発にゴーサイン出す人間が居るんだから仕方のない事だ。

尻尾切りみたいになんらかの不祥事が起こつたら責任者ごと関係者を切るつて事を、見えないところで平然とやつていそうだから怖い（偏見）

「じゃあ、来てくれるかな？」

「給与と学業に支障が出ない範囲の内容なら」

「それなら安心してくれ。必ず融通を効かせる……ただ、ちょっと給与に関しては親御さんと要相談かな…」

「ああ……確定申告」

「うん。まあ、中学生で収入が発生するとかあんまり例がないし、国の目も厳しいから……」

「今年も年末調整がね……」とか、元社会人としては聞きたくもない生々しい内容だつたので意識からシャツアウトしておく。にしても、サイバーランスか……まあ、現代じゃあり得なかつたけど、ここは未来の異世界。

中学生で収入が発生してもそれ関係の法律周りが少數例の為に成立してゐるのか、割となんとなるらしい。

兎に角これで就活で地獄の様な思いもせず、中学の内から貯金を増やすことができる。

アメリカンドリームを手に入れた人間の気持ちがよくわかる。こんな天文学的な確率の成功体験味わつたら本も出したくなるはな。

ただ、問題がある。

親になんて言えば良いんだろ。
特に母さん。

年端も行かない年齢で内定が決まり、親を安心させることができました。

嘘です。安心どころか逆に心配されました。
連絡だけ入れられた後に、数枚の資料と社内専用の端末まで渡され、家の前まで送つてもらつたは良いものの、家に入ればに母親と親父交えた家族会議が始まった。

詐欺じゃない？ 人身売買とかそういう類？ 後から誘拐されて身代金とか要求してくるタイプ？とか、聞き覚えのある犯罪と聞く機会のない犯罪組織が母親の口からボロボロ出て来た。

落ち着いてから後日社内に案内されるまで信用しないくらいには心配された。

息子の顔見知りの異性と名前も知らない社会人じや、確かに後者を警戒するわな。

でもいい加減三影がしつと家に上がる事と、親戚の子と同じ感覚で招いている事に違和感を覚えて欲しい。俺のプライベートがないに等しくなる。

法律関係はよく分からんので保険も保証関係も親に丸投げ。ただ書類だけは本人の記入が必要だから、直接俺が関わったのはそこいらいだ。

いくら前世で社会人でも、遠く離れた異世界の未来の“日本っぽいところ”の法律はよく分からん。明るかつたら逆に怖い。

同じ名前の法律でも効力も記載事項も全然違うから、むしろ任せないと後々面倒になる。

それらがある程度片付いたら、開発チームとの顔合わせとか施設内で軽い研修と、目を通さなきやいけない資料に目を通して、必要な端末と守秘義務の遵守とかとか。

まあ自社製品の開発だから色々情報と最新機器も回つてくるから、

必要な事だつてことは分かつてゐるけど、人間つて新しい環境にはストレスを感じるもの。

向こうも気遣つてくれてゐるもの、やつぱりちよつと落ち着かない。

特に慣れない事ばかりで、小さな失敗でも心配性故に考えてしまうから余計落ち着かない。

責任もついて回つてくるから頭が痛い。

「はあ……」

あつという間に1日が終わつて日も落ちた時間帯。帰宅ラツシユに遭遇して駅構内の飲食店で時間を潰している。

学校は休んだし、今日は特別帰りが遅いのも親には言つてあるけど、ラツシユが早く終わる事を願う。頑張れ鉄道会社。

適当に頼んだフライドポテトが美味しいから、それを摘みにスマホをポチポチ弄つている。

……なんか、最近ため息しかしてない気がする。

「にしても……」

なんで檜山はサイバーランスに顔見知りが居るんだ？

そりやあ、巷で有名なプレイヤーだから専用機開発の話が出てもおかしくない。

更に言えばテスターとして囲い込んで、商品開発とネームバリューカー企業が欲しがる。そう言う過去があるのかも知れないが……

……ああ。でもプレイヤー以前に元は科学者の端くれでもあつたのか。

檜山自体もどの勢力に属しているわけでもない。表面上はフリーの一個人、秘密抜きにしても駄弁るくらいの友人がいること自体は不思議ではないのか。

その辺、新しい上司に聞いてみる他ないな。

他人のことは他人にしか分からぬし、当たり障りのない範囲で聞き取り調査でもするか。

「……怖え奴だ」

言つちや悪いが、権力の使い方が下手で騙しやすい身内に甘い友人が居て、父親を取り返したい子供まで利用する。

自分の計画を実行するのには快適な環境だ。

見え透いた餌を掲示させて、助言を説いてやればイノベーター側の目も釘付けに出来るし、向こうも自分の思惑までは探つてこない。

しかも自分は友人の兄が設立させた地下組織の重役。

組織の目標は檜山本人が目指す物とは相容れないが、イノベーターを掌握する上で自分が動かなくとも大抵のことはやつてくれる。

ほんと、復讐の為なら何でもする典型的なヤベエ奴だ。

いや、まああの過去あつて真人間になつたらそれはそれで精神状態を疑うけども。

「……うまっ」

やめよやめよ。もう考えたつてしようがない。

そんな事より、珍しく三影から返信らしい返信がない事についてでも考え方よう。

「隣、いいですか？」

そんな時だつた。ふと後ろから声をかけられる。

カウンターに座つてるからか、一席開ければいいのになんとも律儀な人だと思いながら、「どうぞ」と返す。

隣に座つて来たのは同年代くらいかの女子。癖つ毛が強い黒髪のセミボブで眼鏡を掛けていてる。

服装は……まあ、うん。うちの学校の女子がみんな奇抜なのが原因なのか？ 相対的に見て年齢の割には大人っぽいし大人しい。

「……何か付いてます？」

「いえ……ふふ、気にしないでください」

いや、ごめん多分ヤベエ奴だ。

見ず知らずの他人の顔覗き込んで笑ってる奴とか、相手が女性でもちよつとお近づきにはなりたくない人種だよ。

なんか周囲の視線も刺さり始めて来た。

やめろよ一番恥ずかしいのは何の脈絡もなくこんな状態にされた俺なんだぞ。

「あの……何処かで会つたりします？」

「ええ、まあ？ 会つてはいますね？」

何だコイツ。

いや、俺が言つた言葉もアレだけど無いなら無いとかあるならあるではつきりしろよ。

アミとは別タイプで面倒臭い奴だ。

いきなり現れて自分のペースで物事を進めるせいでこっちがやる事なす事が全部裏目に出そうで怖い。

「……本当に分かりません？」

「いや誰よアンタ」

「……え？ 本当に覚えてない？」

なんか急に焦り出しだぞ。

だからやめろよ。何もしてないのに視線がさらに痛くなつたぞ。

誰かと勘違いして声かけたら全くの別人とかやられる方も溜まつたもんじやないんだぞ。

「……本当に覚えてない？『悟』くん？」

名前を呟かれた。

ちよつと待て。何でこの女は俺の名前を知ってるんだ？ 初対面のはずだぞ。

あんまり会わない親戚や学校の友達にもこんな奴はいない。コイツの名前は知らないが少なくとも俺の周りにこんな女は居ない。

……いや、待てよ。俺の名前の呼び方には聞き覚えがある。誠に不服だが、あのサイコスキン^サ_イ^キ_ス^女女とコイツの顔が重なる。

「…お前、『あの時』の…」

「ツ!! そうそう！ やっぱり覚えてるじゃん！」

いきなり碎けた喋り方になつた。

うわっ。敵じやん滅ばさなきや（島津脳）

いや待て。もしあのサイキヤス女なら何でこんなところにいる？ 確かサイコスキン^サ_イ^キ_ス^女女とコイツから感じられないはずだぞ。

精神病棟に入れられる精神疾患者みたいな虚さがコイツから感じられない。

「…で？ 何用だよ」

「冷たいなあ、私と君の仲じゃない？」

「いやそんな交流してないし……」

「これから始めよう？」

「いや、友達は間に合つてるんで……」

「……捨てるの？」

お前いい加減にしろよ？

本当にやめろよ。

何で被害者の俺がこんな冷たい視線浴びなきやいけないんだよ。悪いのコイツだろ。

クソッ、店員まで冷ややかな目えし始めたぞ。

「……で、お前は何で出歩き出来るんだ？ 見立てが間違つてなきや、お前の施されてる……」

「『サイコスキャニングモード』？ 別に、常時発動してる訳じゃないんだから出歩けて当然でしょ？」

なんか平然ととんでもないこと言つてるぞ。

アレつて発動時に全力出せる様に投薬したり手術したりとか、どつかの製薬会社みたいな倫理観のもとで実験が行われてる筈なんだ。アルテミスで発動した以外にも、施設内で何度も試験の為に発動しているはずだ。

灰原ユウヤが普段から消沈気味なのも、普段の試験で発動しまくつてるからだろう。

現に精神崩壊になつたりしてゐる故に、発動中にかかる精神的負担は計り知れないはず。

なのにこの女はケロつとしている。

なんかキヤラスーンみたいだなこいつ。

「所で、何でそんサイコスキャニングモードな事知つてるの？」

やべ。下手打つた。

「組織つて一枚岩じゃないだろ？ そういう事だよ」「ふうん。まあ、今はそういう事にしてあげるよ」

不審には思われたが、追及はされなかつた。

向こうも下手に突いてくる訳じやないらしい。

「……で？ 結局何の用だよ」

「今日、山野バンを含めた一向が海道邸に侵入した」

お前そう言うの早く言えよ。

通りで三影から返信が返つてこない訳だ。逆探防止か、そもそも海

道邸に電子戦機器があるのか妨害されてるのか。
絶対後者だと思うけどな。

「で、それを俺に伝えてどうするんだ？　俺はお前の飼い主とは敵対してんのだぞ？」

「いや、特に意味なんてないよ？　邸宅が襲撃されたから集まれって連絡は来てるけど」

「……え、何でお前ここにいんの？」

「だつて管轄外だし」

そう言つてバーガーに齧り付いてモツキュモツキュと咀嚼する。
いや、職務放棄つてマジかよ。

うちにもこんなモンスター社員いなかつたぞ。

「私がいなくてもアイツが居るし……」

「海道ジンか」

そう。と言つて俺のフライドポテトに手を伸ばす。
一々会うのも面倒だから、伸ばされる手を拒むことなく受け入れる。
なんか、懷いてるのかいないのかわからない猫に餌付けしてる感覺だ。

「…そういうや、俺に近づいた理由は…」

「ああ。それはね、『あの時』の事でかな？」

「あの時？」

あの時つてなんだ？

少なくともコイツと交流を持った事はないし、なんなら顔を見たのもさつきだ。

それ以前の記憶？　三影よりも前にコイツに会ってるのか？

いつ？ 何処で？ 何が遭つて……遭つて？
いや待て、”遭つて”つてどう言う事だ？ 何に遭つたんだ？
喧嘩売られたなら三影の時だろ？ それ以前の？

「…話の意図が分からん」

「いいの。私が覚えていて、それで十分なの」

「答えになつてないぞ」

「今の私がいるのは貴方のおかげ」

「だから……」

次の言葉を吐こうとした時、唇に人差し指が当たる。

犯人は勿論、目の前の女だ。

カウンターで行われる中学男女の行為に、流石に周囲の目から冷たさがなくなる。

代わりに目立つたせいで色んなところから視線が飛んでくる。
おい、これどうやつて帰ればいいんだよ気まず過ぎだろ。

「シー……答えはまた今度に、ね？」

そう言つて唇から指を離す。

この調子じや、これ以上は何を聞いてもはぐらかすだけだろう。これ以上は何も言わないし聞かない。

ただ、最後に知つておきたい事はある。

「…お前、名前は？」

進めていた足を止めて、振り返つてみせる。

さつきのお茶抜けた雰囲気はなかつた。

真つ直ぐとした目は誰でもない俺を見つめている。
俺の問いに、アソツは満面の笑みでこう答えた。

「私は灰原
ユウナ。^{祐奈}

よろしくね、
悟くん！」

「どうしようなあ…」

与えられてまもない職員デスクで頃垂れる。

かなりお気に入りの部類だったMK-IIが完膚なきまでに破壊された。いつまでも第一線で使えないとは言わないが、LBXとて一ホビー製品。いつかは損壊するとは覚悟していた。

ただやつぱり、自分が手塩にかけて作った物が一瞬でスクラップになるつてのは、やはり堪える物がある。

色々と凝つて、親父の協力もあつてあの性能に落とし込めてかなり嬉しかつた。デジタル処理で映し出された姿じやなくて、ちゃんとプラスチックと金属で動く实物で、しかも自分の思い通りに動かせる。MK-II、間違いなくお前は最高の機体相棒だったよ……で、これからどうしよう。

どうせなら好き勝手色々盛りたい。修理代を考慮に入れなければ色々と積み込めるが、そうなるとまず破産申告する羽目になる。

開発予算に手を出すほど常識が欠如してゐる訳じやないが、手を出す人間の心境がよくわかる気がする。

でも今更市販品の無改造機で満足できる体でもないし、秋葉の路地裏商店に行けばそれこそカスタム機の一つ二つは有るだろう。

でもさ、あそこ価格設定が商法違反してゐからぼつたくられる可能性が高いんだよ。そこら辺にある自販機と駅中の自販機ぐらい値段に差がある。

売つてる商品に良い意味でも悪い意味でも差があるのが自販機との違い。製品保証もないから買い損はまず間違いない。

そこら辺のお助けクエストでも良いんだけど、肝心のLBXがないから受注出来る内容は狭まる。

給料日まで待とう。そう思つて机に頃垂れて不貞寝しようとした時、改めて考えた。

Q：私が所属してる部署つて開発部ですかね？

A：そうです

Q：サイバーランスつてLBX造つてますよね？

A：製造します

Q：商品開発を理由に色々作れますか？

A：巻き込めば行けます（邪神）

乗るしかない、このビッグウェーブに。

報！連！相！

深夜テンションも相待つて開発部全体を巻き込んで祭りの様相を呈していた。専用のコアパーツを作り出した猛者を筆頭に、一晩で凄まじい数の素体を生み出し続け、気が付けば日が頂点に登つっていた。だがそれで終わらない。

このまま素体達を商品として売り出すには、この界隈で後発のサイバーランス社としては些か部が悪かつた。

なんせ相手は世界の市場を席巻する天下のタイニーオービット社、そして後発ながら自社とは違い、機体のハイパワーを売りにして地位を確立したプロメテウス社。

いくら法律ギリギリの奇抜さが売りのサイバーランスとは言え、これまでの商品に対する信頼と印象はまず圧倒的にタイニーオービット社が上だろう。

ただのLBXで売りに出すには利益が見込めない。
まあ、"ただ"のLBXならの話だ。

「じゃあストーリー性を持たせよう」

誰が最初に言つたか分からなかつたが、そこからは営業の人間も
道連れ引き摺り込んで語り明かした。

フレームを付け替えるだけでいいと言うのは変わらないが、既存の

コアスケルトンとは違ひ若干大型化している。

まあ、大型化と言つてもジエダ（21m）とジエガン（20m）程度の差しかない。

既存のフレームが融通できないとなれば、どんなに優良商品を謳つたところで買い手の手は届いてこないし、まず流し見されて終わりだ。だから新規の取り込みに重点が置かれた。

どうせ既存のLBXと違うなら、それを前面に押し出せば良いと。そこであえて物語を与える事になった。

プロメテウスもタイニーオービット。^{セシモン} どころか世界の何処でもやつてないのだ。あつても精々が有名なヒーローもののコラボ製品で、ストーリーも放送番組に沿つているだけ。

ただし、考案するにしても地上だけを主にしたものでは他と被るし、最悪苦労して設定を練り上げたにも関わらず、中に関係ない場所で物語として完成して世の中に出てしまう可能性がある。

海も駄目、陸も駄目、空も駄目。異世界はちよつと所ではないレベルでハードルが高いので速攻で却下。じやあ何処にすれば良いか。

そうだね宇宙だね（思考誘導）

この世界、21世紀半ばなだけあつて宇宙開発は進んでいるのだ。冷戦期と比べると相当遅いけど。

ただし、人が問題なく生活できる1G環境が備わった宇宙ステーションと、そこまでの安全な航路が確立されている。宇宙服も米軍の爆破処理班が使う耐爆スラットみたいなゴテゴテしたものじゃなく、ノーマルスラットの様なスラットとしたもので、脱着も1人で出来るで宇宙空間へのアクセスもかなり不自由がないものになっている。

今までステーション建設何周年！みたいな感じで、国内外問わずLBXメーカーは自社製品を使って色々イベントを行つていた。ただし、あくまで宇宙でも使えますよ的な内容であつて、それ以上でもそれ以下でもなかつた。

そんな手付かずな環境を使って大胆に商品展開！ 集客！ リ

ピーター確保！を目指してサイバーランス社商品開発部は進み始めました。

「何も出来てなくない……？」

「大人しくして？」

三影によつてベットに埋葬される。

中学生の体でオールは体に応えたのか、気怠さを始めてに様々な症状が浮かび上がり、気付けば自宅で寝込んでいた。

もう何もする気が起きないねえ。元気の前借りエナドリをした覚えはないのに、倦怠感と疲労だけが体に残つてゐる。祭りだ祭りだと騒いでいたが、結局自分の目的には一切触れずに流れに身を任せた結果、当初ら話が飛躍して規模も拡大してしまつた。

まあ、うん。楽しかつたから別に良いけども。

あんなにはしやいだのいつぶりだろう。少なくとも就職する前の高校生くらいだつたか、仲間内の悪ノリみたいで精神年齢アラサーながら昂つてしまつたのだ。

やはり、大勢で馬鹿騒ぎすると最高や。

後始末がどうとか一人で考えず、巻き込んでみんな道連れに出来るから罪悪感が減るんだ（屑）

コソコソするくらいなら堂々と。ただしヤベエ事はバレない様にやれつて高校の先生も言つてたし、あながち間違이じゃないのかも。

「……三影？」

「？」

「……いや、うん。なんでもない」

さりげなく家にいる三影に何かを言おうとしたけど、なんかもういやと言葉を引っ込める。

邪魔になるからと言つて普段のツインテールからまとめ上げて、ポニーテールにしてる姿が見れるだけでも貴重なんだ。それに最近は登校出来てないから、バン達の近況報告なんかもしてくれる。

で、聞いた話だとやはりアルテミスに向けてバンが檜山とマンツーマンで訓練漬けの様子。カズとアミも揃つて放課後は地下闘技場に通い詰めらしい。アルテミスの出場チームは3人まで故に、三影はこの鍛錬には参加していない。1人でゲームセンターに行こうにも、自分のLBXは無いから暇も潰せないので、結局家に来ているのだ。

「そう言えば三影。アマゾネスの代わりってどうする？」

「クノイチにしようかな、って思つてる。けど、どうしたの？」

「自分の以外に三影のLBXも手に入りそうなんだ。だから、何か要望があればそれに寄せたいかなって」

ピクッと体を止めて固まり、思考中だつたのか数秒の間をおいてから急速接近。緊急回避を吐けない故に、タツクルはライフで受ける羽目になつた。

気持ちちは分からぬない。なんせLBXも子供の手が届くものとは言え、壊したからつてそうポンポン買い直せるものでもない。親の信用と言うのは、いつまで経つても下げるはならない類のもので自分で買うにしても、散財も度が過ぎれば親の手が入つて購入停止措置を出されかねない。

まあ、今回はほぼタダのケース。社内で好き勝手やつて色々作つて規模をデカくした手前、多少の融通は利く。そもそも最初は自分の機体欲しさに始めた筈の口実作りだつたんだ。プラン自体はあるし、數十ならいざ知らず、一つ二つ程度ならなんら問題はない。

「……それ、本当？」

「私、嘘つかない」

「……じゃあ、うん。お願ひ」

安心したのか、三影の圧力から解放される。バウンドドックに抱きつかれた時のカミーユもこんな圧を感じていたに違いない。

それは置いといて、要望を聞いて機体を製作する。簡単そうに見えても双方が満足する結果を享受できるのは難しい。結局どこかを妥協するか、試作機で現れた長所を活かす様な性能に仕上げなければならぬ。

なんでも突つ込んだ欲張りセットは、大体碌な機体に仕上がるなり。望むものを一通り聞き出し、それとは別に三影があつたら良いなと思う要素を何点かに絞る。

滅多に使わないスマホのメモ機能に色々と書き連ねる。武装に特にこだわりもないらしいので、該当する機体はすぐに浮かんできた。

「……これで大丈夫？」

「守つて攻めては、苦手……かなつて」

あとは機体のカラーなんだけど、素の色合いもいい手前、アマゾネスに合わせて色を変えるか迷う。いや、あの機体に関してはそれもありなんだけど、やつぱり良いものが一つ以上あると決めかねてしまう。

……色違いで2機分作るか。

「2日か3日くらいかかるけど、大丈夫？」

「平気。望み過ぎは、良くない」

この娘ほんとに中学生？ 年の割に精神年齢が高過ぎて大人かと勘違いしそうだよ。ともあれ待たせるのも悪いので早速行動に移そう。

「オッケー。じゃあ早速……」

「それとこれは、話は別」

ベットから起きあがろうとした途端、強い口調と腕によつてベットへと静かに埋葬される。

体調が戻るまではベッドに拘束されるのは確定らしい。

「おお、速いな」

サイバーランス社の狭くはない開発室。今ではスペースの三分の一が、アルテミスなどで使用される大型Dキューべに占領されている。

後から設置されたこのデカブツは、此度の開発部で起きた騒動から導入が決まったもの。最も、酒の席で部長が「シユミレーションじや何処が悪くなるか分かんねえからデケエのくれよ!」と口走つたら本当に来ちゃったので部署内部で絶賛持て余していると言う現実があるが。

六角形のハニカムを7個連結した蜂の巣状のもので、それぞれが市販のDキューべより大きくて、一個一個に別々のフィールドが用意されていると言う好待遇。耐久試験以外にも息抜きで試作品を乗り回したり遊んだり出来るので個人的には有難い。

今は作つたばかりの試作機を乗り回している。

アングラビシダスで自分のLBXを失くした三影のもので、ほぼ特注品と言つて差し支えない機体と性能になつた。

選考基準は使い易く、速く、身軽な機体である事。この時点で両手で数えるくらいには浮かんでいた。ここから更に条件を絞つていくとほぼ片手に収まる数になる。

まあ、結局は当てはまる機体は全部作つたんだけども。やはり実際に見て比べない方には始まらない故、致し方なし。

とは言いつつ、実のところは自分が欲しいと思つたからちやつかり作つた節がある。企業秘密故に自宅に持ち帰れないのが辛いが、しばらくは辛抱の時だ。

人の噂はすぐ広がる。それも個人の見解と誤解が多分に含まれながら、他人の事故に有る事無い事と付け足して、更に取り返しがつかない規模まで膨れ上がる。

何处に商売敵の目があるか分からぬ中で、抜かれてたくない情報を

外部に持ち出すのは危険なのだ。

まあ、どうせ今くらいしか使わないし、アルテミスにも出ないから気分だけ味わっていると言うのもあるが。

それはさて置き、あれから3日。設計図は頭の中にあつたから組み立ては直ぐだった。

『使い易くて、尚且つ速い』

それを可能にする機体は複数ある。元がMSVも含めればほぼ無限に新機体が出てくる環境であるが故、探せば普通に見繕える。

でもそれじゃ面白みに欠ける。どうせなら他も作つて自分で比べよう。気が付けば余計なものもしこたま作つて、自分で設定した納期に間に合いそうになつた。

自分の欲望を優先しすぎた。反省しているが出来栄えが良かつたから後悔はしていない。たつて期限守つたし。

まあそれも置いといて、兎も角目的のものは仕上がつた。寄り道が酷かつたが、辿り着けたのならノーカン！ノーカンだよ！

「……異常なし。ヨシッ！」

一通り動かしての動作確認を終え、捜査を終了。大人しくなつた機体を手に取る。

特徴的な大出力・大容量ブースター。花弁のように広がる肩部のフレート装甲。V字アンテナを意識したロツドアンテナ。何処を見てもガンダム要素が見当たらないが、何を隠そう列記としたガンダムである。

コンセプトが被つたせいで連邦軍から要らない子判定をされたものを、天下の大企業^{諸悪の根源}「アナハイム」がプランと社内ベンチャーとしてフレームごと引き継いで独自開発。

作つたものをテロ組織に横流しするも、自社の関与を疑われたら困るので外装フレームを総とつかえ。元々終戦で職に溢れていた所をアナハイムに吸収されたジオン系技術者が中核だつただけに、整形手術後は実にジオン系らしいMSへと生まれ変わつた。

登場から長く活躍することもなく、割と呆氣なく退場した個人的に
好きな機体

の、改修機。

いや、最初は前者だつたんだ。ただ三影が使うつてなるとなんか色
もシルエットも気に入らなかつた。だから作り変えたんだ。

後は三影のお目に叶うかどうか、結局はそこが心配になる。

自信がない訳じやない。ただ、相手の為に何かを作つて贈るつて言
うイベントを生まれてこの方した事がない故、初めての行いと言うこ
ともあつて緊張している。

いつその事、三影のイメージカラーでもあるノーブルカラーにしよ
うかとも思つたが、イメージだけに留めたものの違和感が凄かつた。
名前的にもどつちが悪いとかだつたら決めやすいが、双方名前の意
味にはポジティブ成分が多分に含まれてる。

方や高貴で氣高くあり、方や前向きで希望である。

「敢えてそのままの方がいいかな」

すでに出来上がつたものに何かを付け足すと言うのは、失敗する確
率の方が高い。ザクパ別の物と別の物を掛け合わせて出来上がる物が全て
成功するとも限らない。

トーリスリッター
例 外はあるけど。

その時はその時だな。合わないなら合わせる様に一から作れば良
いだけだ。

そうと決まれば梱包しよう。流石にこのまま手渡すのは憚られる。
例えるなら、誕生日プレゼントでゲームカセットだけ渡される様な感
じだろう。渡されるのが俺だつたら大して気にはしないが、相手が三
影なら話は変わつてくる。

箱絵はまだ諸事情で載せられないからただの白い箱になるけど、説
明書の付属にでも付け足しておくか。

放課後、いつもの場所に三影を誘う。

別段変わった所もないが、強いて言うなら例の喫茶店が潰れたらいいか。それ以外では変わり映えしない。相変わらず人通りが多くて賑やかな商店街だ。

入つてすぐのDキューブエリアに足を踏み入れる。

今日は特段荷物が多いから、使つてないであろうテーブルを引っ張つてきて荷物を広げる。

鞄の容量を半分ほど占拠していた白い箱。普段は大人しくて表情も滅多に見えることのない三影が、今だけは年相応に興味を示し食らい付いている。

「これ？」

「そうそう。開けてみて」

包装紙を丁寧に外していく。中は包装紙と同様の白い箱、PPバンドを二ツパーで切り取り箱の蓋を取り上げる。

三影にとつては見慣れないシルエットのLBX。それが良かつたらしく手に取つてマジマジと見つめれば、関節を動かしたり、単純なポーズをさせたり、全体を隈なく見通している。

そうかと思えばこつちをマジマジと見つめ、「これで遊んでいいか？」と目で訴えている。

そんな心配しなくとも最初からそのつもりだよ。

「ちゃんとCCMと同期させてね」

「ん」

LBXを乗り換える場合、変更する前の機体にCCMと同期をりセットする必要がある。

余分な機能がない タインオービット T I 社はスマートに行くが、うちみたいな法律的にグレーな機能を搭載している機種だと時間がかかる。

まあそれはそれとして。今回みたいに操作する機体を変える場合は、新しい機体には勿論自分のCCMの認識コードが伝わっていな
い。

昔は誰でも操作できたらしいが、LBXでの死傷事案が増えて禁止、Dキューの安全性を盾に普及し出した辺りで、それぞれの機体に操作権限を付与しようとなつた。

まあ、長々と文字にしたが要はCCMに機体を新しく登録して、他の端末で操作できない様にするだけの作業。それもコアパーツカバーの裏面にある認証コードにCCMを繕せばいいだけで、難しいことなんて一つもない。

でも工具がない時、コアパーツカバーを取り外すのは不可能だ。でも大丈夫。そう、サイバーランス社製品ならね。

一回限り有効なバーコードスキャンでいち早く貴方の手で機体を自由に動かせます！ 安心してください、勿論他の人がバーコードをスキヤンしても貴方の端末以外受け付けることはありません！

ただ端末側で設定しなきやいけない事が多すぎるから、あつた所でという感が否めない。

「よし」

都度教えながら設定を終えて、いよいよ機体を動かす。

何も無いのは寂しいと思つて設定した起動音がいい雰囲気を出している。

ツインアイを光らせ左右に顔を振り、そのまま歩き出す。操作感が解つたからか、段々と動きがアクロバットになっていく。

右に左に、上に下に、前に後ろに、時にはスラスターにものを言わせ大ジャンプからそのまま滑空したりと、思う限りの事をこなしている。

次は射撃。停止中、移動中、落下中、上昇中、兵器の試験でもやつ

てるのかと思うくらい色々見ていく。

勿論、ライフルも機関砲も撃てば弾が出て、弾道も銃身の跳ね上がりに気をつけ丁寧に扱えば早々に明後日の方向に飛ぶ事もない。そういう風に仕上げた。

耐久性も安心設計。戦いの基本は格闘戦だつて何処かの狐も言ってたから細身の割には頑丈に作つてある。

三影の操作にも問題なく反応し、思つた通りに動く。多少の癖はあるだろうけど、それは三影が見つけていくだろうし、今は手を加える必要はないだろう。

「……凄い」

「気に入つた？」

「……気に入らない人、いるの？」

「居ない……とは言えないかな。三影の為に造つたんだし、合わない人にはとことん合わないとと思うよ」

万人受けは最も。ただし、コアなファンを獲得したいなら多少尖つてるくらいじや無いと見向きもされない。

そもそも三影以外が使う、なんてのはハナから考えてない。多少の主觀が入つてるとは言え、ほぼ三影専用機と言つても過言じやない性能の機体に仕上げた。

扱えるのは三影だけ、気に入るのも三影だけ。ただし一部の例外は除く。

「……うん、ありがと」

「こつちこそ。あとは気になる所とかはある？」

「ない……ううん、ある。一つだけ」

「一つだけ?」と思わず聞き返す。

何か不満点でもあつたのか、それとも足りないのか、考えられる事を一通り思い起こす。

ただ、そんな心配を他所に帰つて来たのはごく普通の事だつた。
「この機体_子に、名前は あるの?」

ああ、そう言えば確かに言つてないや。

あの機体この機体と言つて來たけど、これから先アレよコレよじや
伝わり難いのは明白。

ただこれも自信を持つて言える答えを用意してある。

「勿論、ちゃんと決まつてるとも」

「聞かせて」

余程お気に召した様子で、珍しく三影が乗り気だつた。名前くらい
減るもんじやないからね、もつたいぶる必要もないでしょう。

デザイン、性能、コンセプト。どれを取つても個人的にピカイチな
物を持つていて、何故か友人がスローネドライと間違えてた事が印象
的なあの機体。

「ガーベラテトラ改。ちよつと事情があつて改になつたけど、自信を
持つて言えるくらい強い機体だよ」

日が登つて数時間。

時刻で言えば早朝7時の時、人通りが少なくまだ閑散としている商店街、その片隅にあるDキューーブで三影と対面している。

元気盛んな中学生と言えど、休日の早朝。パンやアミと言えど、この時間帯に起きている人間はそう居ない。久々に三影と俺のタイマントン、サシの勝負を楽しんでいる。

三影が扱うのはアマゾネスに変わり、派手な紅色の機体色と、緑に光るツインアイが特徴的なガーベラテトラ改と様変わりしている。

「どう、ソレの調子？」

「いい とつても いい……」

なんか、凄く気に入つてもらえてるらしい。

製作者として、また対面で相手する身としては想定以上の性能を出している事にホツとしている。

三影だからと言うのもある、ただ人に渡す以上は多少のミスも許されない。MK-IIの製作の経験があつたから、その分勝手は解つていたつもりでいた。

ただ取り掛かつてみると想像以上に難しい。市販品をベースに色々削つたり取り付けたりするのと、一から別のものを作り出すのとでは次元が違つた。

作つたはいいものの、膝の可動域がおかしかつたり、肘の関節が弱かつたり、腰回りが柔らかすぎて上を向くとフレームが歪んだりと、

修正と試行錯誤の連続。

よく友人が整備士とエンジニアは根性と言つてたが、あながち間違つてない。修正できるまで何度も、何時間でも作業を続けると、最後の最後に割とどうとでもなる事がある。

故に今、テトラ改は現段階で最高のLBXとしてフィールドに立っている。

試しに、適当に攻撃を仕掛けてみよう。

「じゃ、今度は俺から」

全体的に丸みを浴びたフォルムと、黄色に統一された機体の肩部、腕部、胸部のミサイルポッドから多数の飛翔体が放たれ、煙を撒き散らしながらテトラ改を追尾していく。

ミサイル同士が接触して誤爆しないかヒヤヒヤしたが、心配をよそにそれぞれが異なる軌道で同じ目標を追い始める。

三影も直ぐに動く。ただ逃げるのではなく、追つてくるミサイルを撃ち落していく。

腕部、頭部のバルカンと主兵装のビームマシンガン、時にはサーベルで切り落とすなどかなり破天荒だ。

また時には、体操選手の様な身のこなしで空中を高らかに飛んでいく。

あと、テトラ改は高速移動時、他のLBXと違いスラスターがオーバヒしない限りは足を付けずに高速移動を行う事ができる。

他の機体がバツテリーを消費しながら必死に走つて移動する中、こいつだけはホバー機以上のスピードで地上を移動することができます。

そう言つた機体性能に、プレイヤーが翻弄されない様にCCMとCPUにも手を加えてある。手を加えたのが技研なので、何をやつたかは定かではないが、少なくとも入力信号がウンタラカンタラと言つていたのは覚えている。

まあその甲斐あつて、こうしてフイールドを跳ねたり駆け巡つたりと、従来のLBXとは比較にならない性能を持つている。

「悟、これ 淫い……」

三影から語彙力が失われている……

いや、実際俺も完成した当初はそう思つたよ。

武装の威力、素の耐久値、移動力等、他企業のLBXと比べても数世代上の性能を有している。

ただ惜しむらくは、このすぐ後に、真正面からリニア新幹線を止め化け物プロトゼンとか、ホビーの癖にマツハで空を飛ぶオーパーツ等が世に放たれ、そいつらの性能と比べたら一歩も二歩も劣つてゐるだろう。

いや、まあ……主人公勢が使うつて言つたらそれまでだけど。1人の製作者としては、やつぱりちょっと凹むよね。

まあ、だからと言って山野淳一郎に成りたいとも思わないし、憧れも抱かないけど。

あいつテロリストだし。憧れと言うか、目指したいと思うのは、やつぱり宇宙国宝たる真田さんでしょ。

「そこ！」

なんてこと考えてると、追つ手のミサイルを片付けたテトラ改が目の前に。

普通だつたらシールドで防ぐなりするところだが、最初から火力だ

けを追求した潔い機体故、シールド等の防御装備を一切積んでいない。

ミサイルはクールダウン中、咄嗟に使えるのはビームライフル程度。ただし、この機体の自衛能力を甘く見てもらつては困る。

距離を詰めて、サーベルを引き抜いて切り掛かつてくるなら尚更効果が期待できると言うもの。

気取られない様に、持と手持ちのビームライフルで出来る限りの抵抗を行う。何も知らない三影は、それが精一杯と思っているのか、どんどん距離を詰める。

ついに至近距離、ライフルよりサーベルが有利な距離。少なからず、三影は自分の攻撃が必ず当たると、不可避だと思つていてる。

「この瞬間を待つていたんだー！」

完全な不意打ち、次々と不規則に広がつて進む光線がテトラ改を襲い、さつきまでの勢いを一気に失わせた。

火力に振り切つても尚、一定の自衛力を持つ所以はこの腹部拡散ビーム砲がもつストッピングパワーにある。

散弾同様に、扇状に広がつていくビームが至近距離ではほぼ全ての機体を絡め取り、威力自体も高い為に近距離までなら追撃にも使える、この機体の長所だ。

そして近距離での戦闘スタイルは、この腹部^腹拡散ビーム砲からの格闘が基本コンボになる。

「貫つたあ！」

「！」

ほぼ初見の不意打ちコンボ、自分でテトラ改を最高の性能と言つて
あいてなんだが、初見は初見。まず避けられないと確信していた。

しかしどうだ。三影は咄嗟にビームサーベルを振り抜き、迫つてい
たビームサーベルを弾き返してかた。
さすがうちの技研だ。プレイヤーの反応速度を、機体の動作に即

座に反映させる。あの改造が最大限活かされている。

例えるなら、対戦ゲームで露骨に現れる回線性能の差。CPUやC
M内のECU、その他センサ諸々の性能が、コア・パーツやフレーム
よりバトルに与える影響が高い。

この手のゲームもやっぱりハードウェアよりソフトウェアが重要
らしい。

中々に面白い。テトラ改自体、他のLBXより機体が大きい故に余
裕もあるから、後々付け足したりも出来そうだ。

「まだ、まだ試したい事が ある……！」

「三影、ステイスティ」

三影が興奮を抑えられてない……（2度目）

普段は物静かで何か喋つても一言二言。口数も少なく、服装のせい
で見る人によつては、所謂地雷系に区分される三影だが、今だけは年
相応にはしやいでいる。

感情が無いわけじゃない。ただそれでも希薄な方で、あまりそう
言つた仕草を表に出さない。特に郷田に憧れていないのもあって、尚
更見る機会が少なかつた。

故にギャップの差と言うか、ちよつと可愛い以外に形容し難い。綾
波が笑つた時、シンジくんも同じことを思つたに違ひない。

こんな天使の笑顔、独り占めして大丈夫なんですか？

「はーい。じゃあ、今度は三影が動きたい様に動いてみて
「うん！」

ううん、やつぱり天使。

「あ、悟！」

商店街にある定食屋の屋外テラスで遅めの昼飯を食べていたら、通りかかったバンに名前を呼ばれた。

とは言え、口に含んだまま振り向くのはモラル的にも行儀的にも悪い。それやっていいのは例の海賊王くらいだ。

ある程度噛み碎いたらしたら飲み込む。

「むぐ……バンじやん。そらに郷田先輩まで、どうした？」

「ちょっとレックスの所にな。用が済んで商店街を歩いてたらた、お前らが見えたんだ」

郷田の口振りから、今日が超プラズマバーストの伝承日だつたらしい。バンも心なしか高揚している様に見える。

そうなると、バン達は朝からスカーレット隊したシーカー本部や、その煽りを喰らって閉鎖された喫茶店に行つたり、郷田の古巣に行つ

たりおあつちへこつちへ駆け巡っていたと言うわけだ。

こつちは朝からぶつ通しでバトル三昧で、休日を満喫していたけど。

「はあゝ成る程。予定がないなら、バン達も一緒に食べてかない？
勿論、郷田先輩も。今なら奢りますよ？」

「俺にも体面つてもんがある…………のもそうだが、俺がいると話しずらいだろ。気持ちは受け取るさ、お前らだけで食つとけ」

そう言つて足早に郷田は現場を後にする。

中学生とは言え、ミソラ町の一角に勢力圏を築く不良共を仕切る番長。それが二つ下の後輩に飯を奢られる時を見られた日には、それをダシに舐めてかかる奴もいるだろう。

そうじやなくとも、先輩が後輩に飯代を奢つてもらうと言るのは、余程お互いが親密でもなければ悪い見方をされるのが多い。

あとは先輩の不良が1人混じっていたら言う気遣いだろか。

「ああ言つてるし、バン達もどう？」

「て事があつてな」

「完全に蚊帳の外だつた」

食事ついでにバン達から話を聞く事で、ここ数週間で何があつたかを知る事ができた。

大体アングラビシダスあたりからほぼ別行動、そしてお家の都合で学校もほぼ休講してたので、話を聞こうにも時間が合わない事の方が

多かった。

今危惧すべきは、海道義光もそうだが今世紀最大のテロリストが世に放たれた事だ。

久々のシャバで息子に会いたかったのか、目的があつたからとは言え大会にやべーキャラを演じて緊急参戦するくらいだ。

「まあ、こつちとしては悟がサイバーランスで働いてたって事の方が驚きだけどね」

「……納得。最近学校にも 家にも居ないから 心配だつた」

「だよなあ、どうりで最近学校で見かけない訳だぜ」

「働いてると言うか……アレだよ、教育実習生と同じ。まだ研修中」

研修中とは言つても、会社の新しいプロジェクトにはズブズブに足を突つ込んで関わってるけどな。

研修中の割に、自由に施設使わせてもらつたりしてるけどな。何であんなに自由にさせてくれるのか、逆に心配になつてくるくらいだ。

「それより、カズやアミもアルテミスに出るんだつて？」

「バン1人でつて訳にはいかないだろ？」

「正直、1人じゃ不安だつたんだ。でもカズとアミが来てくれるなら安心して戦える！」

まさにユウジヨウ。

まあ、舞台ステージは否応に万人の視線と気迫を受ける場所。そんな場所に年端も行かない少年が1人放り込まれれば、萎縮して飲まってしまうかもしれない。

ただまあ、バンに限つてはメンタルの閾値が高めに設定されてるから、余程のことが無ければヘコタレはしないだろう。

「まあ、俺にできる事があつたら言つてくれ。多少の改造なら引き受けられるし」

「マジ!!? じゃあハンター頼んでもいいか□!」

「じゃあ私のクノイチも」

「俺のアキレスも頼んでいいか!!?」

「じゃあ 私も」

「おいちよつと待て」

まだ具体的にどうするとも言つてないのに、何だこの食いつき様は!!? 水族館の鯉じゃないんだから、もうちよつと節度守りなさいよ。

が、言い出したからには腹を括るべきか。取り敢えず営業のマニュアルに書いてあつた通りにしなくては……あんまり手がかからないのがいいなあ。

場所はお台場。

今日は世界大会当日。通勤時間やピーク時でもないのに電車は人でごつた返し、幹線道路は乗用車で埋め尽くされ、路線バスはもはや缶詰状態。

駐車場も駐輪場もパンパンで、バスはひつきりなしに駅と会場をピストン輸送している。その割にはスタジアム前はかなり平和な空間になっている。

元々の収容人数が多いのと、スタジアム自体が割とデカいので入り口が複数設置されていて、中に商業施設等に人間が分散しているお陰だ。

多くても国内外からの参加選手が見れるデカい停留所くらい。それ以外は人混みも少ないし、歩道も割と空いてるからスイスイ進む。三影が少し遅れるから、人が少ないので合流時に有難い。

……でもやっぱり、全体的に広くなりすぎて違和感がすごい。どちらかと言えば日本よりシドニーとかニューヨークとか、あの辺の再開発地区を思い出す。

「遂に来ちまつたなあ、アルテミス」

「ああ。遂にここまで来たんだ！」

子連れの家族や大人が多い中に子供だけと言うのは割と目立つ様で、歩いていると先についていたバン達を見つけた。

「よう。昨日ぶり」

「お、悟か。途中大丈夫だつたか?」

「まあ、なんとか。それよか、調子はどう?」

「初めてつて事もあるけど、いつもと変わらないわ。下手に緊張する」と強張つちやうし」

変に緊張してるわけでもない。寧ろ純粹に大会を楽しみにしている様で、試合はまだかまだかと言う感じだ。

贅沢言わないから、そのメンタル全部くれないかなあ……無理だろうなあ……

「そう言えば、三影はどうしたんだ?」

「ちょっと遅れて来る。お台場まで来たら連絡するらしいから、途中迎えで抜けるかも」

「気を付けてよね? 何処にイノベーターの刺客が居るか、分からないうから」

「居たとしたらスタジアム内だろうけど、気にしては見るよ」

確かに紛れっていてもおかしくはない。

政治の中枢に風呂場の黒カビの様に長年へばりついてるだけあって、その辺向こうはかなり気を遣つていてる。

まあ、ここまで来る間に何もなかつたつて事は、もうスタジアム外では何も起こらないのと同じ。

これで交通機関が大規模に遅延したり、バン達が道中襲撃されたとかなら話は別だけど、流石に露骨すぎる手を使つて来るほど間抜けじゃないだろう。

「ま、公の場で手を出して来るほど馬鹿じやな……うお!!?」

一番外側、車道側に立つていたカズのすぐ後ろを、法定速度以上の速度で走り去つていく。

妙に静かだと思つたら、タイヤがついてなかつた。磁力か反重力でも使つてゐるのか、その割には車体はブレずに安定して加速も良い。まだタイヤが主流の時代故に、見た目の異色さも相まつて注目が集まる。

そのまま通り過ぎていくかと思えば、スタジアム前の停留所に止まる。全体的に黒く威圧感のある車が止まつた。

「何だアレ？」

「ああ、アレ神谷重工の車だよ」

「神谷？　あそこ誰か居たか？」

「さあ…誰と言われても、去年もそんな感じだつたし……」

周囲は困惑、停留所にいる一同はもつと困惑しているだろう。

言われてみれば、神谷重工はアルテミスへの出場は示していても、誰が出るかは明言していなかつた。

神谷自体も新興企業、そしてそんな成長著しい企業が何の宣伝もせずに大会へと送り出す謎のLBX。プレイヤー。人目を引く理由には十分過ぎる。

群衆の目が集中する中、車のドアが開くとバン達にとつては最早顔見知りの人間が降りて来る。

「海道ジン!!?」

「あいつ、神谷重工の選手なのか？」

こつちを見るなり何を言うわけでもなく、特に視線を気にする事なくそのままスタジアム内に入つていく。

秒殺の名は海外でも有名らしいのか、選手一同の視線には闘争心が溢れている。

怖え……とは思つたけど、トライアミューズメントタワーだと毎日こんな感じだつたな。あそこは視線より先に暴言が飛んできて、次いで手と足が飛んでくる無法地帯だ。

そう思うと行動や言動に移さないだけで平和な方だ。実に理性的で良い！（感覚麻痺）

「待つて、また誰か降りてきたわよ」

海道ジンが降りてすぐ、別の人物が姿を現す。

セミボブだつた髪はポニーテールとして後ろに纏められたが、前髪のメカクレは相変わらず。服装も大人しめの物から私立校みたいなきちんとして黒い制服を身を包んでいる。

何故か俺の個人情報を中抜きしていて一方通視認している謎のサイコスキヤニング女。

最早面影が残つてゐるか怪しいラインだが、これでも後々の重要人物、灰原ユウヤ…………じゃなかつた。灰原ユウナだ。

とは言え、周りは拍子抜けだらう。海道ジンと共に降りてきた謎のプレイヤーで、前者は単身で挑むことが決定している故、チームを組む事はない。

そして神谷はチームを送り込むと言つていた。となると後者の人間が、神谷重工が推薦しているLBXプレイヤーとなる。

で、向こうは辺りを見渡してこつちを視認するなり、大手を振つて来る。やめろよ、関係者だと思われるだろ。

「……なあ、アイツ悟に手を振つてないか？」

「奇遇だな、俺も悟に視線を向けてる気がする」

「奇遇ね。私もそう思うわ」

ほらもう飛び火してきた。

「なあカズ。アサシンの時の覚えてるか？」

「ああ……ああ!?」？　おい、まさか……」

「そうそう。アイツ」

カズが見たのは姿だけ。それも身体のラインが見えない服装で、顔も深くフードを被つてたせいで全く視認できていなかつた。バンとアミは言わずもがな。会つてすらないので存在自体を知るはずがない。

2度目は待つていたかの様に現れた。服装も容姿も当たつて普通で、向こうがバラさなかつたら一生氣付かなかつただろう。

元の生氣皆無の根暗みたいな感じだつたらまだ良かつたが、あの精神状態で行動力もある。バン達には悪いが、大会本番でのジャッジの動きが気になる所。

「つて事があつてですね」

「海道ジン以外にも、イノベーターにはプレイヤーがいるつて事ね」

「だけど、せつかく掴んだチャンスなんだ。絶対に負けない！」

「おう！　悟の分まであん時の借りを返してやるぜ！」

バンは海道邸での、アミはアングラビシダスでの、カズはアサシンの一件での雪辱を晴らさんとばかりと戦意は高い。

不確定要素はあるが、まあアングラビシダスの時もそんな感じだつたし、あとバン達だし何とかなるでしょ（メタ）

じゃあそろそろ受付に、という時に携帯に通知が入る。

宛名は遅れてくると言っていた三影からだ。

「あ、悪い。ちょっと迎え行つてくれる」

そう言つて足早にバン達の元を後にする。

「もしもし三影？ 今どの辺？」

開会式まで後數十分というのもあって、朝来た時より人が多く流れが早いなつて來た。迎えに来て何だけど、下手したら俺が流されて迷子になつてしまふかも知れない。

なので、仕方なく電話で位置を確認する事に。

昔は移動でこんな苦労した記憶ないんだけどなあ……

『直ぐそこ。 改札の 近く』

「オッケー。 戻るわ』

場所が判明したので、公式サイトの駅マップと格闘しながらその場所に向かう。

大人の濁流を遡りかき分けて、改札まで戻つてくる。三影は何処かと見渡すが、それっぽい人物は見当たらない。

居ないからと言つて、名前を呼ぶ訳にもいかないから、取り敢えず動いて探すかと思つた時。改札近くのロビーで携帯片手に手招きしているのが見えた。

『こつち』

「……」

おかしい。三影がある場所に来たはずなのに、三影以外の人が居る

……

『悟？』

「あ、はい。今行きます」

あ、三影ですね間違いない。

携帯をしまつて足早に近寄る。確かに三影だ。三影なんだが、普段と違つてその様相は異なつていた。

いつもは黒と碧を基調とした全体的に暗い感じの服で、服装が違つても基本同じ色に統一されていた。

それが今日に限つて全く別物。普段着ていた縞模様のパーカーが、すみれ色のカーデイガンの下にラベンダー色の薄着。

短かつた黒のスカートが桔梗色のタイトパンツに、厚底ブーティーも白黒のキャンバススニーカーに様変わりしている。髪も肩くらいまでのツインテールから、一本に纏めて長くなつたボニーテールとなつて、普段と違つた印象を受ける。

同年代らしく幼さとそれとは別に少し地雷っぽさがあつたが、幼さがフェードアウトしてどこから取つてきたのか物凄く大人びている。

「……その、あんまり 見られるの 恥ずかしい」
「え、ああ……ごめん。その、似合つてるよ。凄く」

「ごめん三影、ちょっとこれ以外の言葉が浮かんでこないんだ。こんな俺を許して欲しい。

「あ、ありがとう……その、嬉しい とつても」

ヴツ（心停止）

「……と、取り敢えず、合流出来たし、行こうか」

「……ん」

「あ、悟。これ」

「ああ、最近CMでよく見る奴だ」

スタジアムについた後、そのままスタンドに……行かず、施設に
出張しに来ている企業ブースや売店を巡り歩いている最中です。

違うんですけど、ちゃんとスタジアムまで来たんです。来たんですけど海外製のLBXとか、普段見ないタイプの造形にお互い目を引かれてしまったんです。

国外に出ることがない身としては、海外産のLBXに間近で見たり触れられる唯一と言つても機会なんです！ タイニー・オービットが稀に世界コラボとかやるけど頻度が少な過ぎて希少なんです！

北米、南米、歐州、インド、中国、オセアニア、アフリカ、中東と

それぞれその地域の歴史的・人物や神話モチーフの特徴的なものが沢山あるんで、どうしても足が止まってしまうんです。

つまり、我々は悪くない（開き直り）

「アタチュルクが許されるなら、近代までなら割と行けそうだなあ」

このように、トルコ建国の父であるムスタファ・ケマル・アタチュルクから名前を取ったLBXも存在する。

ちなみにそれぞれムスタファ、ケマル、アタチュルクと三つのLBXが存在している。いくら何でも分割し過ぎではとは思うけど、カッコいいから良いと思います。

他にも紹介したいものはあるけど、多過ぎて収まりきらないので割愛させてもらうが、アメリカの物だけはテカデカと星条旗カラーラーが施され、重火器でゴテゴテに武装した王道の火力偏重機も居る。

ちなみに名前はコマンドーらしい。名は体を表すとはよく言ったもんだよ。

「結構あるんだね。日本以外にも」

「どう？ 気になるものとかある？」

「これ ショウキョウ？」

デカい扇子の二刀流が特徴的。アマゾネスがベースなものの顔はクノイチの様なツインアイで、全体的に服装もそれっぽい装飾がある。

全体的にオレンジ色で、尚且つ装飾品が多くてやたら手が込んでいるヨウキヒの様な機体だ。

三国無双は
三國無双は
スッゲエ見覚えがあるのは多分氣のせいだろう。確かに樂しくて

やりこんでる時期は、可愛いから性能関係なしに使つてたけど。

「使つて見る?」

「……いいかな」

「? どうして。買うならまだしも操作くらいなら……」

「だつて、悟の あるし」

ヴツ

「だから、いいかなつて」

「……どういたしまして」

嬉しい反面、ここまではつきり言葉にされると少しむず痒くなる。
むず痒くなつた結果、心臓も止まりそうになつた。

今日の三影は本当にいつもと違う。

服ひとつ違うだけで、仕草一つとっても大人びていて、普段の物静
かさが落ち着きへと変貌している。

「ほら、悟。あつちにも 行こ」

そう言つて三影に手を引かれ、企業ブースを余す事なくあつちへ
こつちへと駆け回る事になつた。

大変といえば大変だが、連れ回される身というのも案外悪くない。
三影に身を任せ、暫く見たり聞いたりとブースを満喫した。

ただそのせいで、バン達の予選試合を完全に逃し、スタンドに入つ
た頃には完全に決勝戦が始まる直前だった。カズや郷田は兎も角、ア
ミからのジト目が痛かつた。

今度から、何かあつたら必ず相手に連絡を入れよう（1敗）

『さあ！ 世界一を決めるアルテミスもいよいよ終盤!! 各ブロックから勝ち上がった猛者達が今一堂に介します!!』

スタジアム内に響き渡る司会の声と共に、今か今かとその時を待つ群衆の歓声が重なる。

予選こそ見逃したがここからが本命。デカデカとホログラムでそれぞれの機体と、それを操作するプレイヤーが映される。

気のせいじゃなければこの時点では海外勢は居ない。いくら開催地として負けるわけには行かないと言つてもだ、名だたる海外の強豪その全てが悉く負けるつてヤベーだろ。

「バンの奴、大丈夫か？」

「大丈夫そうじゃないか。海道ジンと同等の実力があるなら、真正面から押しのけて行くだろうし」

一種の指標だ。

アングラビシダスで海道ジンに勝っている点で、少なく見積もつたとしても同等の実力がある。

真正面から挑んで勝ったのなら尚更、相手の機体が変わつていようとその点だけは変わらない。

まあ、最後の最後まで何が起ころかわからないというのを除けば、バンは確実にあの中でも上位者だ。よっぽどのことがない限りは安心して試合を見られる。

「問題が、あるとすれば……」

等の問題が存在する場所を見やる。

最初から隠す気ゼロのサイコスキャニングスーツを見に纏い、当の本人は特に何も思っていないのか平然としている。

「灰原ユウナね」

「強い？」

「どうだか。まともに当たつたと言はずらいのが一回だけ。ただ、実力は間違いなく高いってのは解る。下手したらバンやジンにも迫るくらいには」

カズの言うとおり、戦いと言えるものはただの一度。しかもアイツはそこそこ余裕があつた。

あの時と実力が変わつていなければ、と言う前提だが。それにあの時はシステムを使う素振りすら見せなかつた。システム系は総じて発動中はとんでもない性能に化ける事が多い。

ましてやサイコスキャニング自体、エグザム系統とサイコデバイス等のハイブリットとでも言うべきもの。

被験者の反応速度をいち早く機体に反映させる為に、操作もCCMを使わない。ビルドファイターズよろしく、トラックボール型の何かに他を連動させたりするんだろう。

施術内容が非人道的なんだろうが、頭や手足を切つたり開いたりして詰め込んだりしないだけでも良心的に見えてしまうのが不思議だ。

仮にスキヤニングモードに奴が耐えられるのなら、最高の性能が約束されている。

ダリルローレンツくんもああ言うモビルスーツを欲していくに違いない。

「……なんか、大胆 だよね」

「私もアレを着る勇気はないかなあ……」

まあ、うん。アミやら三影が言いたいことも分かる。

あのスーツ、元のヤツでも結構身体のライン出るんだよね。鳩尾あたりにあつたよく分からんパイプは無くなつてると、全体的にイメージングが行われている。

アレだ、ハイブントルーパーのスーツに近い。細々とした付属品とか、センサ周りの機器が付いてたりと、ミリタリーベースなものに様変わりしている。

「わざわざ着替えたって事は、目を引く以外に何かあるんだろ」「何かつて……何？」

「さあ？ 少なくともLBXに関する事じゃないかな」

流石に明言してどつかのグラサンに怪しまれるのと癪だし、目で見て察せる程度の事を言葉にしておく。

ただ、バンには悪いが正直あの組み合わせで何処まで化けるか楽しみにしている。

あの手のモノは、パイロットが変に安定してると途端に中途半端になる。ただし暴走してシステムに身を任せても、ただ速いだけで動きが単調になる事もある。

ただのおもちゃか、それとも使える産廃なのか。もう少しでそれが解る。

《ファイナルステージは今までと打つて変わつてバトルロワイアル！最後の1人になるまで戦いが続きます!!》

『バトルスタート!!』

さて、始まつて早々バンとジンが互いに一直線に向かっていくが、それをマスクドJとユジンが邪魔する。

ユウナは仕掛けられなかつた為フリーハンド。自分から仕掛けるもよし、勝ち残つた方を殴るもよしと自由な立ち位置に居る。

「あいつ、バン達に潰し合わせるか？」

一対多数を強いられる場面で、極力自分から無理に戦わない事は大切だ。

不利有利を見極めて、自分が有利な状況下で相手を選んで仕掛けるのが大事だ。こう言う一種のTPSだとそれが顕著に現れる。

死にかけの一方を潰すか、余力のある方を潰して返す刀で死にかけを潰すか、逆に無傷の自分に双方が突つ込んでくる場合もある。どつちにしろ、今の灰原は選択肢を選べる有利な立ち位置にいる。

『おおつと！　ここでエンペラーム2、目標を変えてジャッジへと一
目散だ！！　すかさずビビンバードXも後を追うぞ!!』

先に動いたのはジン。機体も実力も未知数だが、放置したら不味いと判断して戦闘に巻き込もうと言う算段らしい。

だがジャッジは動かない。自分の間合いに相手が入ってくるの待つてはいるのか、ただその場でじつとしている。

「やられるんじやないか!?」

エンペラーミニ2、続いてビビンバードXもジャッジを射程圏内に捉える。エンペラーが殴りつけ、ビビンバードが射撃を加える、意図しない連携が生まれた。

「いや、ここからだ」

しかし、攻撃は当たらない。当たるより先にジャッジの方が反応が速かった。

振つてくるメイスを受け流し、射撃で一瞬隙が生まれたビビンバードを殴り飛ばす。吹っ飛ばされ調子良く飛ぶビビンバードはマスフレードJとアキレスのタイマンに割り込む形で墜落。

邪魔者がいなくなり、ジャッジとエンペラーの一騎打ちが始まる。

両者共に西洋甲冑がモデル、騎士同士の一騎討ちの様相に会場は盛り上がる。

「速い……」

「速いのもそうだけど、判断力もある。カズと悟が言つた通り、只者じゃないわね」

おそらくだが、既にスキヤニングモードは発動している。

驚くべきは灰原ユウナの耐久力と言うべきか。本来ならボロ雑巾の状態で、発動直後ですら苦痛で顔を歪めていた筈だが、今回はそんな様子は見られない。

強いて言うなら、動く前に少しだけ苦しそうな表情をしたが、それ

も最初だけで、その後はかなり安定している。

予想通り。被験者が苦痛に耐えられれば、並みのプレイヤーでは歯が立たないレベルの実力。オタクロスの一番弟子でもあるユジンが反応できなかつたのがその証明だ。

『ジャッジとエンペラーの一騎打ち！　互いに打ち合うが決定打はなし!!　物凄い戦いだあ!!』

近接戦で有利なのは鈍重なメイスより、ジャッジの様な片手剣やマスカレードJのレイピア等の近接武器なのだが、そんなの関係なしにエンペラーは軽々とナイフの様にメイスをぶん回す。

初代からパワーアップしたエンペラーM2の馬力がそれを可能にしている。それ以外にも、関節や駆動系もテコ入れされてるだろう。じやなきやバトルの途中で機体と腕が泣き別れすることになる。

両者が決定打に欠ける戦いの最中に、復活したビビンバードが乱入。それを追つていたアキレス、マスカレードJも飛び入り参戦し、場は再び乱戦状態になる。

『アタックファンクション・パワースラッシュ』

乱戦の最中放たれたパワースラッシュは、ジンとオタレッドではなく、鍔迫り合いを演じていたマスカレードJとアキレスへ飛んでいく。

しかし、当たる既の所でマスクドJのファインプレー、アキレスを押し出し尚且つ自分が直撃を受ける事で流れ弾を防ぐ。

等級で言えばノーマルの技とは言え、機体の性能が威力に直結するのか威力はダンチの様で、煙が晴れる以前にまともに食らったマスカレードJは粉々に吹き飛んだ。

バラバラに吹き飛んじまつて！・ミンチよりひでえよ（事実）

『マスカレードJ、ブレイクオーバー!! 謎の実力者、マスクドJ 一歩及ばず敗退です!!』

「おいおい、あんな威力だつたか!?」

「フレームもそうだけど、余程コアパーツが豪勢なものなんでしょう
ね。あんなの、普通じゃありえないもの」

L BXに限らず、バッテリーやモーター等の内部パーツの性能も機
体性能に関わってくる。CPUからモーターまでほぼ特注品だろう
し、そんじょそこの改造品ではまず太刀打ちできないだろう。

機体性能よりジェネレータ出力が優秀だと、ある程度の改造だけさ
れて使い回されることが多いある。

出力も推力も優秀なんで、ちよこつと弄つて主武装だけ変えてその
まま投入しました！で地獄を見たMSも居たな。お前のことだぞト
リストン。

「どんどん 速くなつてく」

サザビーのガムシャラ斬りにも負けない速度でエンペラーを切り
つけるが、向こうもよく動くメイスでその悉くを弾いて躱している。

バンやオタレッドが間に割り込むものの、灰原は難なく全て跳ね除
ける。

ただ流石に選手交代。エンペラーがアキレスを、ビビンバードが
ジヤツジを抑えにかかる。ジン相手に拮抗状態に持つていった勢い
は衰える事なく、またビビンバードもそれに食いついていく。

ただ、そろそろその動きに反してプレイヤーの方に問題が起きてくる。

『もうつたあ!!』

ユジンことオタレッドの言葉と共に、俊敏に動いていたジャッジの動きに、一瞬の隙が生まれる。そんな隙を逃すはずもなく、ビビンバードはヒーローキックを叩き込む。

シールドで受け止める訳でもなく、片手剣で叩き落とす訳でもなく、そのまま攻撃はジャッジの胴体に入り、この試合初めてジャッジが倒れる。

そのまま追撃しても良かつたが、それをせずビビンバードは動きが止める。ジャッジも倒れたまま動かない。

「吐血した!?」

そこまで量は多くない。口元からは血が滲み、鼻血も垂らしている。

流石にバトル中にプレイヤーがダメージを負うなど、ガンダムファイトでもない為想定外の事。オタレッドは困惑、会場は相変わらず歓声が絶えないが、僅かながらも困惑の色も見える。

しかし、等の本人は気にしていないようで、気にせず血を拭いバトルを再開する。

「あのまま やる気なの…?」

気にせず操作を始める灰原、ジャッジの動きも一段と早くなり、眼

前のビビンバードへ標的を絞り肉薄していく。

それとは打つて変わつて、後ろで2人組が青い顔をしている。忙しく携帯に向かつて話しかけてるし、もう1人は機器を操作して止めようともしている。

ああ、これは完全にやつてますわ。暴走して

『な、なんだこの動きは!? サっきとは全く違う、まるでリミッターが外れた様な動きだ! ビビンバードは全くついていけない!!』

ほぼ一方的で、躊躇殺しに近い。ビビンバードは対応すらままならず、そのまま斬り刻まれる。

最後の抵抗で撃つたビビンバードガンも、当たる事なく見当違いの場所へ着弾、その後は抵抗すらできずにジャッジに切り刻まれ、爆散し粉々になつてしまふ。

機体を残さず爆散させただけ、有情言えるだろう。変に残つたせいで躊躇続け、会場を騒然とさせるよりかはまだマシだ。

「あんな一方的に……」

「おいおい、どうなつてんだよアイツは?!」

一連の動きでも相当の負担なのか、拭つた口元や鼻からまた血が垂れ始める。ただ本人がバーサーカーモードなのと、観客がハイになつてるせいか、盛り上がりは最高潮だ。

おいこれ本当に全年齢の大会か? やつてる事が帝政ローマのコロシアムと大差ないか?

司会者も興奮しすぎて止まる気配はない。おいまじでやめろよ、全

國中継で死人映す氣かよ。ここはルール無用の地下闘技場じゃねえんだぞ。

試合に参加でもできれば、バンとその為で連携して破壊することも可能かもしだれなかつたが、今“もしも”的事を考えも無駄だ。

まだアイツから聞きたいことが山程ある。廃人同然の灰原ユウヤとちがつて、灰原ユウナは口が聞ける。イノベーターの内情をある程度把握している筈、今後イレギュラーがあつても対応できる様、情報は仕入れておきたい。

だから、今死なれると俺が困る。あと公共放送も困る。

「バン、聞こえるか？」

《悟!?》

「馬鹿！出来るだけ自然でいるんだ。周りにバレる」

都合よくスタジアムのモニターは灰原とジャッジしか写していない。密通するなら絶好の機会。

それを察してか、慌ててバンが取り繕う。

リミッターをかけて拮抗状態なら、それが無い状態なら最悪バンもジンも片手間に転がされる可能性がある。

「いいかバン。奴を止めるなら、ジャッジを破壊すればいい。それで全て片付く」

《だけど、本当にそれで止まるのか?!》

「後ろの連中が頑張つてるが、外側からの制御を受け付けてない。なら、あの状態を作り出している機器を破壊すればいい。エジプトの時と同じで、あのジャッジさえ破壊すればどうとでもなる」

棒立ちのアキレスをよそに、ジャッジはエンペラーへと流れいく。お互い所属は違うがイノベーター、身内同士で斬り合いを始め

る。

最初とは打つて変わつて、動きがまるつきり変わつたジャッジに翻弄されている。

「だが、タイマンで挑むなよ？ 今のアイツは下手したら海道ジンより強い。癪だが、今だけでも協力するんだ」

『だけど、ジンは納得するのか？』

「納得以前に、向こうは協力するしかない。自分が劣勢だと知れば、余程のことがない限り、一時休戦には応じるさ」

『……分かった。やつてみる！』

「頼むぞ。当分は連絡できそうにない」

通話を切ると同時にモニターにアキレスが映し出され、動き出す。

大会中に選手と連絡を外部から取る等の行為は禁止されているがそれとも警備がザルなのかその他の対策が、この会場には全く施されていない。

やれる事はやつた。後は見守ることしかできない。

当事者でないのに、試合を見ていて生きた心地がない。

レイドボスと化したジャッジに対し、余力は残っているものの連携の面で不安が残るジンとバンの異色のコンビ。

しかし、両者とも機体性能は兎も角として、割と実力が近い。何をやりたいかはお互いなんとなく分かっている。たかが数回のバトルだがそこはライバル同士、意識している分楽なはずだ。

バトオペゲームのレーティング戦でもよく言っていたが、高ランクに行くにつれて周りに合わせられる人間と、そうでない人間で勝ち負けが変わってくる。

行動だけで読み取れと言うのは中々酷な物言いだが、実際それが出来ないとボコボコにやられるのが定め。あの2人が言葉を交わして連携をとるかは別だが、顔と声が聞こえる分オンライン対戦よりもシだ。

「攻めてるようで、結構慎重なんだな」
「初めてで 未知の相手、手の内を 窺つてる」

多少手は抜く、ただし相手の動きは制限させる。無闇に打ち合いを続けるとどうなるかは、ビビンバードが身を持つて示した。

だから深入りせず、かつ相手のペースに飲まれない立ち回りを意識している。

ただ読み合いは出来ても性能まで把握できる訳じゃない。暴走と

は言え、所詮はホビー。外部か内部電力が無くなれば止まるんだろうが、今の所はそんな素振りもない。

システムの恩恵とは言え一時的にパワー負けし、スピードでも負けてる。こう言う時どうするか？ 相手がなんであれよろけハメして速攻を仕掛ける（脳筋）

「仕掛けるぞ！」

どうも向こうも分かつてるようで、バンとジンが仕掛ける。

正面からアキレスが、エンペラーは横合いからの2正面作戦。初めてのデュオにしてはかなり動きが良い。お互い邪魔することなく攻撃を仕掛ける。

攻撃して交代、攻撃して交代、少しの隙に飛んでくる追撃をお互いが阻止、また攻撃して交代。お手本の様な連携プレイ、しかし言葉を介さない高レベルの動きに会場も白熱する。

それでもジャッジの防御は崩せていない。システムの恩恵故か、並々ならぬ反応速度で2人の動きに喰らい付いている。

「あの2人ですら無理なの?!」

気持ちは分かるが、まだ大丈夫だ。確かに責めあぐねているが、当の本人達から焦りは感じられない。

焦らないのは良い事、しかしこつからどうする気だろうか。向こうはなまじ正氣を保つてゐる故に、中途半端な行動はせず持ち前の速度を活かしてくる。

完全に暴走して発狂でもしてくれれば、必殺からのファイナルブレイクを狙えるが、それが通用するほど甘くはないだろう。

ただ、こんな事もあるうかとだ。あの日に頼まれた通り、バンには一応切り札がある。本来は最後の最後、ジンとの戦いの為に用意したものだ。性能は保証しているが、アレが最大の効果を発揮するのは不意打ち。一回限りの撃ち止め武装つて訳じやないが、最初より効き目は薄くなるだろう。

でもケチらず使ってくれー！（建前）

あとデータ欲しいからどんどん使ってくれー！（本音）

「何やつてんだ、やられちまうぞ!?」

エンペラーが割つて入つてヘイトを受け持つたりしているが、向こうはそんな事知らんと言わんばかりに跳ね除け、アキレスに集中する。

片手剣のくせして、ハンマーやランスの打撃や突きをボールのように跳ね返していき、盾すら武器を使う。あのサイズでの馬力、アキレスは防戦一方、気が付けば溶岩湖の絶壁にまで押し返されている。

三影やアミの表情も少し険しくなる。ジンはアングラビシダスや海道邸で、バンとは普段のバトルで実力を知っているだけに、目の前の光景は半ば信じられない様だった。

エンペラーの援護も虚しく、アキレスはどんどん絶壁へと押し込まれていく。当のアキレスは反撃せずただひたすら耐えている。

ただなんの問題もないわけじゃないらしい。灰原は灰原で、片目が充血し、血反吐を吐いてスースを汚し、今にも崩れそうな身体を必死に足で支えている。

息も絶え絶えだが、それでも笑つてられる精神力には脱帽する。

『なんて事だー!! 秒殺の皇女すら木の葉を祓う様にあしらい、片手間でアキレスを追い詰めている!! 何者なんだ灰原ユウナあ!!』

どうやら司会者は徳川財閥の人間らしい（偏見）
もう駄目だ、アイツらは無視しよう。

奴が言う様にバンは追い詰められ、ジンも手が出しようがない。実際一方的に灰原が攻めているし、それをジンが横から阻止しようにも横入りできない状態だ。

ジャッジも無駄に長引かせるつもりもないだろう。インチキ威力のパワースラッシュで決めようとする筈。

どんなLBXでも小技や大技を出せばバツテリーやモーターボーイのためのクールタイムがある。隙があるならそこしか無い。

『灰原選手！ このままパワースラッシュで決めるつもりだあ!!!』

エンペラーを力任せに吹き飛ばし、邪魔者はいなくなつたとシールドを捨てて、両手で持つてして撃ち出そうとしている。

エンペラーは間に合わない、アキレスも身動きは取れない。誰もが勝敗は決したと思つただろう。

『ブグツ!?』

だが、そとはならなかつた。

ここに来て灰原が吐血、耐えきれなくなつたのか悶えて血反吐を吐き続ける。どうやら過剰稼働にとうとう体が耐えられなくなつたらしい。

灰原が反射で手を口に当てる。当然だが人間が操作してる以上、手が操作端末から離れれば信号が入力されずに止まる。操作できる状態でない為、時間が止まつた様にジャッジが一瞬止まる。

「しゃあああああ！ 今だやれえええ！」

つい叫んでしまつた言葉に反応する様に、アキレスシールドの縁から4門の砲口が現れる。砲門は光を溜め込み、いつでも発射可能になつてゐる。

バンが反撃しなかつたのは、あの切り札にエネルギーを溜め込んでいた、まさに天から降つてきたこの瞬間のために。

けたましい音と共に放たれるは粒子砲の一斉射。緑の閃光がジャッジを飲み込み、射線上のすべてのオブジェクトに破壊の限りを尽くす。

だがまだジャッジは倒れた訳じやない。もはや戦闘継続不可能なレベルでボロボロだが、煙と瓦礫の中から這いつくばつて來ていた。

『アタックファンクション』
『インパクトカイザー』

『アタックファンクション』
『ライトニングランス』

待つっていましたと言わんばかりに、蚊帳の外だつたエンペラーが止めを刺すために現れる。

迫り来る溶岩と岩盤の津波と青い閃光に、ジャッジは避けられる事も耐える事もできる筈なく、そのまま濁流と閃光に飲み込まれ爆発四散。

灰原を取り巻いたホログラムは消え失せ、糸の切れた人形の様に倒れ込む。何処の部隊か知らんが、関係者に回収される前に、裏で待機していたであろう救護隊によつてすぐさま収容された。

「終わった?」

「ええ。でも、あの娘大丈夫かしら……」

「……正直、見てて 気分は良くない」

『選手救護の為、一時試合を中止します。再開は30分後を目処にしております。お手数ですがそれまでお待ちください』

内心遅くない? とは思いつつ、流れるアナウンスに耳を傾けた。

「丁度いいや。三影、一回外行こ」

「ん:でも、カズと アミは?」

「やる事ないしなあ、一緒に……」

「私達はここにいるわ! でも、あんまり遠くに行かないでよ?」

なんかすつごい横入りを見た気がしたが、どうやらカズとアミは会場内に残るらしい。

「……あの、本当に大丈夫?」

「大丈夫よ、ねえカズ?」

「えつ」

「カズ?」

「……はい……」

……ま、まあカズがちょっと可哀想だが、アミがそう言つてる事だし、さつさと外に行かせてもらうか。

「ほら、悟 行こ!」

そう言つて三影に手を引かれながら、スタンドを後にすると。

『ああ、悟か?』

「どうも宇崎さん、折り入つて頼みたい事があるんです」

会場を抜け出して、ブース近くの食堂に待機している。

連絡だけなら中でも良かつたが、どうも会場内だと外部との連絡は何故かできない。だから態々外まで出向いて来たと言う訳だ。

「宇崎さん、さつきの試合見てました?」

『ああ、彼女の事か。我々シーカーの方で保護している。当面は我が社が医療分野で提携してゐる病院に置うつもりだ』

手出すの早ツ……いや、言い方がちよつと卑しいな。既に手回し済みと言う訳だ。

ただ、こちらとしても助かるのは事実、それに灰原には色々と聞きたい事がある。保護したのがシーカーなら、身内つて事でバン達の名前が使えるし宇崎の言葉も使える。場所も安全も確保され尚更都合がいい。

「容体はどうですか? 派手に吐血してましたけど」

『まだ詳しい事は分からないが、少なくとも今すぐ死ぬと言う訳じや無いらしい。ただ、当分は院内生活なのは確かだと』

「分かりました。病院の住所とか分かります?』

『ああ、近くにサイバーランスの本社がある。あの近辺で病院はそこ以外ないから、分かりやすいだろう。近くの施設にうちの部隊が駐屯してる場所もある。何かあつたらそこに駆け込むといい』

場所も距離も丁度いい。いつも使ってるバス停とは反対なのが面倒だが、近所のコンビニに行くよりは近い。

逆に首都圏外や郊外の医療施設に移される方が問題だ。自分の足で行くのは難しいし、時間も限られる。

なんでよりによつて提携してるのがそこの病院なのかは、ちょっと勘織りたくもあるが……まあ、どうせタイニーオービットは来年には潰れてる会社だ。気にしない様にはしよう。

「じゃ、そろそろ切りますね」

『ああ、そつちも気を付けてな』

通話が終わり、堅苦しい空気もなくなる。

やつぱり宇崎は身内や子供に甘い。まさか、頼んですぐ所在を明らかにしてくるとは思わなかつた。しかも盗聴されてるかもしれない電話越しで。

タイニーオービット社の重役の姿か？ これが……

……いや、まだだから潰れるんだけども。

例えるなら言うなら本能寺後の織田家だな。先代の信長が死んで、父のもとで経験と経験を積んだ信忠こと宇崎悠介跡が継ぐがそれも死んで、最後に経験も経験もないけど行動力だけはある信雄こと宇崎拓也が家督を継いですぐに滅ぶ。

人生山あり谷ありとは言うけど、ここまでジェットコースターの様に短期間でこれ以上は上がらない絶頂期まで来て、あとは降るのみと

どんどん急降下していくとは、まあ予想なんてできないよね。

「……時間を見計らつて、行くしかないか」

近場とはいって、好き勝手出入りできるものもあるまい。病院ってそう言うもんだし、別に文句はない。

ただ目の前に答えがあるのに、それを見たり聞けないと言うのは中々にもどかしいものがある。

するいでしょ普通？ 向こうは知ってるのにこつちは知る由もないとか、不公平だよ不公平。

ただでさえ三影との接点も曖昧なんだ。これ以上俺を知る謎の人物がが増えたら、宗教にハマった柴○理恵みたいに頭がパーンツ！ つてなるかもしれない。勿論ストレスでだ。

……まあ、時間だけは沢山ある、余裕を持てると言う事は素晴らしい。そう考える様にしよう。

「お待たせ」

「あ、ありがと」

……後回しでいいか（ダメ人間）

難しい事は考えない。三影が持つて来てくれたアイスを食べて、いつそう頭の片隅に追いやることにした。

「なあ、ほんとに大丈夫なのか？」

「まだ言うか？ さつきも言つたけど、気にするだけ無駄だぞ」

バンとジンの一騎打ちは何事もなく決着がついた。機体の性能とプレイスキルで上手のジンに、手数の多さと最後の最後まで極秘技を隠していたバンが勝利した。

その後に起こった出来事に関しては、今の俺達じやどうこうする事は出来ない。よつて、ただ見ているだけだったが、あの少なくともバンはかなり精神的に参つている。

メタナスGXはいいとして、アキレスは修復不可能なレベルで破壊され、中身のプラチナカプセルだけ丁寧に抜き取られてしまった。

その上大会は事実上中止と言う形で打ち切られ、その後の対応も後手後手であり、優勝者以下選手一同への対応の遅さに割と批判されている。

運営が気の毒なのはさて置いて、経緯と状況は違えど俺も同じ経験をしている。

あの時は完全に彼我の実力差が明確だつたから、多少心の中で整理は出来たし納得もできた。

ただ納得は出来ても悔しいのは変わらない。特に、実力でも何でもない相手にしてやられたバンに関しては余計そうだろう。

と、言うことでここは一つ。我々サイバーランス社へバンをお招きする事になった。

「入つて、どうぞ」
「う、うん……」

研究棟というか、開発部の区域には応接間とか来賓をもてなす場所なんてないから、普段使ってる部屋に案内する。

本当はコーラとかジュース系が有れば良かつたが、冷蔵庫は共有スペース、仕方がないので誰も手をつけていないアイスティーと飲みチョコを出しておく。

「あのショーケース、全部サイバーランスの？」

早速バンが興味を示した。

バンが指差すショーケースには、開発部に置ききれなかつた複数のプロトタイプがいくつも入つていて。

シンプルに纏まつた量産機系列から、色々付け加えてゴテゴテにした特注機ゼクツヅガエイやワンオフ機シャアディイジエと、ここだけでも数十もの機体がズラッと並んでいる。

「動かしてみる？」

「え、いいの？」

「平気平気。制作に携わった身としては、動かしてみた感想とか聞きたいし」

ショーケースから幾つか手に取つてテーブルの上に並べ、いつ出したのか分からぬ展開状態のDキューブを引っ張つてくる。

目の前に未知の体験が待つてゐるとなると、いくら凹んでいても気分も変わると言うもの。バンも若干気分が上がつてゐるらしい。

一つ一つ手に取つていき、今までにないシルエットのLBXに触れている。

「……かなり作り込まれてるね。フレームの装飾もそうだけど、武装の取り付け位置や重心の位置まで、全部が噛み合うようになってる」

忘れられたがちだが、バンはこの手のことに関してはリュウと同じオタクに数えられるタイプだ。

アミや北島夫妻から得た知識と、アキレスを扱うにあたっての整備経験がある分、ことLBXに関しては特に詳しく、場合によつては厳しい意見も出す。

そのバンが特に否定しなかつたのは中々好感触。招いた甲斐があつたと言うもの。

バンに立ち直つて欲しいと言うのは否定しない。アミとカズから頼まれたのもある。が、実際のところは、今回に関してはうちの開発した製品がちゃんと受け入れられるか、車で言うところの試乗体験を兼ねていてるから心置きなくOKを出した面もある。

ただやるからには相手に損をさせない、それがサイバーランスのやり方だ。

「はい、専用CCM」
「ありがとう」

最初のしんみりから一転して、表情も明るく声もハリが出てきた。いいぞ、調子が上がつてゐならこつちもやり易い。

一通りバンの好きに動かさせて、また様子を見る。多少は口出しそるだろうが、危なかつたり聞きたいことがある時だけ口を挟む程度に留めておく。

「は、速い！」

あ、早速ダメそう。

頑丈だからいいけど慣れないスラスター移動にあつちこつちぶつけてながら進んで、盛大に転げている。ヅダでもないのにぐちやぐちやになりそうだったが、その程度で壊れるヤワには作っていない。

ただ少しすれば慣れてきたか、最初のお粗末な動きからだんだん正面な動きになつて來た。

順応が速すぎるが、まあバンだし気いたら負けだ。慣れてきた頃にそろそろ例の話をするとしよう。

「さて、バン。お前をここに呼んだのは他でもない。こつちで用意させてもらつた機体、全て動かしてもらう」「へえ、全部……え、全部？」

俺の言葉にバンは畠然としている。

「ここに置いてあるもの全てつて訳じゃないけど、触つたり使つてみたいつて言うなら融通はするよ」

「ほ、本当に？　本当の本当!？」

おう、急に元気になるじやないか。

まあそりだらうな、特にバン、お前みたいな奴にはこの条件は特に効くだらう。なんせあと2年、いや下手したら一年で株価も名声も失つてクラスターイングラム社の子会社化するタイニーオービット社と違い、我らサイバーランス社はこれから先も存続し続ける。

遠慮するな、おかわりもあるぞ！（事実）

「いやまあ……ちゃんとやつてよ?」

「勿論! で、何すればいいの!?」

おお、なんか完全復活してしまった。いや、いつまでも引きずつている方が本人にも周りにもよくない。これはこれで良い方向に行つてるんだろう。

「いや、さつきみたいに動かして評価してもらえればいいかな」「解つた!……でもさ、これ。どつちかと言うと専属チームとかテストプレイヤーの仕事じゃないのか?」

「いや、うちタイニーオービットとか神谷とか、名だたる企業みたいな資本力ないから……」

今でこそLBXのお陰である程度認知されているサイバーランス社だが、元は衛星のバッテリーや電子機器、モーターやステルス技術等を開発・製造していた中小企業だ。

スポンサーだからと言つてポンと専属やらテスターを雇つたりと
いった、盛大な使い方が出来るほど安定していない。

先輩達が節制という名の鍊金術に励むのもそれらが理由らしい。
極めすぎて参考にならないけど。

「まあ、そういう事だから。よろしく頼む」

「ああ、任された!」

「これが、新しいLBXか？」

普段は海道義光とその団いの人間以外は入る事がない海道邸に、海道ジンは1人の男を外部から招いていた。

身なりを整えて社員証を首掛けた彼は、サイバーランス社の営業担当部から出向いており、彼が海道邸に足を踏み入れることが出来たのは、ジンが彼の提案を了承したからである。

「ええ、今のサイバーランスが用いる技術を導入し、エンペラーよりも速い反応速度に加え、高い機動力と打撃力を誇ります」

「……」

「疑つても構いませんが、受けていただいた以上は我々としても貴女に損はさせませんよ」

「そこを疑つてはいる訳じやない。ただ、随分と速いな」

想定していたよりも納期が速い、ジンの疑問はそこにあつた。

世界大会が煮え切らない形で終わりを迎えてからはや5日。サイバーランスからの誘いがあつたのがつい3日前、納入日には事前に連絡すると言われたが、この対応の速さにジンは内心少し驚いていた。

「ええ、最近特別枠で入つてきてくれた”新入社員”的子に大分助けられます。今回のゼノンも、彼らの頑張りのお陰です」

「……そう」

新参でありながら、ゼノンの開発に携われる程に信頼されている技術者。サイバーランスにはタイニーオービット、そして神谷にも負けない人材が揃っていると、ジンは認識を改める。

まあ、実際に居るのは技術者ではなく資材の鍊金術師や予算の魔術師が大量に在籍しており、少ない予算で数多の試作品や実験機を作り上げる為、上は上で途轍もない苦労を抱えている。

その荒波と理不尽に揉まれ、鍊金術師の扉を開けかけている少年が1人いるが、それは今関係ないので捨てておく。

「フレームもコアパーツも、貴女の期待に応えられる代物で固めてあります。エンペラーよりも使い易く、ジンさんの実力を最大限反映させられるでしょう」

「……努力しよう」

「データに関しましては……」

「解つている。そちらが提示した条件で構わない」

CCMからゼノンの操作権限を委譲される。

ジンにとつて神谷重工製以外を扱うのは初めてである。その筈だが、多少動かしてみた時に妙に手が馴染む感覚があつた。

以前から自分が使うことを想定されたかのような出来栄えに、賞賛しつつも不気味さを覚えた。

だが安心して欲しい。サイバーランスこいつらの製品は確かにグレーゾーンが多いが、購入者や顧客には絶対に損はさせないのだ。

「ああ、最後にジンさん。我が社にはこんなサービスも有りますよ?」

そう言つて、ビジネスバックから複数枚の資料をジンに渡す。渡された資料の一枚には、デカデカとサイバーランスの新製品とそれらLBXのイラストが描かれていた。

「これは?」

「我々がタイニーオービット社一強を打破すべく、社運を賭けて行っているプロジェクトですよ。来週にも発表予定ですので、気になつたらいつでもお声かけ下さい。では失礼します」

そう言つて手渡しし、足早にジンの元を後にする。

別段、サイバーランスのLBXに興味がある訳ではないが、まあ渡されたからには見ておくかと、テーブルに置かれたそことそこ厚い資料に手を伸ばす。

現時点で山野淳一郎とかいうチートと提携してオーディーンやらを世に放つ事になるタイニーオービットは別として、ゼノンはサイバーランスが独自開発した一品。

現時点でもどの勢力のLBXにも力負けすることはない。そんな機体を製造した企業が、打倒タイニーオービットを掲げて進める新型LBXのプロジェクトだ。

資料の厚さもそうだが、中身の内容もかなりみっちり組み込まれている。内容一つとっても本腰なのが見てとれた。

「……」

大部分がプロジェクト内容で埋め尽くされているが、後半になると自社PRと社員構成が載っている。今のところ就活するレベルの学生ではないジンにとつては、イマイチどうでも良い部分だ。

なので後半は流し読みで、気になる部分だけ見る程度に済ませる事にした。

「……？」

で、早速目につく物がありページを遡る。

良くある企業の部署ごとの集合写真だが、その一つである開発部門。周りがガタイの良い大人や青年に囲まれる中、1人だけ小柄な少年と呼べる、見覚えのある男子を見つけた。

名簿が載ったページを開くと一人一人の個人写真と役職、名前が載っている欄がある。そこからは特に苦もなく見つける事ができた。

まだ幼さが抜け切っていない顔の中に、己が知っているものとは違う目をしていた。何処か別人の様で、途轍もない違和感を覚えていた。

思い出すのは、山野バンと仙道ダイキの仲裁に入った時。あの時、自分を見る彼の目と彼自身に感じた違和感が、ふと浮かび上がる。

自分を覚えていない素振りだった。いや、知らなかつたかの様な振る舞いで、ジン自身も動搖のせいで声をかける事も出来なかつた。

「…覚えているだろうか、私の事……」

執事にも聞こえない声量で、そう呟く。